

---

# 魔性の瞳

冬泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔性の瞳

### 【著者名】

Z7936E

【作者名】  
冬泉

### 【あらすじ】

“人が、人で有り続けるために狂わねばならないとしたら……”  
　　舞踏会で出会った不思議な少女の言葉に、魔剣士エリアドは一瞬言葉を失つた。それは運命的な邂逅……“夢見姫”と呼ばれたヴェロンディ連合王国が王女、マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディと、魔剣“阿修羅”を帯びし魔剣士、エリアド・ムーンシャドウとの数奇な出会いだつた……。

## 魔性の瞳 -00 「主要登場人物紹介」（前書き）

本内容は多少のネタバレを含みます。誠に恐縮ですが、その旨ご了解下さい。

## あらすじ

この物語は、異世界であるエルス(Orinth)にあるエーリック大陸フランースに於ける物語で「コモン歴585年の世界」を舞台にしています。焦点となる中原の国、ヴェロンディ連合王国はフリヨンディ王国とヴエルナ法王領が合併して成立したばかりで国の求心力がまだ弱く、北の魔国と苦しい戦いを続けています。魔の脅威に対し、フランース<sup>イースタン</sup>東部諸国の大同団結は漸くその兆しが現れたばかりですが、西方の漠羅爾<sup>ウェスタン</sup>新王朝諸国との連携はまだあります。イースタン全土には遙かな過去に封印されたといふ暗黒邪神の影が忍び寄つており、重苦しい世の中でした。

そんな中で、「封印戦争」に向けて重要な絆の一つが偶発的に生じました。それは、“阿修羅”を帯びる魔剣士エリアドと、“夢見姫”と呼ばれるレムリアの出会いです。その出会いは、コモン歴585年に、ヴェロンディ連合王国の王都シェンドルにて、国王主催の宫廷舞踏会で起こりました。そして、この物語は一人の出会いの少し前からの話です。

“魔性の瞳”と忌み嫌われたレムリアは、ヴェロンディ十六公家の一つであるヴエルボボンクのウイルフリック子爵に預けられました。そして、レムリアが十七になつた誕生日に、兄王アーサー・アートリムの戴冠式に呼ばれ、故国ヴェロンディに戻ることになりました。しかし、レムリアを待ち受ける故国の状況は、彼女が国を離れた二年前とほとんど変わっていませんでした。相変わらず白い目で見られ、周囲から敬遠されるレムリアですが、義兄のアーサーがヴェロンディ国王になつたことから、政略の道具としても狙われる

ことにもなりました。レムリアの苦難の日々は、何時安らぐのでしょうか・・・。

## 主要登場人物

マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ 「Margaret Lemria of Velonedy 162cm/B」  
本編の主役の一人。ヴェロンディ連合王国国王アーサー・アートリムの姉妹で、希代の“夢見”の力を有している。艶やかな黒髪に黒い瞳が抜けるように白い肌に栄える絶世の美少女だが、その漆黒の瞳は“魔性の瞳”と呼ばれ、災厄を呼ぶと一般に忌み嫌われている。ヴエルベの森の守護の剣「タイン」(Tyne)を帯びる。

エリアド・ムーンシャドウ 「Erillard Moonshadow 183cm/O」

本編の主役の一人。“創世の魔剣”と呼ばれる『阿修羅』を帯びる“魔剣士”。アーサー・アートリム国王救出の功により授与されたヴェロンディ連合王国の自由騎士位(Free Knight)を有する。星々と放浪者に加護を与えるセレスティアン(Celestial)神の追随者にして、数少ない聖戦士の一人。

ウィルフリック(ウィル)・オフ・ヴェルボボンク 「Will Frick of Verlobbung 187cm/A」

ヴェロンディ連合王国十六公家の一つ、ヴェルボボンク子爵家当主。善政を敷き、領民に広く慕われている名君である。ラルフと共に、中原を守る“天の騎士”位(Knight of Heaven)を持つ。

ラルフ・ロビラー“龍の盾” 「Ralf Robilar

“Dragon Shield” 185cm/B

通称“龍の盾”と呼ばれており、中原諸国の護り手たる“天の騎士”位(Knight of Heaven)を持つ。名だたる剣の使い手である。ヴェスベの森を守護する大緑龍ギラストールの盟友で、龍の宝珠を預かっている。“龍の盾”的名称は、ギラストールとのチエスの勝負に勝つて、その時に贈られた紋章に由来する。

テオドーリッヒ(テッド)・“シコトルム”・グラントン  
「Theodorich “Sturm” Granzef 202  
cm/A」

通称テッド。ヴェルボボンク有数の商家であるグラン商会の会頭で、ウイルとラルフとはかつての冒険者仲間であり、“天の騎士”(Knight of Heaven)として堅い絆で結ばれている。身長2mの巨漢で、曲がった事は大嫌いである。巨大な両頭戦斧“ドゥームスマッシャー”(Doom Smasher)を使う。

真理查「Marissa 173cm/A-B」

“灰の予言者”天査の双子の娘の一人で、「知恵と静寂」を司る。現世で唯一“夢見”を鍛えることが出来る“瞑想者の位”(Dreamer)を持つ。普段はヴェスベの森にある“知恵の塔”に住もう。長い銀糸の様な髪に深い碧の瞳を持つ、物静かで理知的な女性である。

アーサー・アートリム・オフ・ヴェロンディ「Arthur  
Artrim of Velondy 179cm/O」

再興されたヴェロンディ連合王国の国王。レムリアの腹違いの兄。“稀代の名君”と呼ばれているが、現状を理解しないで己が利益にしか興味のない自国の貴族に手を焼いている。元はフリヨンディ王國王子だが、成人前に誘拐され、数年の間行方知れずだった。冒険者の一団(これにはエリアドも含まれる)に救出され、フリヨンデ

イ王国の王位に就く。その後、ヴェルナ法王領のアン・ゴーデリア姫と結婚し、念願の両国の合一と、ヴェロンディ連合王国の成立を実現する。

アン・ゴーデリア・オフ・ヴェルナ 「Anne Corde lia of Veluna 168cm/B」

アーサーの后。ヴェルナ法王の娘で、その母親はヴェルナ七大公家の一つであるルクハート家の出身。フリヨンディ王国とヴェルナ法王領が合併する際に、フリヨンディ王アーサー・アートリムに嫁ぐ。おつとりとした懐の広い、誰にでも優しい女性である。

ヴァルガー・オフ・エルド 「Walga of Erde 174cm/O」

ヴェロンディ連合王国の男爵で、フリヨンディ七大公家の一つエルド家(Erde)を統べる。レムリアの婚約者を名乗っているが、レムリアには毛嫌いされている。

黄昏卿 「Lord of Dusk 184cm/?」

金の仮面を付けた人物。

アンヌ 「Anne 157cm/A」

レムリアの侍女。レムリアに心から仕えている。

フランツ・v・リヒター 「Franz von Richter 175cm/B」

マーケットでヒリアドと出会った若者。グレイト・キングダムの五公爵家の一つ、リヒター公爵家の跡取り。

シュテファン・ラダノワ 「Stefan Radanova 188cm/O」

王宮正門の警護隊長。後にとある理由から漠羅爾新王朝傑都公国に移り、そこで“魔導卿”と呼ばれる魔法剣士となる。その孫が“紅い龍騎士”と呼ばれたカーシャ・ラダノワである。（カーシャは拙著「約束はいらない」に登場）

セイ・フロム・バーナード 「Say from Barnard  
169 cm / A」

ヴェロンディ三騎士の一人で“Justice”と呼ばれ、近衛騎士隊の隊長を務めるている。聖剣『ノルン』を帯び、かつてのフリヨンディ王国最強の騎士、『光の担い手』リスナル・リアンダーより『光の秘技』を受け継ぎ、古代西方魔導の一つ『天秤』を使う。潔癖で直情的であり、直線的に行動する事が多い。

ハリー・ハウ 「Harry Howe 190 cm / AB」  
ヴェロンディ三騎士の一人で“Truth”と呼ばれる。守護の剣『ヴァンガード』を帯びる。王都シェンドル駐留の近衛軍を率いている。ひょうひょうとした人物で、突っ走るセイの止め役でもある。

アクティウム・エパミノンダス 「Actium Epaminius 207 cm / O」

南方アメディオ密林出身の肌が黒い偉丈夫。ヴェロンディ王室を護る最後の砦、親衛王騎士（Royal Guard）を率いるヴェロンディ三騎士の一人で、“Ruth”と呼ばれる。王国最強にして最も高潔な騎士との名も高い。光の三神器（Artifact of Light）の一角、神槍『カラダン』を担う。

契那・天嶺 「Caina Tenryo 156 cm / B」  
エパミノンダスの養い子。常に、エパミノンダスと一緒に行動している。漠羅爾新王朝恵久美流公国、天嶺家出身。古代西方魔導を

使う。

ラ・ル 「L-R u l l e 198 c m / ?」

エルド男爵の客人として王都に逗留している貴人。その実態は、恐るべき“闇の君”の一人か？ 強大な暗黒剣を振るう。

追記

この小説の原文体は、参加者が交互に書き込む対話形式で書かれています。人称が時に変わるため読み難い面もあるうかと思いますが、平にご容赦願います。

また、本文の掲載に同意頂いたえりあざ氏には、この場を借りて感謝申し上げます。

## 魔性の瞳 -00 「主要登場人物紹介」（後書き）

本編は「GREYHAWK ANOTHER」の世界をベースにした一連の物語の一つで、コモン歴585年から始まる「第一紀」の中核となる物語です。この時代に生きた“夢見姫”レムリアと“魔剣士”エリアドの出会いを描きます。

プロローグ／ヴェルボボンク子爵領／子爵館／庭園

ヴェルボボンク子爵が住まう館の庭園は、小振りながら幻想的で美しかった。それもその筈 この庭園は、子爵の長年の友人であるヴェスベの森の妖精族の長ケレブリアンが、子爵に贈つた妖精の庭園だからだ。中原諸国の中でも、この庭園の美しさは知れ渡つていた。

その摩訶不思議な庭園に、小柄な人影が一つあつた。白い、軽いドレスを身に纏つた姿は、ヴェロンディ連合王国の国王、アーサー・アートリムの腹違いの妹、マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディだつた。朝靄の中、ゆっくりと歩むレムリアの姿は余りに儂げで、現実のものとは思えないほどだつた。ゆっくりと庭園を散策しながら、レムリアはションドルを離れたときの事を思い出していた。

小柄で華奢な躰、透明感のある白い肌、肩口で切りそろえられた黒曜石を思わせる髪 “傾国の美女”とも言えそうな容姿のレムリアだつたが、不思議と周りから敬遠されていた。そして、その理由はレムリアの深い、黒い双眸にあつた。真つ向からレムリアの瞳を覗き込んだ者は、吸い込まれるような感覚を覚え、ふつと意識が遠のいてしまうのだ。人々は、レムリアのこの瞳に恐れをなして噂した。“魔性の瞳”だと…。

レムリアが迫害を受けなかつたのは、一重に彼女の兄があの偉大

なアーサー・アートリムであるからに他ならなかつた。また、アーサーと結婚したヴェルナ法王の娘アン・コーデリア姫も、義妹のことを不憫に思つて何かと気を使つてくれていた。だが、一人が庇護すればするほど、レムリアに関する噂が広まっていった。折しも、北の魔国との苦しい戦いの最中で、窮乏を強いられた人々には、格好のはけ口だったのだろう。ある日、外出したレムリアは一群の暴徒に取り巻かれてしまつた。彼らは、北の魔国との戦いによって、配偶者や子供、近親者を奪われた人々だつた。最初にレムリアを見掛けた老婆が叫んだ。

『あそこへ、忌まわしい魔性の娘がいるよ！』

その言葉に反応したレムリアは、思わずその老婆を見つめてしまう。

『ヒイツー！ 身体が、身体が動かないよ！ 魔性の瞳だよ、あれはー！』  
「・・・」

老婆の言に俯いたレムリアの頭に、何かがあたつて散る。見ると、誰かが屋台にあつたトマトを投げつけたのだ。一つ、二つ…そして堰を切つたように、人々はトマトを投げた。レムリアはトマトで紅く染まり、地面に倒れ伏した。護衛達は見て見ぬ振りをしていた。彼らも、内心ではレムリアの事をよく思つていなかつたのだろう。彼らは、『魔性の瞳』を持つたレムリアに何かあつても、何の痛痒も感じなかつたに違ひない。

「止めるんだ！」

トマトの投擲は、その一言でぴたりと止まつた。レムリアを守る

ように、一人の騎士が彼女と人々の間に立つた。

「私は、ヴェルボボンクのウィルフリックだ。どんな理由があるかは知らぬが、多数で一人の少女を痛めつけるのがヴェロンディの正義ではあるまい。人々よ、ヴェロンディの民としてこの行為を恥じるがよい！」

ヴェルボボンク子爵の語氣に氣圧されて、群衆は散つていった。子爵は、自分のマントでレムリアをくるむと、そつと抱き上げた。そして、残つた護衛たちを厳しい表情で見る。

「私が見たことは、そのまま王に申し上げる。お前達の行いは、職務怠慢以前の話だ！ 必ず、沙汰さたがある。覚悟しておくよ！」

怒氣を込めて言つと、呆然とした護衛たちを残してそのまま王宮に向かつて立ち去つた。

アーサー王とアン・コーデリア姫はヴェルボボンク子爵から一部始終を聞いて、憂いに沈んだ。色々と手だてを尽くしてみたのだが、レムリアの立場は一向に良くならない。だが、そんな王と王妃の心中を察して子爵は言つた。

「王陛下に王妃殿下。差し出がましいかと思ひますが、暫くレムリア姫様をヴェルボボンクでお預かり致しましようか？」

アーサー・アートリム王とアン・コーデリア姫は暫し逡巡した後、ヴェルボボンク子爵の申し出を受けることにした。レムリアの事を思つての決断だが、それが当のレムリアに及ぼす影響までは想像しなかつた。数日後、二人からヴェルボボンク行きを話されたレムリアは、何も言わずに黙つて頷いた。聰明なレムリアには、自分がこ

のままシェンドルに滞在することによって、敬愛するアーサーとアーヴィング・ゴーデリアの二人がより一層の困難を抱え込むことが容易に判つたからだ。涙も見せずに、二人と別れの挨拶を交わすと、ヴェルボボンク子爵に伴われてシェンドルの都を出立した。気丈にも一切の涙は見せなかつたが、夜一人で休む時に、人知れず声を押し殺して泣いた。レムリア、15歳のことだった・・・。

## 魔性の瞳 - 01 「発端」（後書き）

GREYHAWK ANOTHERの世界の基盤となる「魔性の瞳」です。お読み頂ければ幸いです。

ヴェルボボンク子爵領／子爵館／庭園

「あれから一年……。私の中で、何が変わっただろう……」

意識せずに、レムリアは声に出していた。誰も聞いてはいない。誰も聞くはずがない。早朝の庭園には、レムリア以外の誰の姿もなかつた。

「私は、自分の何を変えられたのだろう……」

これまで、繰り返してきた問い合わせまた心に響く。

「何も変わつてなんかいない。何も、忘れてはいない……」

習慣にもなつてしまつた自問を繰り返す。心に浮かぶ問い合わせに、自然と想いが言葉となつて零れてくる。

わだかまつているの？

「……ええ。許したいのだけど……」

忘れられないの？

「・・・ええ。忘れないけれど・・・

どうしたいの？

「・・・判らない・・・

子爵や子爵の友であるラルフ、テッドは、レムリアにとても優しく、良くしてくれる。ヴァルボボンク子爵領の誰も、レムリアを悪し様に言つものはない。

「・・・

それでも、レムリアは孤独だった。誰にも理解されない。誰にも理解できない。受け入れる人も、受け入れられる人も・・・誰もない。

「私は・・・おかしいの？ 私だけ、普通の人とは違うの？」

堂々巡りの考えが、また出口の見えない闇の中で行き惑つ。

折からの涼風が、庭園に漂う朝靄を吹き払つていく。幻想的な庭園を包むベールが消えてゆく。もうすぐ、館の人たちが起きだしてくるだろう。部屋にいないと、お付きの女官が慌てて自分を捜すだろ。

レムリアは溜息をつくと、踵を返して部屋に歩いて行く。そして、また新たな長い一日が始まる・・・。



ヴェルボボンク子爵領／子爵館／子爵自室

ヴェルボボンク子爵ウィルフリックは、自室で礼装を纏つた。濃い緑色の上着に、ぴたりと線が入った薄緑のズボン。ショートブーツを履くと、銀の拍車を付ける。マントは薄い茶色で、大きな樅の紋章が縫い取られている。自由都市、ヴェルボボンク子爵領の紋章だ。これに、黄色の肩章を掛け、円筒形の緑の帽子をかぶれば身支度完了である。鏡で姿を確認すると、愛剣を腰に下げる。礼装用の剣ではなく、実剣だ。礼装の中にも、実用性を重視する。これは、辺境に生きるヴェルボボンク子爵家の伝統的な風習だった。

ふと表を見ると、庭園を母屋に向かってレムリアが歩いてくるのが目に入った。白いドレスを纏ったレムリアは、朝日の煌めきの中で、まるで妖精の姫君の様に見える。だが、その表情には葛藤の色が濃く刻まれ、深い影をその躰にまとっていた。暗い輝き　奈落の縁に立つ危うさ、見る者に、何処かそう思わせる印象を与える。

「ふむ・・・」

思わず嘆息を漏らしてしまった口に、ウィルフリックは苦笑した。レムリア姫をこのヴェルボボンクで預かるようになつて1年が過ぎた。当初の悲惨な精神状態から目覚ましく回復はしたが、まだその精神は不安定だった。

「まだ、明らかに時期尚早なのだが・・・」

ウィルフリックは、机の上に置かれた書状に視線を振った。重々

しい封蝶がなされたその書状は、ションドルのアーサー王からのものだつた。北の魔国を撃退した事を記念し、延期していたアン・コーデリア姫との正式な婚姻式を行うので、唯一の肉親であるレムリアも出席してくれないか・・・そんな問い合わせだつた。

独立領とはいえ、ヴェロンディ連合王国と密接に結びついているヴェルボボンクに、ヴェロンディ国王の要請をはね除ける権限も力もない。

「要請は受けねばならん。せめてラルフに同道して貰い、姫のことと配慮して貰うくらいが関の山か・・・」

珍しくも再び嘆息すると、書状を眺めるウィルフリックだつた。

## 魔性の瞳 - 03 「要請」（後書き）

ウィルフリック・オフ・ヴェルボボンクは、ヴェロンティ連合王国の東部地域である、旧フリヨンディ王国のハ公家の一つ、ヴェルボボンク子爵家の現当主です。王国最南端にある子爵領は、その自由な気風もあって、常に商人や冒険者で賑わっています。

## 魔性の瞳・04 「決断」

ヴェルボボンク子爵領／子爵館／客室

「・・・そうか。事情は、わかつた。」

ラルフ・ロビラー“龍の盾”は愛用のパイプに火を付けると、濃い芳香を吸い込む。考え事をするとき、ラルフがよくやる癖だった。

「だが、今あの娘の状態では、ションドルに戻すことは感心せん。例え、それが王からの要請であつたとしてもだ。」

僅かに渋面を作つた友人の顔を見て、ラルフはニヤリと笑つた。

「相談するんじゃなかつた、そつお主の顔に書いてあるぞ。フフフ、私の意見などとうに予想していただろうに。」

何か言おうとする友人を押しどどめると、ラルフは先を続けた。

「まあ聞け。少なくとも、私はお主より10年は余計に経験を積んでいる。だから、こんな時の解決策の一つか二か思いつくというものだ。」

一転、先程のリラックスした態度を改め、ラルフはウイルフリックに鋭く言った。

「ウイル、よく聞け。あの娘は、自らの力で自らを救わなければいけない。そうじゃなければ、一生誰かに依存して生きて行かねばならなくなる。それでも良いと言つ娘は、世の中に幾らでもいる。だ

が、ケレブリアンも言つてただろう? あの娘は類い希ない“力”を持つている特別な子だ。我々は、あの娘が己の道を自らの意志で選択出来るよう、力を貸さねばならない。それが、我ら“天の騎士”たる者の勤め……違つか?」

ウイルフリックは頷いた。

「よからう。では、私はレムリアに真理查様の試練を受けさせることを提案する。」

それだけ言つと、ラルフは黙した。重苦しい沈黙が、室内を支配した・・。

## 魔性の瞳 -04 「決断」（後書き）

ラルフ・ロビラードは、ヴォルボボンク子爵の親友です。常に愛用のパイプを手放さない温厚な人物ですが、その実、非常に熟練した巡回<sup>レイ</sup>察者<sup>ンジャー</sup>です。その剣技の腕は、ウイル子爵も凌ぎます。

ヴェルボボンク子爵領／ヴェルボボンク市／グラン商会

「なんだって！」

身長二メートル以上はあるうかと思われる大男は、その厳つい顔を赤くし、声を荒げて二人の顔を睨み付ける。

「そんな危険なことを、あの娘っこにやらせようつてえのか？ ウィル！ ラルフ！ おめえら、正気なのか？ ええ！」

ヴェルボボンクでも有数のトレーディング・ハウス『グラン商会』。ここは、ヴェルボボンク市中心部のマルクト広場に面した、グラン商会の一室である。商会の会頭であるテッド・“シユトルム”・グランシェフは、突然訪ねてきたウィルとラルフに仰天する話を聞かされ、その内容に思わず激高して怒鳴つていた。

「まだ十六の娘っこに、何を期待してんだ！ 世界を救えとでも言うのかよ！」

だが、テッドの激高を、ウィルもラルフも冷静に聞いていた。テッドがレムリアを非常に気に入つており、自分の娘のように思つていることも、“天の騎士”のような労苦が多くて報われないような“奈落の道”からレムリアを遠ざけたいと考えていることも、重々承知だつた。大体、一人にしても非常に不本意な選択肢なのだ。テッドの心境も十分理解できるといつものだつた。

暫しの沈黙の後。テッドは大きな溜息を付くと。

「わかつた、わかつたよ。そんな目で見るな。オレは、レムリアの為の“駆け込み寺”になりやいいんだろ？ 気が進まねえが・・・それしか方法がないんなら、仕方がねえ！」

ガツツン！ と横の壁に蹴りをくれると、不機嫌の極みと言つた表情を浮かべて言い放つ。

「だがよ、勘違いすんなよ！ オレは、納得したわけでも、賛成したわけでもねえからな！ あくまでな、あの娘つこの笑顔が見たいってえオレの我が儘だからやるんだ。そこんとこ、はき違えるなよ！」

肩を竦めて、それでもテッドが了解したことに感謝して、ウイルとラルフはグラン商会を辞した。一人残つたテッドは、窓から一人が去つていくのを見ながら呟いた。

「くそ・・・けつたくそわりいぜ・・・」

苦い思いが残つた。テッドは、無き妻アンナの事を思つた。貴族の名門に生まれ、何不自由なく育つたのに、よりもよつて鈍くさい無名の戦士であるオレなんかと結婚した・・・。苦労に苦労を重ねて、息子のアルフレッドが生まれるやいなや、産褥で亡くなつた。そんな妻のイメージに、レムリアがだぶつて見えた。

「くそつたれ・・・」

呟いたテッドの口調には、力がなかつた・・・。

## 魔性の瞳 - 05 「激高」（後書き）

セオデリック（テッド）・グラントンフは、ウイル王子爵とラルフの親友で、巨大な両頭戦斧である“Doomsmasher”を振るう、歴戦の戦士です。若い頃は、三人でパーティーを組んで、あちこちを冒険していました。

知恵の塔／居室

「・・・わかりました。本人が了解しているのならば、その様に取りはからいましょう。はい、それでは。」

部屋に置かれた姿見の鏡は、再び正面に立った若い女性の姿を映しだしていた。真理査は、龍の盾との魔法交信を打ち切ると、ほつと溜息をついた。

「……、何年も無かつたことですのに……」され、運命の女神の織りなすタペストリーに新しい模様の波が起こり始めている証なのでしょうか？ それとも……」

真理査の目にも、未来は漠とした靄の中にあってはつきりと見通すことが叶わなかつた。

真理査　　『灰の予言者』の双子の娘の一人。預言者であった父の知恵を受け継ぎ、その『言葉』を話す者。今では、真理査だけが『夢見』を鍛えることが可能であった。『夢見』。現在・過去・未来を繋ぐ『言葉』を預かる者。闇の陣営に於ける創世神を相手に回す“光の陣営”にあつて、最も頼りになる知恵を持つ者。

・・・だが、『夢見』となる為には、特異な資質を持ち合わせていなければならず、そしてその資質を持っていたとしても、『言葉』を預かるために“心を調べる”途中で精神が崩壊してしまう危険性が非常に高い。今、この世の中に『夢見』たるものは一人のみ。西ウストヘヴン

方封土時代の『夢見十一聖』を思つと、現在の数は危機的に少なかつた。

「……だからと言つて、安易に『夢見』の責を負わす者を増やすことは、賛成できません。」

真理査は、答えのない鏡に向かつて呟いた。

「『夢見』となることは、難しくはない。それは、資質の問題だから。でも・・・『夢見』で在り続けることは、生易しいことではない。知り得るに叶わず、能わざるに求める・・・自分ではどうにもならないジレンマに、少しずつ心が壊れていく。正気と狂気の狭間にあって、それでも自分をしつかり確立し続けなければならない・・・そして、その責は自分が死ぬまで、つきまとつ・・・」

「・・・そのような苦難を、あなたがたはその少女に望むの？ 本当に、その少女はそんな行き方を欲するの？」

だが、真理査には判つていた。例え少女が望まなくとも、時代が少女の力を要求してしまつことを。否応なしに、世が変動する渦中に巻き込まれてしまつことを。

「でも・・・何も手出しえ出来ない・・・起きるべき事柄に、起こそすべき者を、導くだけ・・・」

自分もまた『夢見』である真理査には、他に選択肢はなかつた。今はただ、毅然として起らるべき事態に対処するだけだった。そして、それで幾らの心を痛めよつとも・・・。

## 魔性の瞳・06 「許諾」（後書き）

真理査は今代只一人、“夢見”を鍛えることが出来るメンター（指導者）です。纖細で心優しい女性ですが、非常に強い心の持ち主でもあります。

ヴェルボボンク子爵館／庭園

「・・・知つて、いた・・・？」

そう・・・不思議なことだが、レムリアは真理査に切り出された話の内容を知つていた。何で知つていたのだろう・・・。そう漠然と思うのだが、『知つていた』としか、自分でも言つようがなかつた。そう、ただ『知つていた』のだ。

真理査の説明は短く、端的だった。自分の前にある選択肢。言葉にして、思い返してみる。

「一つは、平凡だが平穏な人生をおくる路。みち誰かと結婚し、子を為し、何時かは死ぬ。多くの人が歩む路。護られる路・・・」

「もう一つの路。みち平凡でも平穏でもない路。自分を捨て、人のために死くし、世を支える苦難の路。誰も歩きたがらない路。護るための路・・・」

どの路がいいのだろうか？ 常識で考えれば、疑問の余地はない。『樂』な路。『安心』できる路。『護られる』路。何の不満もない。何の不満を感じることがある？ でも・・・本当に、それでいいのだろうか？

「護られる」と。そして、『護る』こと・・・。

明日を待ち望むこと。そして、昨日に思いを馳せること。想いを受け止める。

想いを・・・伝える?』

想いを・・・どうしたいのだろう。何も生み出さないのなら、何を想うのだろう。今は、まだ知らない。今は、まだ判らない。でも、判つていることがある。それは・・・

「昨日までの“想い”を忘れて、明日を生きることは出来ない。それだけは、確信がある。だから・・・護られる路は選べない。護られて、昨日を忘れることは出来ない。現在、過去、未来。全てが細い一本の線で繋がっている。繋がりを断ち切つてしまつたら、それはもはや“私”とは言えない・・・」

心は決まった。

「・・・『眞葉を預かる者』となる・・・」

## 魔性の瞳・07 「予感」（後書き）

レムリア、“夢見”となる事を決意します。“夢見”は、真に自分の心の内奥と向き合いつゝことが出来たもののみが到達する“境地”です。

ヴェルボボンク子爵領／子爵館／自室

「行つたか。」

「うむ。あの娘が自分で判断して、自分で決めた上で行動だ。我らとしては、静かに見守るだけだな。」

「判つてゐる。判つてはいるが・・・」

「感情的に納得のいくところではない、と言つたところか。まあ、

判らんでもないがね。」

「・・・これでは、テッドのことをとやかく言えないな・・・」

溜息を付くと、ヴェルボボンク子爵ウイルフリックは苦笑いを浮かべて旧友のラルフ・ロビラーを見た。これは肩を竦めると、おもむろに愛用のパイプに火を付ける。

「そう言つことだ。今更、我々がじたばたしても仕方があるまい。歳行かぬ娘が一人で、勇気を振り絞つて過酷な試練に耐えているのだ。我らがみつともない真似をできまいぞ。」

「ああ。その通りだ。」

「ところで、テッドはどうした？」

「いや・・・今回のレムリアの決断を話したら、真っ赤な顔をして扉を眼前で閉められたよ。」

「アヤツも、全然納得していらないのだろう。まあ、テッドは最初から今回の事には反対していたからな。」

「全く、テッドのレムリアに対する入れ込みようと言つたら・・・。一体誰が想像できただろうな。」

「盲目レヴェル、といつことなのだろう？」

意識して、ラルフは軽妙に言った。テッドほど直情的でこそ無いが、同じくらいレムリアの事を心配しているウイルフリックを思つての行動だった。そんなラルフの心遣いを、ウイルフリックは十分に理解していた。

「すまんな、ラルフ。」

「なあに、いつものことだ。気にするな。」

ニヤリと笑つて、パイプをふかすラルフ。そんな彼も、心の中ではレムリアの無事を祈つていた。レムリアが試練に向かう間際に、ラルフは自分がいつも首に掛けている碧の宝珠のペンダントを“お守りだ”と言つてレムリアの首に掛けてやつていたのだ。そのペンダントは、『龍心石』と呼ばれる龍の宝珠であり、ラルフの渾名である“龍の盾”の名の由来でもあった。

“大縁龍ギラストールよ。汝の勇氣と力を、かの娘に『えたまえ”

時が静かに流れしていく。そして、『知恵の塔』では、レムリアが生と死の狭間にあつて、その纖細な心を引き裂かれるような苦痛の最中にあつた。そして、その結果はまだ誰にも判らなかつた……。

### 知恵の塔／修練室

大きく息を付くと、真理査は傍らの椅子に身を投げ出すように座つた。心臓は早鐘のように打つており、全身を疲労感が覆っている。

「・・・なんて・・・」

田の前の敷物の上には、蒼白な表情をしたレムリアが倒れ伏している。命には・・・別状はないようだが、意識不明で昏睡している。「なんという、『心の力』の持ち主なの・・・まるで、まるで姉さまのよう・・・」

自分で漏らした言葉に、はつとする真理査。真理査の双子の姉、恵理査。現世に跳ばされたときに別れ別れとなり、いまだ行方が杳として知れない。その姉に、レムリアの波動は酷似していたのだ。

「姉さまの波動・・・？」

真理査の表情には深い憂いの色が浮かんでいた。それもそのはず。『知恵と静寂』を現す真理査の波動とは異なり、恵理査の波動は『知識と嵐』を象徴している。その性格も、全く正反対である。そんな、姉と似た波動を持つ娘、レムリア・・・。

「この娘の行く末には、どんな運命が待ち受けているのでしょうか・・・。でも、それがどのようなものであれ、私はこの娘が知る得るべき事柄を教えなければならない。この娘が、自分の心を一人で護れ

るように、鍛え上げなければならない。たとえ、それが私自身に苦痛を伴つものであつても・・・

嘆息すると共に立ち上がると、真理査は氣力を奮い起<sup>レム</sup>してレムリアに冷静な、厳しい口調で言った。

「レムリアさん。寝て<sup>レム</sup>いる場合ではありませんよ。まだ、試練は始まつたばかりです。さあ、立ちなさい。」

ヴェルボボンク子爵館（正面玄関）

ヴェルボボンク子爵館正面玄関の馬車寄せに一台の馬車が着けられていた。六頭立ての立派な馬車で、ヴェルボボンク子爵領の紋章である『大きな櫻の木』を扉に付けている。御者台には御者が二名座つており、馬車の前にはヴェルボボンク子爵領の礼装を身に纏つた若い騎士が一人、母屋の方を見ながら人待ち顔で佇んでいた。

程なく、母屋から二人の人物が姿を見せた。若い騎士は迎えに数歩歩くと、脇によつてびしっと一礼する。

「おはようございます、お屋形様。準備は全て整つております。いつでも出発可能です。」

「ああ、御苦労だなフランク。何名連れて行くつもりだ？」  
「はい。装甲騎兵一個小隊をウイリップまでの護衛に連れています。そこから先は、ヴェロンディの護衛隊に引き継ぎます。」  
「お前は最後まで同行するんだぞ、フランク。」

「心得ております！」

フランクと呼ばれたその若い騎士は勢いよく応えた。そんな若々しい騎士の態度に、子爵は自然と微笑んでいた。

「頼んだぞ、フランク。お前が護衛するのは、ヴェロンディ連合王国でもかけがえのないひとつだ。くれぐれも間違いが起こらぬように、しつかり護衛を頼む。」

「粉骨碎身の決意で頑張ります！」

子爵が頷くと、龍の盾が話しかけた。

「ウィル、レムリア殿が参られたぞ。」

本館の中央にある階段を、一人の娘がゆっくり下りてきた。このヴェルボボンクを訪れる時に着ていたドレスと酷似した白い清楚な服を身に纏つたその娘こそ、ヴェロンディ連合王国国王アーサー・アートリムの妹姫、マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディだつた。小柄で華奢な躰、透明感のある白い肌、肩口で切りそろえられた黒曜石を思わせる髪、深い…深い海の底を思わせるような双眸。神秘的な雰囲気を身に纏つた若い娘は、馬車の前に佇む三人の所まで歩いてくると、スカートの裾を軽く上げて優雅に一礼した。

「おはようございます、子爵様、龍の盾様。」

「おはよう、レムリア。」

「おはよう、レムリア殿。」

「レムリア、彼があなたを首都まで護衛していくサー・フランク・コーンウェルだ。フランク、こちらの方がお前が護衛するレムリア姫だ。」

「はじめまして、サー・コーンウェル。」

レムリアは、花開いたようにつづら微笑んだ。

「あ…ふ、フランク、と申します！ レムリア姫様！」

フランクは、この世のものとも思えない様な、儂げで澄んだ美しいレムリアを見て、しばし言葉が出なかつた。ようやく、挨拶の言葉をひねり出すと、あとはひたすら黙まつてしまつていた。

「よし。知り合いになれたところで、早速出発してくれフランク。」

「はっ！」

そつと馬車の扉を開けると、フランクはレムリアに深々と頭を下げた。

「姫様、どうぞお乗りになつて下わい。」

「ありがとうございます、フランクさん。」

そう言つと、レムリアは子爵と龍の盾を振り返つた。

「子爵様、龍の盾様。お一人には、本当にお世話になりました。このご恩は・・・一生忘れません。」

「いいんだよ、レムリア。感謝には及ばない。自分の人生を、誰にも邪魔されずに望むままに生きるんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

「はつはつは。肩の力を抜くんですぞ、レムリア殿。気負つては事をし損じる。常に冷静沈着に物事に当たるが宜しいでしょ？。」

「はい、心しておきます、龍の盾。」

レムリアは、一人に挨拶した後、誰かを捜すように視線を辺りに振つた。ここにいる三人以外に誰もいないことが判ると、軽く溜息を付く。

「・・・見送りには、来ていただけないのですね・・・」

その時。いきなり頭を軽くポンと叩かれてレムリアは目をぱちくりさせた。

「よお。何シケタ面してんだよ、嬢ちゃん。」

「て、テッドさん！　来ててくれたんですね！」

「あつたぼつよ。嬢ちゃんが里帰りする口で、見送んねえって法はないだろ?」

「・・・ええ・・・」

言葉使いこそ乱暴だが、テッドの溢れんばかりの優しさを感じて、レムリアの黒い双眸には潤いが生まれた。そつと目頭をハンカチで押されると、レムリアは心から嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ありがとう、テッドさん。ここでの滞在のことせ、決して忘れません・・・」

「ああ、気が向いたらまた遊びに来いよ。なあ、みんな歓迎するぜ。」

「はー・・・きっと・・・また来ます。」

テッドと子爵、龍の盾はお互いに頷きあつ。

「ああ、レムリア」

「はい・・・」

子爵と龍の盾の手を取つて名残を惜しみ、テッドを軽く抱きしめた後、レムリアは馬車の人となつた。静かに扉を閉めると、フランクが自分の重戦馬に跨つた。

「それでは、行つて参ります!」

「道中しつかりな、フランク。」

「先は長いぞ。あまり、最初からとぼさんよにな。」

「小僧! 死んだ氣になつて護衛しろよ!」

三者三様の言葉に見送られて馬車は静かに動き出し、正面の庭先をぐるりと回つて、正門から長い旅路の途へ着いた。一路・・・ヴ

ロンドン連合王国の王都シンドルへ・・・。

## 魔性の瞳・10 「旅立」（後書き）

何時もお読みになつて頂き、有り難うござります。本回までが、「プロローグ」に当たります。次回はいよいよ舞台をヴェロンディ連合王国王都シェンドルに移し、もう一人の主人公である“魔剣士”エリードが登場します。ご期待下さいませ。

ヴェロンティ連合王国／王都シンドル／王宮（祝宴にて）

彼女との出会いは、ションドルのことだった。

北の魔国撃退を期に、それまで延期していたフリヨンティのアーサー王とヴェルナのアン・ゴーテリア姫との正式な婚姻を取りかわす祝いの宴。すなわち、ヴェロンティ連合王国結成の祝宴であり、ヴェロンティ連合王国初代国王アーサー一世の正式な戴冠を祝う宴でもある。

その時の私は、墮聖劍士アンチバラディンという頸木くびきからは解き放たれていたが、それでも“阿修羅”は常に持ち歩いており、多くの者から避けられていた。

華やかな宴。優雅な音楽が奏でられ、人々は談笑しているか、あるいは音楽にあわせて踊っている。

そんな中、私は壁際で酒のグラスを片手に無表情にあたりを眺めていた。

当然のことながら、私の周囲に人影はない。

退屈な時が流れ、来場者の顔触れが次第に地位の高い者に変化してゆく。

「・・・マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンティ。アーサー

新王陛下の妹君！」

名前が呼ばれ、あたりの者がざわめく。

『ドゥームセイヤー』（災厄を告げる者）、『魔性の瞳』などの異名でも知られるアーサー王の腹違いの妹姫。

じつした宴の席には滅多に顔を見せぬ人物らしい。

もつとも、その時の私には、そのようなことなど知る由もなかつたが。

おそらく、そうした理由のせいもあったのだろう。人々の好奇の視線を浴びながら、その姫君は一階の大扉から広間への階段を下りてきた。そして、階段の中ほどにある踊り場でふと立ち止まると、広間を埋め尽くす人々をゆっくりと見渡してゆく。彼女の視線を向けられた者たちが、まるでその視線を避けるかのよう、そそくさと他の方向を向くのがわかつた。

そんな周囲の様子を見てとり、私は初めてその姫君に少しだけ興味を持つた。少し目を細めて、踊り場に立つ彼女を見る。彼女の視線が壁際の私のところで一瞬だけ止まつた。

「・・・・・・

やがて凍りついた時は再び流れ始める。

彼女は人々に関心を失つたかのように視線をはずし、再び階段を降り始めた。

人々は彼女の動きを気にしながらも、少しほつとしたように会話を再開する。その話題の中心は、あらためて言つまでもなく、気まぐれに姿を見せたその姫君のことなのだろう。

私もまた彼女への関心を失い、退屈そうに酒のグラスを乾していふと、やがて人垣くだんがわかれ、件の姫君があらわれた。

「エリアド・ムーンシャドウさま、ですね。」

夜空を想わせる深い双眸。

「私は・・・」

「・・・マーガレット・レムリア、だつたか?」

私は無表情に応じた。

「・・・はい。」

「わたしに、何か用か?」

一瞬の逡巡。そして、双眸に宿る意志・・・。

「・・・一曲、踊つていただけませんか?」

「・・・・・・・」

若い姫君の口から発せられたその言葉に、私は“不覚にも”虚を突かれた。

思わず唇の端に浮かぶ冷やかな微笑み。

「・・・私が、どのような者かを知つた上でのお誘いか?」

皮肉っぽい口調で聞き返す。

「では、ヒリアードさまは、わたくし私がどのような者か御存知ですか?」

彼女は視線を逸らすことはしなかつた。

「・・・知らぬ。」

「ならば、お互い様ではありますか。」

「・・・そうだな。」

そして、彼女はエスコートを待つかのよつて、その細い腕を差し出した。

## 魔性の瞳 - 11 「邂逅」（後書き）

今回は、新たに登場した“魔剣士”エリアドの視点からの物語です。暫く、レムリアの視点とエリアドの視点が交互に続きます。尚、「魔性の瞳 - 10」でレムリアがヴェルボボンクを旅立つてから、一年の歳月が過ぎています。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／王宮（祝宴にて）

レムリアは、自分に差し出された手をそっと取った。

男性にしては細い手だが、鋼が如く鍛えられていることを感じさせる。

表情からは・・・何も伺い知ることは出来ない。いや、何の表情も浮かんでいないと言う方が正しいのか。

“不思議な方”

正直な感想だった。その雰囲気には、自分と似ている点を感じられる。

“現世<sup>うつせ</sup>に大した興味を持ち得ない…そんな感じかしら?”

安易に思いこもうとする考えを、自分で嘲笑する。

“気休めは止めましょう。白昼夢を見たところで、現実には何の変化も無いのだから。”

それでも、そんな逃避を想つてしまつのが弱き“人”の性<sup>たが</sup>なのか。“心の向こう側”を覗き見た自分も、例外では無いというのが笑ってしまう点なのだが。

“逃避をなくすためには、人を止めなければね・・・”

そう思いながらも、レムリアはその思考が無意味であることを知

つていた。夢見であるが為に、人の心を抑制する術を学んだ  
が、人で有るが為に夢見でいられるのだ。そこには、矛盾するよう  
な微妙な均衡があった。それを、眞面目に考えようとする  
と、気が狂つてしまつだらう。ふと、そんな問いかけを踊つて  
いる相手にしてみようと思つた。因みに、相手の踊りは予想外に旨い。

「エリシアドさま。」

先程から、名前で呼んでしまつてゐることに気付く。不躾かと思  
つたが、相手が氣にしている素振りを見せないので、そのまま呼び  
かける。

「・・・人が、人で有り続けるために狂わねばならないとしたら、  
エリアドさまは如何されますか？」

相手に柔らかく受け取られるように、顔に笑みを載せてみる。そ  
れで、問い合わせの内容が柔らかくなるわけでもなかつたが・・・。

## 魔性の瞳 - 12 「逡巡」（後書き）

今回は、レムリア視点になります。暫く、視点がレムリアとエリアドと交互に切り替わります。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／王宮（祝宴にて）

「……人が、人で有り続けるために狂わねばならないとしたら……か。」

とてもダンスの最中の若い娘が口にする言葉とは思えぬその言葉に、私は目の前で優雅に微笑む彼女の顔をじっと見た。

“遙か一千年の“時の彼方”、古のスールの地……私が“阿修羅”を得て、それと同時に背負つたものを……そして、それと引き換えに手放したものを……この娘は、知つてているというのだろうか……”

それは舞踏会の華やかな音楽の中。

“……私は何か別の形でそれを背負い、捨てたというのだろうか……”

そのことは一片たりとて後悔してはいないものの、心のどこかに満たされぬ想いがあつたことは否定し難い。

『人は、孤独なのだ。』

そのことをわかつていてさえ、なお……。

天空よりも深い双眸が、彼女を見つめるヒリアド自身を、まるで鏡のように映し出していた。

その双の瞳を見つめながら、私は静かに口を開く。

「……人である」とを捨てるか。それとも、狂氣の中で生き続けるか……。

それは、私にもわからぬ……。」

それは、淡々とした、ほとんど抑揚のない口調。

「……だが、私は人であることを捨てるつもりはないし、狂氣に囚われたままでいるつもりもない。」

もう一度彼女を見つめ、私はゆっくりと続ける。

「……なぜなら。私は、自らの意志で、その道を選んだのだから

ヴーロンティ連合王国／王都シンドル／王宮（祝宴にて）

「J君の意志で、選ばれた・・・」

エリアドの言葉を繰り返してみる。視線を上げた先の表情には、微塵の迷いも浮かんでいない。

「あっ・・・円舞曲が終わりますわ。」

楽団はやつたりとした円舞曲の最後のパートを引いていた。その曲は、フリコンティの古い円舞曲で『西方樂士の円舞曲』と呼ばれていた。

やがて曲が終わると、ダンスを踊っていたカップルは、互いに深々と礼をしたあと、ホールに散つて行く。

「エリアドさま。もし・・・宜しければ、もう少しお話しを伺いたいのですけれども。」

優雅に一礼すると、レムリアはそっと囁いた。まだ、宴はたけなわ・・・部屋に帰る時間でもない。それに、不思議と引かれるモノを相手に感じている。

“J君の感覚は、“叡智の修練”以来、初めて感じるモノ・・・自分でも説明が出来ないけれど、何か呼び合つモノを感じるJ君も事実ね”

上田使いに、じつと見つめてみる。

余人ならば、“魔性の瞳”と目を合わせることなど決してないだ  
らう。

だが、この相手は平気な謔、だつた。鋼のような、余談を許さぬ  
目。自分同様、普通の人とは目線を会わせられないだろう。  
その目が何を映し、何を見てきたのか・・・興味を引かれるところ  
だつた。

「如何でしようか？ 特に御希望がなければ、バルコニーにでも出  
ませんか？」

自分らしからぬ 頭の片隅でそう思いながらも、レムリアは自  
然と相手を誘つよう話しかけていた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンダル／王宮（祝宴にて）

樂団は、新たな曲を弾き出していた。ホールは踊り始めるカッフルで再び賑わいを見せる。

「…………ふむ。…………そつだな。それは“悪くない”提案だ……。

」

彼女の提案に、私はしばし考えてそつ応じた。

「…………いや。陛下には悪いが、このよつな退屈な宴の席で無為に時を過ぐすことによつてしまえば……すいぶんと“魅力的な”提案……かもしだぬ。」

この時、私の中に彼女に対する興味が生まれていなかつたと言えば、それはおそらく“嘘”にならう。

我知らず唇の端に浮かぶ皮肉っぽい微笑み。

「このまま行くか？」

私はあたりを見渡し、彼女にそう問いかけた。

新たにダンスに加わるには、タイミングが遅すぎた。更には、先刻にも増して招待客が増えており、さしもの広いホールも狭く感じるほどだった。

「…………」

紳士は煌めく礼装に、貴婦人は豪奢なドレスを身に纏う 着飾つた紳士淑女の華やかさは、恰もヴェロンディ連合王国の繁栄を誇示しているようだ。しかし、それは日夜“北の魔国”の影に怯えるこの国とその民が、重い現実から逃避しようとする虚構のようにも思えるのだった。

ヴェロンディ連合王国の北境に接する“北の魔国”は、魔王イウズの支配下にあって、常にヴェロンディ連合王国と戦火を交えていた。先の戦いでは、北の要所である要塞都市グラツブフォートが陥落し、戦線は大きく南に下っている。王都シェンドルも、“北の魔国”にとつては、十分射程圏内であったのだ。

それ故の幻想か、現実逃避か　宴は、いやが上にも熱気を帶びてゆく・・・。

ヴュロンンティ連合王国／王都シエンンドル／王宮（祝宴にて）

「はい。では、こちらにどうぞ。」

小さく頷くと、レムリアは自分からエリアードの手を取つてバルコニーへと導いた。

これは有る意味大胆な、そして慣例からすると慎みのない行為であつた。と言うのも、ヴュロンンティ連合王国では、男性が“主”、女性が“従”で、女性は常に一步下がつた立場で居ることが慣習となつてゐるからだ。

案の定、この行為を見咎めた向きがヒソヒソと臆面もない論評を飛ばしていた。

『まあ、御覧なさいよ。』

『慎みのないこと。』

『所詮は“妾腹”だからな。』

『こんな所に、出入りできる立場じゃないのにな！』

『お兄さまに甘えているのよ。』

『嘆かわしいな。國の威信に関わることだ。』

どちらが慎みが無いのか、疑問に思われるような言葉を交わしている人々を後に残し、二人はバルコニーに出た。澄み切つた夜空が広がり、眼下にシェンドルの街の灯が広がつてゐる。

「・・・嫌な想いをさせてしましました・・・」

バルコニーの手すりに背を預けながらも、レムリアは言った。そ

の声音には、僅かな戦慄きが混じっている。

“ 何時も・・・同じこと・・・ ”

重くなる心に、先程まで高揚していたレムリアの気持ちは急速に沈んだ。自分の存在が、この街の人々にとつてどう受け止められているか知らぬ訳でもなかつたが、それでも、人々の無責任な言葉を耳にすると心が突き刺される想いがした。“ 蠟智の修練 ” を受け、感情をコントロールする術を取得していなければ、心が壊れてしまつていただろう。だが、それが受ける“ 傷 ” を軽くしてくれるわけでもなかつたが。

そんな想いが、レムリアの表情に影を落としていた。類稀ない透明な美しさを身に纏いながら、どこか“ 暗い色 ” が混じるベールが覆つている。そして、その中を見通そうとする者は、深い双眸に向き合つことになるのだ。

軽い溜息。別に、今に始まつて事じやない。別に、気にするようなことじやない。いつも、自分に言い聞かせている言葉を想つと、努めて平静な声でエリアドに言つた。

「 慣れてしまつてゐるせいか、わたしは鈍感になつてしまつてゐるようですが。エリアドわまには、申し訳なことを致しました。 」

何事も無かつた そう思わせるよつとに、笑みを浮かべることも忘れない。

ヴヒロンティ連合王国／王都シンドル／王宮（祝宴にて）

ヒリアードはレムリアに導かれるまま、バルコニーに向かった。むろん周囲の者たちの声が一人の耳に届かなかつたはずはない。バルコニーに出る間際、エリアドは振り返つて広間全体を見渡し、嘲笑うかのように昂然と、冷やかな笑みを浮かべた。なかば唾然とする貴族たちに向けると、下世話な相手を自分の世界から締め出すかのように、ガラス扉をバタンと閉めた。

「……つまらぬ連中だ。このよつたな国を治めさせたために、奈落の底から陛下を救い出したのかと思つと……」

ヒリアードは、およそ聖戦士バルディンからぬセリフを平然と口にする。

「他人の目など気にせぬことだ。……と言つても、貴女の立場ではそういうかぬか。」

レムリアの傍らに歩を進めながら、低い声で彼女に囁つ。

「……だがな。それなら、時には本音を出した方がいい。貴女・・・いや、君は、慣れても鈍感になつてもいまい。・・・やつなつたと思おひしていのだけだ。」

夜空を埋め尽くす星々の下。

時間は、ただ静かに、ゆっくりと流れていた。

その印象からは程遠い心遣いを見せる相手に、レムリアはやんわ

りと微笑んだ。ガラス窓からは明るい光が漏れ、室内の喧噪が僅かに伝わってくる。

「そうですね・・・。“気にならない”と言えば、嘘を申し上げることになりますが、口さがない論評は今に始まつたことでもあります。故に、“気にしない”と、思つておりますの。」

ここまで、自分の思いを吐露してしまつてることが、レムリアにとつては驚きだつた。

相手は、“あの”『阿修羅』を持つ魔剣士。気軽に話しかけられるような存在ではない。普通は、自分の想いを話す言う以前に、近づかない方が良いと一般向きには思われている相手なのだ。

“そんな方に・・・なぜ?”

その問いかに答えを得ようと、レムリアは相手を見つめてみた。深い、深渊の双眸が相手の目を射た。

余談ですが、エリアドは行方知れずになつていたアーサー・アートリム（当時は王子）の探索に携わつっていました。

アーサー・アートリムは、成人前に北の魔国の手引きで誘拐されてしまい、絶望した父王スロメル六世は、北の魔国との戦いに命を落とします。絶望が広がる中、冒険者の一団が奇跡的に王子を救出。すぐにつリヨンディ王国の王位に就いたアーサー・アートリムは、長らく望まれていたヴェルナ法王領との合併を、法王の息女であるアン・コーデリアと結婚することで実現　　ヴェロンディ連合王国を成立させます。

エリアドの、『奈落（A b y s s）の底から救い出した』とのセリフには、斯様な背景があります。ご参考まで。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／王宮（祝宴にて）

レムリアの瞳は、まっすぐにエリアドを見つめていた。

「……どうやら、君は私が思ったよりも、ずっと強い女性だったらしい。」

彼女の頬に手を伸ばして、そっと触れる。

「……『人が、人で有り続けるために狂わねばならない』としたら・・・。先程、君は私にそう聞いた・・・。」

彼女の頬からスッと手を離すと、エリアドは星々に彩られた天空を見上げた。そして、背中からゆっくりと一振りの剣を取り出す。

「……“阿修羅”の名は知つていよう。」

緩やかな曲線を描く、何の装飾もない灰色の鞘。一見するとバクランニ風に見えなくもない、長身の太刀。

「……遙か一千年の“時の彼方”、古のスールの地で、私はこの剣を得た。そして・・・、この剣とともに背負つたものと、手放したものがある。」

そこで言葉を止めると、エリアドは再び視線をレムリアに戻した。深淵を思わせる深い黒の双眸。

「・・・おやう、君はそれが何かわかっているのだ？ そうでなければ、”あのよくな”問い合わせにはできません。」

ならば呟くよつて、私は続ける。

「・・・だが、いつたい何が君にそれほどまでの想いを抱かせたのだろう・・・。・・・そして、つこさきほど出会つたばかりの君に、私はいつたい何を期待しているのだろう・・・。」

その時、ヒリアードは困惑つていたのかも知れない。彼自身の中の、これまで経験したことのない“感情”に・・・。

ヴェロンティア連合王国／王都シエンダル／王宮（祝宴にて）

「あ・・・どうなのでしょうか。」

エリアドの言葉を聞きながらも、レムリアの心には急速に影が差してきていた。

“わたしの何を判つていると言つたの？　わたしに何を期待すると言つたの？”

先程までの雰囲気は、一気に吹き払われていた。

“魔剣士”と恐怖されているとは言え、エリアドは普通の生を生きてきた人なのだろう。そんな人が、生まれながらに差別された自分と、何処に類似点を見いだせると言つたのだろうか。一体、自分の何を判つていると言い切れるのだろうか。

納得できない想いがレムリアの中で渦巻き、いやが上にも膨れあがつていいく。

「仰つているのですが・・・わたくしには、判りかねます。」

言つてしまつてから後悔する。自分の精神修養の甘さに嘆息するしかないのだが、時既に遅し。

「・・・」

だが、自嘲気味の笑みを浮かべるレムリアを見ながらも、エリアは無表情で黙したままだつた。

気がつくと、ホールからの喧噪が聞こえなくなつてゐた。宴もそろそろ終わりに差し掛かつてゐるのだらつて見ると、あれほどいた招待客の数も疎らになつてきている。

相手も、自分に興味が薄れてきたことだらつて、口には切り上げ時だらう。レムリアは今一度顔を上げると、出来得る限り明るく聞こえるように聲音を作る。

「今宵は、興味深いお話しをありがとうござります。これからも健やかにお過りしご成られるよう、祈念申し上げます。」

ドレスの裾を持ち上げると、優雅に一礼する。

“ そう・・・これでいい。わたしはわたし。人とは異なる道を歩いてこる。一時交わることがあつても、長くは続かない。今までそうであつたし、これからもそうだらう。 ”

ゆづくつと息を吸つと、レムリアは別れの言葉を口にした。

「それでは、まじ機嫌よつ。エリアアド・ムーンシャドウをね」

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／王宮（祝宴にて）

「ああ。」

レムリアの言葉に、エリアドは自分自身の中で温度が下がつてゆくのが判つた。

“期待し過ぎたのだろうか？

いや、そもそも私は彼女に何を期待していたのだろう・・・。彼女の中に、期待させられる何かがあつたことは間違いない。だが、それがそのまま彼女に期待してもよいということには繋がらない。

それだけのことだ・・・”

「結局、人は自分が見たいものを見ようと/orする・・・か。」

唇の端に浮かぶ、自嘲気味の皮肉っぽい微笑み。

俯き加減のレムリアに向かつて言う口調には、存外失望の色が含まれていたのかも知れない。

「・・・君も存外臆病だったのだな。

『人が、人で有り続けるために狂わねばならないとしたら・・・』とまでの問い合わせを発したにも関わらず。』

社交辞令のような言葉には、して興味を惹かれはない。

「・・・だが、無理もあるまい。人は、他人との距離を保つことに

よつて自らを守らうとする孤独な生き物である。・・・誰にその臆病を責められよう。・・・私とて、やがて訪れるであろう暗黒の恐怖に打ち克つ方法を、その恐怖に怯えながら模索する一人の孤独な人間に過ぎぬ・・・。

少しの間、魅力的とも思える漆黒の双眸を見つめる。

「今宵のところは、私もこれにて失礼させていただこう。良き夢を・・・な。

マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンディ

## 魔性の瞳・21 「空虚」

ヴェロンティ連合王国／王都シエンンドル／王宮（祝宴にて）

「臆病……？」

レムリアの中で、何かが燃え上がったようだつた。或いは、何かが溢れ出ようとするのか。

意志の力を振り絞ると、レムリアは“それ”を押さえようとした。決して“これ”を見せてはいけない……

気持ちを整えるように、幾度か大きく息を付く。もう大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

「……やうなのでしょう。いえ……。そのように思つて頂いても結構です。」

漸く、それだけを口にする。

顔を上げると、何も感じていなかのよつな、無表情な仮面が出迎える。

自分の胸の胸の鼓動が聞こえている。

何かが、流れ出していく。

胸の内に、奈落のような空虚な部分が広がつていく。

何も感じない。何も感じられない。何時も……同じ事……

隙有れば暴走しようとすると、"それ"を、じつにか押さえられる。

今は、駄目……今は……

少しづつ、"それ"は収まってきた。  
何とか自分を落ち着かせると、自分の想いを言葉にする。

「ヒリアドさま。健全な人がこそ夢を観るのです。狂い続ける者は  
夢に生き、せめて現世の夢を観ようと想うのですから。」

他人にここまでつまらと言つたことはなかつた。  
言えば、また差別のネタになるだけだつたからだ。

しかし、ヒリアドは黙つたままだつた。

小さく一礼すると、レムリアはバルコニーを後にした。  
通り抜けたガラス戸を通して、バルコニーに残した相手の佇む姿  
が瞳をよざる。

軽い嘆息を一つ漏らすと、レムリアは後ろを振り返らずに歩み去  
つた。

「……どうやら、彼女の誇りを傷つけてしまつたらしいな。

バルコニーに残されたヒリアドはぽつりと言つた。

失言だつたか・・・。

ゆつくりと夜空を見上げる。

その言葉の耳にした瞬間の彼女の微かな変化は、かるりうじて感じ取れた。

「だが・・・。」

自分は狂氣に包まれ、夢の中に生きていると言いたいのだろうか。

「・・・それは哀しい考え方だ。」

手にした“阿修羅”に視線を落とし、小さく呟く。  
なぜ、そのように感じるのか、しかと判りはしなかつたが。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／王宮 庭園

軀が熱かった。

どうしようもない激情に駆られて、レムリアは足音高く回廊を歩いていた。

それは、自分の克己心の無さに対する自己嫌悪なのか、相手の態度に対する憤りなのか 己が思考の混乱が故に、レムリアにはよく判らなかつた。

とにかく、その場を離れて自分の感情を静めたかった。ヒソヒソと噂話が飛び交う大広間を飛び出ると、庭園に出る廊下を足音高く歩いていく。外気にあたれば、少しばは気分が違うだろう。

『どん……』

「あっ……」

レムリアが王宮の庭へ出よつとした時、外から館に入つて「よつとした人物にぶつかった。

「「めんなさい、急いでいましたので、外へ出たいのですが、そこをどうして下さる?」

感情が高ぶつてゐるせいか、ついつい口調がきつくなる。

だが何故か、相手はレムリアの行く手を遮つたまま微動だにしない。

「あの、外に出たいのですけれども。」

はつきり聞こえなかつたのか？ そつ思つてもつ一度言つてみる。

しかし、相手は尙も無言である。

普段は、忍耐強く相手の再考を促すのだが、今日のレムリアは虫の居所が悪かつた。

ため息をつくと、キッと相手を睨み付けて言つた。

「子供じみた真似はお止めなさい。わたくしが誰だか知つての上の行為ですか？」

相手は、尙も無言を貫き通している。

「わたくしを怒らせると、後悔しますわよ。」

危険な程に、レムリアの語尾が上がつてくる。  
怒りのHナジーが軀に満ちて行く。

「・・・仕方がありません。後悔、しないでくださいね。」

心の中の“力の扉”を解錠する。

“夢見の修練”を積んだ者の真の力がどれほどのものか、見せてあげよう。

ゆつくりとその瞳を閉じる。

“それ”を静める努力を放棄する。

レムリアの中で、“何か”が急速に膨れあがっていく。

そして。

「.....」

カツと見開いたその瞳は深紅の輝きを放っていた。  
辺りの空間が歪曲し、存在と非存在の境界線がぼやけ始める。だ  
が。

『キュインッ』

一瞬何かが光ったかと思つと、軀全体に痺れるような激痛が走つ  
た。

目の前が真っ暗になる。

何が起こつたのだろう? 低い笑い声が聞こえる。

「・・・あ、なたは・・・」

漸くそれだけ口にするが、そのままレムリアの意識は奈落へと落  
ちて行つた・・・。

ヴェロンティイ連合王国／王都シエンダル／王宮 庭園

「……それは、哀しい考え方だ。」

私は眩くようごくり返す。

だが、いつたい何が彼女をそこまで追い詰めているのだろう……。

しばし薄闇に包まれた庭園をバルコニーから静かに見降ろす。

「ん？」

ふと、視界の片隅を白いものが過ぎる。

“そう言えば、彼女が着ていたドレスも白だったな”

やはり、気になつていてるのか。  
自分自身に問い合わせる。

“まつたく気にならぬと言えば、瞳になつてしまふかも知れないな”

それが正直なところだ。

「あれは……」

そう……。それは、何者かに抱えられた白いドレス姿の女性だった。

レムリア  
“彼女なのか？”

一瞬、自分の目を疑う。しかし、その女性は間違いなく、彼女であるように思えた。

しかも、抱えられた彼女には、どうやら意識がないらしい。

いつたい何があったというのだ？

まさか王都の祝宴で、このような光景を目にすることにならうとは・・・。

“仕方あるまい。行つてみるか”

逡巡は一瞬だった。

バルコニーから人影の向かう方向を見てみると、そのまま眼下の薄闇に身を投じる。

「・・・我が身よ。羽根の重さとなりて、大地に降りん。」

“羽毛降下”（Feather Fall）の呪文の助けを借りて、音もなく薄闇の庭園に降り立つ。

そして、私はその人影の後を追つた。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／庭園

抱き上げた柔らかい躯は非常に軽かつた。男は無言のまま庭園に入ると、奥の一角を目指した。高い生け垣の角を何回か曲がると、母屋からは視界が通らなくなる。もとより、誰もいない庭園だ。人目を避ける、何の意味があるのだろうか。

暫し歩くと、周りを円形に生け垣に囲まれた場所に着く。静かにしていれば、誰かが近くまで来ても気が付かれないとこりだ。

『パサツ』

冬でも青い芝生に娘を横たえると、徐に上衣を脱ぎ捨てた。カラ一を緩めると、娘の脇に跪いた。透き通るような美しさだった。華奢な肢体に小さな顔。細い、柔らかい黒髪・・・神がつくりたもうた造形美の極地だった。

凍るような冬の地面に横たわる娘は、脚や腕が青くなってきた。睨め付けるように娘を見ていたが、ゆっくりとドレスの胸元に手を伸ばす。

『ビリツ』

縄を引き裂く音がした。肩口から胸元への、真っ白い肌となだらかな膨らみが露わになる。溜息を付くように息を吸うと、裂けたドレスに両手をかけ、一気に左右に引き裂いた。

「ウククク・・・・

耳障りな、甲高い笑い声が漏れる。

「悪いのは、キミだよ・・・悪いのは、キミだよ・・・」

虚けのように繰り返し呟きながらも、男は娘を辱める手を緩めない。無惨にもはだけられた白い肌は、冬の厳しい寒気に晒されて見る間に青ざめていく。

『ペリビツチ

狂人の力なのか？ 残つたドレスを常人離れした力で引き裂くと、もはや華奢な娘の白い肢体を隠すものは何も無くなつた。神聖にさえも思えるその麗容な躯を田の当たりにしながらも、男の目は欲望と狂氣とにギラギラ輝いた。

「ようやく・・・ようやく、この時がきた・・・」

興奮のあまりか、口元から一つと涎が流れ落ちる。意にも介さず、田の前に横たわる柔らかな躯を睨め付けながら、男は呟く。

「キミが・・・キミが、拒むからいけないので！」

最後は叫ぶようになり声が高くなると、男は一気に娘に覆い被さつた。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／庭園

彼女レムリアを抱えた人影は、奥まつた庭園の一角、高い生垣の角に消えていった。

“何か嫌な予感がする。何か良くないことが起きそうな……”

そう思つと、私は自然と急ぎ足になつた。相手を追つて、生垣の角を曲がる。

“……なぜ、このように心が騒ぐ？ ほんの一時、ダンスをして少しばかり会話を交わしただけの相手ではないか……”

そうした考えとは裏腹に、その時、私の心は確かに揺れていた。

“……認めなければならないといつことか。私の中で、彼女が何らかの意味を持ち始めているといつことを……”

“……星よ。我を導きたまえ。彼女のもとに……”

呟くように、空に祈る。

『ビロッ』

その時 生垣の向こうへ、布が裂けるような音が聞こえた。私は、急ぎそちらに向かって走った。

「・・・」

それを田にした瞬間、私の中の何かが押さえ切れなくなる。無意識のうちに全身から凍てつく鬼気が放たれる。それは、かつて“阿修羅”とともに身にまとっていた修羅の鬪氣。触れるものすべてを引き裂きかねぬ魔人の刃。

その恐怖の衣を身にまとい、私はつかつかと男に近づく。

「・・・それ以上、少しでも妙な動きをしてみる。次の瞬間、おまえの命はこのエルスから消えてなくなると思え。」

もし私に声だけで人を殺せるものなら、その男は死んでいたかもしれない。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／庭園

伝わつてくる氷の氣組みに動ぜず、振り返つて相手を認めると、一転男は奸悪な表情を浮かべた。

「“魔剣士”エリアドか……。お初にお目に掛かる。ヴァルガー・オフ・エルド。連合王国の男爵にして、マーガレット姫の正式な許嫁である。我が我が未来の花嫁に何をしようが、貴公の関知するところではあるまい？ それとも、貴公も“騎士道”が勧める愚かな義侠心に突き動かされて、己が踏み込んではならぬ領域に蛮勇を持つて乗り込んできたのか？」

低く嘲笑うと、横たわる白い躯をあごで示した。

「それとも……貴殿、この娘に執着か？ 他ならぬ名高い魔剣士の貴公が“どうしても”と望むので有れば、この娘を譲つてやっても良い。もはや、執着すべき“モノ”も無くなつたことだしな。」

その狡猾そうな顔に、下卑た笑いを浮かべて恩着せがましく言つ。

「……“下衆”のうえに“愚か者”とは、始末に終えぬ。」

私は、聞こえよがしに吐き捨てた。  
地面上に横たわる彼女に近寄り、そつとクローケをかける。

「……私がなぜ“魔剣士”と呼ばれているか、知らぬわけでもあるまい。おまえが何者であろうが、私の知つたことではない。」

スラリと腰の剣を抜く。無造作に男に近寄ると、そのまま剣を一振り。

わざかに相手の髪を斬り落とすか落とさぬへりこの距離で振るうと、そのまま鞘に戻す。

「……この寒い中、季節はずれの蟻が飛び廻つてこむけつだ。鬱陶しいとは思わぬか？」

相手の手の前でこれ見よがしに手袋をはずし、相手の顔にぶつけ る。

「……はずれたか。だが、季節はずれの蟻にもまして、私は、この国に巣喰つ（おまえのような）蛆虫が一番嫌いだ。」

両手を身体の脇にたらした無形無手の型。

「……剣を抜け。言つておくが、私はおまえが剣を持つていようといまいと、気に入らぬ相手に手加減する趣味はないぞ。」

そのまま、私は相手との距離を一気に距離を詰めた。

## 魔性の瞳 - 26 「下衆」(後書き)

何時も拙文をお読み頂き、有り難うござります。感謝の意を込めて、本日は一遍追加でアップ致します。今後とも、宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンダル／庭園

「挑戦とは、身の程知らずめつ……」

エルド男爵は顔を醜く歪めると、吐き捨てるように言い放った。

「少しば頭があるかと思ったが、『魔剣士』よー 貴様も所詮は思考停止の木偶の仲間か！」

言いながらも、エルド男爵は後ろに飛びすさつた。軟弱貴族とは思えぬ、予想外に敏捷な動きだ。

「抜くなら抜いて見る、愚か者め。この世で誰が強いのか、礼儀知らずの貴様に思い知らせてくれるわ！」

「フッ・・・」

私は、相手の戯れ言を鼻で嘲笑した。

動きの俊敏さで、相手に引けを取ることは微塵もない。にやりと悪鬼の如き笑みを浮かべ、さらに距離を詰める。迎撃する相手の動きをわずかな動きで左に躊躇<sup>かわ</sup>し、右から顔面を思いきり殴りつける・・・と見せかけておいての左の鳩尾<sup>みぞおち</sup>を打ち抜いた。

その身を一つに折つて、エルド男爵は苦悶している。

『ドズジ  
「ぐえつー」』

「どうした？　血漫の剣は抜かぬのか？　それとも、敵かなわぬと見て助けを呼ぶか？」

相手の腕がどうであらうが、油断するつもりはもちりん、まして手加減するつもりなど一切ない。相手に休む間を与えず、連続して足を薙ぐ。

『ガスツ！』

「ぐあっ！」

腹にパンチを食らつた上に脚払いを掛けられたエルド男爵は、見苦しい苦痛の悲鳴を漏らして無様に地面に転がつた。

「だ、誰か！　狼藉者だ！　殺されるーー！」

必死で後ずさりをすると、大声で呼ばわつた。

見苦しいにも程がある。こんな者が“大公家筆頭の一人”かと思うと、私は暗澹たる気分におそわれた。

ヴーロンティ連合王国／王都シエンドル／庭園

「どうされましたか！」

生け垣の命間から、完全武装の警備の騎士一騎が現れた。蒼白な顔をしながら、エルド男爵が指さす方向を振り向くと、強烈な凍気を放つエリアドを目にする。片方の騎士が叫んだ。

「貴様、何者だ！ この方を、王国の貴族と知つての狼藉か！」

騎士達はエルド男爵を背後に庇つと、一斉に長剣を抜刀する。

「私が酔い覚ましに奥庭を散策していたら、『ヤツがいきなり襲いかかってきたのだ！ 騎士たちよ、この不届き者を取り押さえてくれ！』

心底恐怖に怯えたよつて、エルド男爵はエリアドを指さすヒステリックに叫んだ。

「フッ・・・・み！」とな猿芝居だ。」

私は冷やかに咳く。わざとらしく足元に落ちている手袋を拾い、手に戻す。

「・・・我が名はエリアド。月影のエリアド。星々と放浪者の神の追随者にして、『阿修羅』の使い手。アーサー新王陛下を『奈落の淵』より救出した“功”により、この宴に招かれた。」

少しだけ間を置く。こちらが何者かを気づかせるために。  
そして、私はこう続ける。

「・・・もし私がその男を殺すつもりなら、その男はもう死んでいる。そして・・・私には、その男は死んでいるようには見えないが、どうかしたのか。」

それは、淡々とした口調。

少しの気負いも、また躊躇いもない、単なる事実を一方的に告げる、ただそれだけの言葉。

そして、私は振り向いてそこに倒れているはずのレムリアの方を見た。

だが、レムリアが横たわっていた場所には、自分が掛けたクローケが残されているばかりだった・・・。

何時もお読み頂き、有り難うございます。王国の有力者エルド男爵を敵に回してしまったエリアドはどうなるのでしょうか。また、消えてしまったレムリアの運命は？ 今後ともご期待下さい。

ヴーロンティ連合王国／王都シンドル／庭園

「あなたが、誰であるかはわかりました。しかし、我々がこちらに参ったとき、確かにあなたはエルド男爵に襲いかかっていた。これをどう説明されるつもりか？」「

騎士達は、その長剣こそ切つ先を地面に向けていたが、油断無くエリヤドの動きを警戒している。

「私を殺そうとしたんだ！」

「ハジセとばかりに、エルド男爵は声高に相手を非難する。

「“殺すつもりはない”とか言っているが、とんだ詭弁だ！ みよ、私のこの有様を！ 貴公らも、先程アヤツの殺意を感じたであらう！ 早く、この犯罪者を拘束してくれ！」

「……それにしても、『酔い覚ましに奥庭を散策していたら、いきなり襲いかかってきた』……とは。ずいぶんと大胆に省略した説明だな。」

男の言葉を思い出して小さく嘲笑う。

「……その男は、血の愚かしい言動にふさわしい対価を払つたに過ぎぬ。」

私は静かに言った。

「……いや、ふさわしいかどうかは、まだわからぬか。いずれにせよ、それが嫌なら言動を選ぶのだな。私は面と向かって侮辱された時、それに耐えることには慣れていない。」

レムリア  
彼女の姿が消えているのが気になつた。気にならぬはずがない。一切の痕跡を残さぬその消え方には、魔導の匂いさえ感じられる。問題は、その魔導を使ったのは誰かということだ……。彼女自身か、それともこの愚か者の関係者なのか。あるいは……。

しかし、その時の私は、それを確めるすべを持たなかつた。

「……剣を抜かなかつたのは、アーサー新王陛下に対する敬意ゆえだ。だが、不満とあれば、いつでも相手にならう。忘れるな。私とて、まだ不満は残つているのだからな。」

冷やかにそう言つと、冷たい鬪氣をまとつたまま、警邏の騎士たちを見る。

「……で、貴公らとしてはどうするつもりだ？」

これで、ある程度、警邏の騎士たちの質が見えてくる。  
私はもう一度、冷やかに笑つた。

「ソヤツの戯れ言に耳を貸すんじゃない！ 貴公等つ！ 己の職務をはたすのだ！」

口角泡を飛ばす、そんな表現がまさにぴつたりの状況だった。

先程の“小競り合い”で着衣が乱れ、おまけに顔を真つ赤にした酷いご面相で、二人の中間に割つて入る騎士達の表情にも、微かに

呆れた様な色が見えていた。

## 魔性の瞳・29 「自壊」(後書き)

エルド男爵との精神戦闘(笑)も佳境です。あと三回でシーンが変わります。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／庭園

「待たれよ。」

逡巡していた騎士達が、それでも権威を優先させようとエリシアドに向き直った時、低い制止の声が掛かった。

深い藍色の衣装を身にまとい、金色の仮面を付けた背の高い偉丈夫が、生け垣の後ろから進み出た。

「一部始終、見させて貰った。」

静かな口調だが、騎士達は強いプレッシャーを感じた様だ。一、二歩後ろに下がってしまう。

「姫君は、部屋で休まれている。それ故に、騒ぎを起こす理由は何も無い。騎士達よ。そこな貴族を館の客室へお連れして休息させてあげよ。」

明快な解決策を得て、騎士達はきびきびと動き出した。部下が両側からエルド男爵を抱え上げる。隊長はその偉丈夫に深く礼をすると、部下を促して本館に向かって立ち去った。

「さて。」

金色の仮面は笑みを浮かべた様だった。

「男爵に教訓を垂れた剣士のお名前をお尋ねしても宜しいか。斯様

な装い故、我が名を知乗ることは出来ぬがな。」

「……私の名を知らぬ、と？」

私は相手を揶揄するかのよう、唇の端に微かな笑みを浮かべる。

「……もつとも、私にとつて、そのようなことなどちうでもいいことだ。権威を振り翳すだけの見苦しい貴族に、そうした権威にさえ忠実に動かざるを得ない騎士たち……。ある意味、この国の現状をよく表わしていると言えなくもないのだろうが、いざれにせよ、余計な争いをしなくて済んだのは、貴殿の力添えによるものだといつことは間違いないらしい。」

「……そのうえ、どうやら貴殿は、かの姫君のことも御存知のようだ。私としては、貴殿の名が聞けぬのは至極残念だが、だからと言つて、勿体ぶつて隠すほど名でもない。御所望とあらば、お教えしよう。」

「我が名はエリアード。月影のエリアード（エリアード・ムーンシャドウ）  
。星々と放浪者の神の追随者にして、『阿修羅』の使い手。」

「……さて、金色の仮面の御方。それでは、私は貴殿のことをなんとお呼びすればよろしいのかな。」

私は静かにそつ尋ねた。

## 魔性の瞳 - 30 「黄昏」（後書き）

本編も漸く三十話目に達しました。幸か不幸か（笑）、物語はまだ続きます。今後とも、お読み頂ければ幸いです。

ヴェロンティ連合王国／王都ションドル／庭園

「・・・相手に対する憤りは心情的に無理からぬ事だが、無思慮な言動が容認されるほど、この国の規範も甘くはない。賢明な者ならば、己の考えを吐露する場所と相手の心得はあるだらう。」

低い静かな声には、不思議と反論や反感を感じさせない“響き”があつた。

「“黄昏卿”（Lord of Dusk）・・・我のことば、斯様に呼ぶがよい。」

言葉を止めると、しばしの間黙つて相手を見る。  
と、俄に本館の方が騒がしくなつてきた。ちらりと喧噪の方角に視線を振ると、

「ゆるりと話すのは、次なる機会と致せう。その時まで『機嫌よつ、エリアド・マーンシャードウ。』

金の仮面は踵を返すと、その場からゆっく歩き出した。  
数歩進んで、生け垣の切れ目にて立ち止ると、肩越しに叫ぶ。

「・・・姫君は、本館の奥の部屋で休んでいる。御希望と有れば、見舞いにでも行かれよ。」

しばし相手に合わせて仮面の向い側からじりじりを見る瞳をじつと見返す。

その迷いを感じさせぬ瞳に、私は少しだけ目を細めた。

“・・・まだまだ修行が足りぬようだな、ヒリアード・ムーンシャード  
ウ”

咳くように自分で言い聞かせ、小さく嘆息して一礼すると、口を開く。

「・・・御助言、感謝する。“黄昏卿”殿。」

館の喧騒に向かつて去る“夕刻斎”と名乗った人物の後ろ姿をそのまま見送り、私は口の中で小さく咳く。

「・・・この国もまだ捨てたものではないといつゝとか。それとも・  
・・・」

しばし瞑目し、この国の未来に想いを馳せる。

“祖国”と呼べるほどには、この国のこととは知らない。

だが、それでも私にとってこの国は生まれ落ちた故郷なのだ。

「・・・なかば成り行きとは言え、この国でこのような想いを抱くことにならうとは・・・」

私は咳くよつよつと、足早にかの人物に教えられた奥の部屋へと向かった。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンンドル／庭園 富殿／奥の部屋

夜が更けていき、空の雲も散つてきていた。

闇に輝く宝石が如く、白く、蒼く、紅く・・・星々が夜空に煌めいている。

星明かりの差し込んだ部屋は、静けさの中にまどろんでいた。部屋の中央に置かれた天蓋の付いたベッドに、白い姫君は静かに横たわっていた。その表情は陶磁器の様に白く、儂げだった。

予め、申し送りがあつたのだろう。侍女が扉を開けてエリアドを中心に通すと、一礼して静かに扉を閉め、控えの間に下がった。後は、静寂だけが残された。

「・・・」

ただ己の心の示すままこうしてここまで来てはみたものの、目の前で横たわる彼女に、いったい何と声をかけてよいものやら思ひ見当もつかず、私はただ逡巡するのみであった。

ただ黙つて扉のところで立ち尽くす。

「・・・起きておられるか?」

我ながら陳腐な言葉だと思はしたが、しばしの沈黙の後、私の口をついて出てきたのは、そんな言葉に過ぎなかつた。

「・・・はー・・・」

静かな、澄んだ声。

しかし、感情の欠片も込められていない声。白い姫君は、ベッドの上で身動きもせずに、じつと天蓋に虚ろな視線を向けていた。

「・・・わたくしに、御用・・・でしょうか・・・?」

レムリア  
彼女は、感情の欠片も感じさせぬ声で私に応じた。しかし、それはけして彼女が何も感じていいないことを意味するわけではない。おそらくは驚くべき自制心によって自らの心を押し殺しているのだろう。私にはそんな風に思えてならなかつた。

残念ながら、彼女が何を感じているのかまではわかりはしなかつたが、このような時にさえ（いや、このような時だからこそ、なんか）自らの心を押し殺してこらえようとする彼女が不憫でならなかつた。

「・・・貴女<sup>あなた</sup>に会いに来た。・・・もし迷惑でなければ、しばし貴<sup>あ</sup>女の傍にいる許しをもらえないか。」

私はやや躊躇いがちに、そう問い合わせた。

ヴェロンティ連合王国／王都シンドル／宮殿／奥の部屋

「…………」

抑揚のない声。だが、その言葉の語尾には微かな震えが混じっていた。

中庭に面した大きな窓から、星明かりが差し込む。部屋は、静けさの中に沈み込んでいるようだ。やがて・・・小さく溜息をつくと、レムリアは身動きしげしげの上に軀を起した。

「退屈・・・されているのではありますか？　少し、お話をいたしましょうか？」

どんな表情で言ったのだろう・・僅かな星明かりでは、相手が何を想つて話しているのか、確かめる術もない。

「不作法ではあります、エリシアさま宜しければ、このままでお話をさせてくださいませ。」

微笑みの感情が伝わってくる。声にも、感情の色合いが含まれている。

だが・・・シンシンと静まりかえる様な部屋の雰囲気は変わらない。

レムリア  
彼女の返事は微かに震えていた。本来なら、それは私にとつて喜ぶべきことだ。彼女の本当の心が・・・少なくともその一端が・・・

顔を見せていいのだから。

しかし、今の私には、それがこのよつた時であることが無性に切なく、そして、哀しかつた。

私は、ただ静かに星明かりに浮かぶ彼女の影を見つめ続けた。しばしの後の彼女の問いかけに、

「・・・ああ。」

と短く相槌を打ち、私は微かに頷く。

それ以上何か言えば、私の声もまた彼女のよつて震えるだらつとわかつっていたから・・・。

## 魔性の瞳・34 「懲哭」

ヴヒロンバティ連合王国／王都シモンズデル／富殿／奥の部屋

「・・・では、戯れまでにお聞き下せこませ。」

溜息を漏らす様に言つて、レムリアは語り始めた。

「夢を・・・観てします。心が暖まる、温もりのある夢を・・・。それは、決して現実となることがない。だから、安心して観ていいのです。

夢が、夢で終わることを哀しく想つ」ともありますけれども、自分に夢観る自由が残されてくるのならば、それだけで良しこよつそう想うのです」

両手を握りしめて頃垂れる。

「“魔性の瞳” わたくしの瞳の事はござ存じでしょ? 人が覗き込んではならない、“原罪の証”。本来なら、この瞳が為にこの国では即座に断罪されていたことでしょう。

運良く・・・などと言つてしまつても良いのかわかりませんがわたくしは王家に繋がる者として生を受けました。王陛下と王妃殿下は優しくも、じんなわたくしでも許してくださいます。けれども・・・」

声がだんだんと高まつてこぐ。

「・・・けれども、この国を覆つであろう災厄が、黙オみと暗闇に覆われてこる未来が、わたくしには観えてしまつてこります!」

美しい都が戦火の中に崩壊し、国土の大半が蹂躪され、多くの人が命を落とし……」

「どうしようもなく躯が震えている。握りしめた両手は、血の色が失せて白くなるほどだった。

「……これは、狂気に生きるわたくしが、望んで觀ている夢が為の夢なのでしょう。

そう……人で有りざるわたくしが、人の中で生きていることの……

・  
・  
・

これはわたくしが背負つた“業”かも……しません

不思議と、涙は流れなかつた。いや　　流す涙など、とうに枯渇しているのだらう。

静かに、そして深い絶望を持つて、己の運命に流されているだけ。そう言つても過言ではなかつた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／宮殿／奥の部屋

「……貴女は、優しい人間なのだな。」

私は、ふうといため息にも似た深い息をして、彼女の言葉にゆっくりとそう続けた。

「……これまで、貴女がこの国でどのよくなみにあつてきたのか、私には想像することしかできないが、少なくとも、良い“想い出”と呼べるようなものがさほど多くないだらう、という程度のことはわかる。……にも関わらず、貴女は、この国を覆う災厄の予感に心を痛め、そして、それが自分の罪深さゆえの“業”の為せるものだと思つてゐる……。

「……たぶん、貴女は、貴女自身が思つてゐるよりもずっと人間らしい人間なのだ。私は、これまで、貴女のように涙一つこぼさず、心で泣く人間を見たことがない。……だが、本当に哀しい時、本当に深い絶望に囚われた時には、涙など出できはしない。……少なくとも、私はそのような深い哀愁や絶望があるということを知つてゐる。」

自分でも、声が震えているのがわかつた。

「……あるいは、貴女の観た夢は、“眞実”になるのかも知れないし、“眞実”にはならないかも知れない。残念だが、私には貴女の観た夢そのものについて言えることはほとんど何もない。……だが、貴女の気持ちが、まったくわからぬというわけでもない。」

薄闇の中、私は少しだけ間を置き、彼女の傍レムリアらにそつと近づく。そして、彼女の返事は待たずにつづける。

「……私が“阿修羅”という名の魔性の剣を持ち、“魔劍士”と呼ばれていたということは御存知だろう。……実際、一時期の私は、“魔劍士”と呼ばれるにふさわしい行動を取り、目の前に立ち塞がる“敵”と戦う……いや、敵を殺す……ことを楽しんでさえいたということは、まぎれもない事実なのだ。私は、私の中にそういう自分がいるという事実を否定するつもりは微塵もない。

・・・あの頃の私は、“阿修羅”が背負う“業”を、自分一人で背負つたつもりになつていた。その“業”的何たるかを知ろうともせぬまま、それを背負う自分に酔つてさえいたのかもしれない。

失礼な話だが、今の私には、貴女あなたがあの頃の私自身と重なつて見えているのかもしれない……。あの頃の私と、今の貴女あなたとの違いは、おそらく傍そばに自分を信じてくれる者がいたか否かという以上のものではないように思えてならないのだ。

・・・ゆえに、そして、だからこそ、私は貴女あなたの優しさを信じよう。

貴女あなた自身さえ信じていらない貴女あなたの優しさを、私は信じよう。

そして、私は彼女の背レムリアに外套をそつとかけた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／宮殿／奥の部屋

「・・・労いの言葉、ありがとうございます・・・」

やがて、ため息をくくように吐息が漏れると、レムリアはそつと  
言つた。

「このように応えるのが普通の反応 エリアドさま、あなたがわ  
たくしに掛けてくれる言葉が、普通の人の言葉であるのと同様に・  
・」

レムリアの聲音は余りにも平板だった。感情がかき消えてしまつ  
たようなその声は、心のない人形が発するものよつだった。

「エリアドさま。“人に有らざる者”が人に憧れることと、“普通  
の人”が誤つて暗い道に踏み込んでしまうことの間には、飛び越せ  
ぬほど深い溝があるのです。

わたくしが申しあげたあの戯れ言の中に、人に理解されるような  
言葉が含まれていたとしても、それを発した想いに大きな相違が有  
ればこそ、それは結果として理解され得ると、その方に思われてい  
るに過ぎません。

真実を・・・じまかすことは出来ないのです。」

途中、何度も声が途切れるかのように震え戦慄いていた。

暫しの静寂が訪れた。ただ、浅く早い息づかいが聞こえるのみ。  
やがて、俯いていた顔を、僅かにエリアドに向けると。

「それでも・・・そんな、言葉に喜びを感じるわたしの心が、まるで普通の人であるかのように振舞つことを・・・いま、いまこの時はお許し下さいませ・・・」

無理に浮かべたような微笑みからは、痛々しさしか伝わってこなかつた。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／宮殿／奥の部屋

私は、<sup>レムリア</sup>彼女の肩をそっと抱き寄せる。

「もし貴女の心が、普通の人であるかのように振ることを望むのであれば、そのようにすればいい。・・・それで、貴女の心が背負う重荷が少しでもやわらぐものならば。」

そして、彼女が落ち着くのをしばし待つ。

彼女の身体の微かな震えが止まるのを待ち、私はゆっくりとこう続けた。

「・・・『人に有らざる者が人に憧れることと、普通の人あなたが暗い道に踏み込んでしまうことの間には、飛び越せぬ深い溝がある』・・・貴女あなたがそのように言うのなら、おそらくそれは正しいのだろう。」

そう続ける声は、すでに震えてはいなかつた。

「・・・だが、このことはわかつてほしい。私はけして貴女あなたが言うところの普通の人あなたの貴女の答えを期待して、貴女あなたに言葉をかけたわけではない。貴女あなたが、貴女自身の言うところの人に有らざる者であるうと、あるいはそうでなかろうと、私にとつて、そのことはさほど気になるようなことではないのだ。」

私は、彼女の漆黒の瞳を正面からじっと見つめる。

「・・・それは、たとえ貴女あなたが何者であるうとも、その在るがまま

の貴女あなたを理解したいと、私が望んでいるに他ならないからだ。」

私は静かに言った。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンダル／宮殿／奥の部屋

思いの外、その腕の中は暖かかった。気を緩めると、そのまま溺れてしまいそうだ。

しかし、それはただの現実逃避で、何らの問題解決にもならなかつた。

“諦めるのは辛くない。いつもの、事だから……”

レムリアは意志の力を振る絞つて、そつとヒリアドの手を押しやつた。

「・・・あるがままのわたくしで良いと・・・。あなた様からそれを伺つて、わたくしは喜ぶべきなのでしょうか。それとも、哀しむべきなのでしょうか・・・。

どうあっても、わたくしはわたくし以外の者にはなり得ません。わたくしにとって、そんな自分がどうのうつに觀られようと、どのように受け止められようとも、わたくし自身の本質には何の変化も生じない・・・」

俯いていた顔を上げると、思いの外強い光がその双眸に宿つていた。

「・・・同情、なさらないでください。同情して頂きたくて、こんな話を語つた積もりではないのです。同情して頂いても、一時心が安まるだけ。その後に残る現実の厳しさに、やりきれない想いがより一層募るだけです・・・」

そういう切ることに、どれだけの意志の力が必要なのだろうか。  
安らぎと平和を遠ざけることを、何処まで受け入れられるのだろうか。

それが、簡単な訳がない。

それでも、徹頭徹尾、弱い想いを心の奥深くに仕舞い込み、レムリアは健気にも微笑みを浮かべた。

「戯れ言を申し上げてしましました。どうか、お忘れになつて下さい。宴に浮かれて、わたくしはどうかしていたのでしょうか。また明日になれば、変わらぬ笑みで歓迎申し上げますでの、今宵はどうかお引き取り下せませ」

丁寧に頭を下げた姿からは、内面の葛藤など微塵も感じさせなかつた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンンドル／宮殿／奥の部屋

「……同情ではない。私がいかに貴女を理解したいと望んでも、私は貴女自身ではありえないのだから、貴女と同じ想いなど抱けようはずもない。……本当の意味で同情など、できようはずもないのだ。」

私は感情を無理やり抑えた低い声で言つた。

「……しかし、私はそれでもそう想わずにはいられなかつた。ただ、それだけのことだ。……そのような私の想いが貴女を苦しめてしまつたのなら、今はすまないと謝ることしかできないが……」

少し躊躇いながらこいつ続ける。

「……私は、光の下で貴女の仮面の笑顔を見るよりも、闇の中であつても貴女の本当の顔を見ていたい……」

薄闇の中、少しだけ間を置いて、私は彼女の顔をもう一度じっと見つめる。

「……だが、貴女がそう望むのなら、今宵は引き取らう。」

ゆつくつと扉へ向かう。

「もし貴女が望むなら、私は……」

・・・ 私に（彼女のために）何ができるのだらう。

それは、私がそれまでに感じたことのない“想い”であったことは間違いない。

「・・・明日の朝。陽の光の元で、またお逢いしましよう・・・」

その囁くような声は、相手に聞こえたのだろうか。  
ゆっくりと頭を下げる、レムリアは黙つて相手が部屋を立ち去るのを見送つた。

パタンと小窓の音を立てて扉が閉まる、ほつと溜息をつく。

「闇の中の素顔・・・ですか・・・」

その言葉に他意が無いことを頭では理解していたが、それでも相手の言葉が小さな棘のよう、じくじくと心を苛んだ。

「わたくしは、わたくし以外の者にならうと思つてはならない・・・  
そつ言つことなのでしょうか？」

その独り言を聞いた者は、誰もいなかつた・・・。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／宮殿／奥の部屋

「・・・」

部屋を出た私は、深い無力感に包まれ、小さくため息をついた。  
彼女の心が深い絶望に覆われているということは感じ取れたが、  
それにはどう応えればいいのか、まったくと言つてもいいほどわから  
なかつたからだ。

おそらく、他人のために何かをしたいという心からの想いを抱い  
たのは、久方ぶりのことであつた。・・・にも関わらず、私は無力  
だった。彼女の絶望は、私が想像することができたものよりも、ず  
つと深いものであつたのだろう。そして、その絶望は、“他者の拒  
絶”という形ではなく、むしろ“自分自身の否定”という方向に、  
その姿を現わしているように私には思えた。

ただ、彼女自身の中にも、その“否定”に対する迷いは、残つて  
いるのだろう。

だからこそ、私のような他人の言葉に幾分なりと耳を傾けるので  
あろうし、自らの想いをもらしたりもするのだろう。あるいは、私  
にとって、それがわずかな希望になり得るのかもしれないが・・・。

いざれにせよ、彼女はこの場所（この国）にとどまるべきではな  
いのではないか・・・。私にはそんな風に思えてならなかつた。  
少なくとも、この国にいる限り、彼女の見る景色に変化はない。  
そして、そうである限り、彼女の目も他の想いが映ることはないの  
ではないのか・・・。いささか極端な言い方ではあるが、私にはそ  
のように思えてならなかつた。

「・・・私に、何ができるだろ?」

漠然とした想いはあつたものの、その時の私の中で、その想いはまだ確固たる形を取つてはいなかつた。

何時もお読み頂き、有り難うござります。本編で以て、「舞踏会編」は終了となります。次回からは、「惑う夢編」がスタートします。今後とも、「魔性」を宜しくお願ひ申し上げます。

田 覚めたレムリアは、エリアドを想つて行動する・・・

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／宮殿／レムリアの寝室  
居室

一夜明けると、暗い曇天が広がっていた。シェンドルの外には特有の陰鬱な天候だ。

何時も早くに田覚めるレムリアだが、この田は珍しく、表が大分明るくなつてから田を覚ました。

ゆつくつとベットから起きると、ちょっと考えてから、おもむり徐に呼び鈴を鳴らした。

すぐに扉がノックされると、小柄なメイドが現れる。

「お呼びになりましたか？」

「おはよ、アンヌ。ねえ、ムーンシャード<sup>ムーンシャード</sup>を届けてくれる？」

「はい、もちろんです。レムリアさま。」

「まだ朝食を召し上がりたいなければ、わたくしと一緒しませんかと、そう伝えて欲しいの。」

「はい。ところで、今朝の朝食はどうぞお召されますか？」

「わたくしの居間に運んでくれる？」

「わかりました。では、さっそく行つて参ります。」

「お願いね。」

アンヌが出ていくと、ワードローブを開いて幾つかの服を手に取つた。

少し迷つた後、結局一人で着付けが出来る軽い白の上下を選んだ。

その上に、薄い蒼の上着を羽織る。

髪を肩口で切りそろえているので、胸のふくらみがなければ年若

い青年騎士にも間違われそうな装いだ。

こんな格好も、口さがない噂話のためにされている事は知っていたが、レムリア自身は特に頓着していなかつた。

“動きやすい方がいい”

自分は、女性として見られる事が好きではないのかも知れない  
そういう事があつた。

女性としての魅力が無い訳ではない。漆黒の髪に、抜ける様に白い肌。端正な顔に輝く双眸。誰にも、非常に魅力的に見えるのだろう。そう思つていなければ、本人だけなのかも知れないが。

「レムリアさま。」

物思いにふけつていると、アンヌが戻つてきた。

「伝えて参りました。いらっしゃるとの事です。」

「そう。それじゃあ、用意をお願いね。」

「はい。ところで、レムリアさま、」

「なあに?」

「またその様なお召し物を!」

毎度恒例のアンヌのお説教が始まつた。

困つた表情を浮かべると、人差し指をたててお説教モードのアンヌに弁解する様に言ひう。

「アンヌに着付けを手伝つて貰う手数を掛けたくなかつたから・・・

「お手伝いする為にわたしはいるんです。」

「身軽な方が、わたしは好きだし・・・」

「好き嫌いの問題じゃありません。」

「・・・似合わないし・・・」

「レムリアさまに会わせて、全部仕立てられたドレスですよ。」

「いいよ逃げ道が無くなつてきた。」

「いいの。」これが一番着易くて、動き易いから。」

最後は開き直る。

それに対しても、アンヌが大袈裟に溜息を付いてみせる。いつものパターンだ。

「はあ・・・とつてもお似合いですの。」

「そんなことを言つのは、アンヌだけよ。」

「そうお思いになつてているのはレムリアさまだけですわ。」

これで、とりあえず決着。

いや、結論は出でていないので、毎回こんなたわいもない会話を交わす。習慣の様なものなのだろう。

「わたしは、ムーンシャードさまを居間でお待ちします。」

「はい。わたしは、急いで朝食の用意をしますね。」

「ん、お願ひ。」

アンヌが出ていくと、レムリアは隣室への扉を開けた。

寝室の隣はレムリアの居間となつていた。部屋の奥の暖炉には既に火が燃えており、広い部屋は気持ちよく暖まつていた。

部屋に入つて扉を閉めると、窓際に歩み寄つて外の庭を眺める。

『ガラガラガラ』

やがて、朝食を一人分乗せた台車を押してたアンヌが扉を開けて入ってくる。

窓際のテーブルを手早く飾り付けると、90度の角度を付けて扇状に椅子を一脚置く。

「レムリアさま、用意が調いました。」

「ありがとう、アンヌ。」

レムリアは窓から離れると、飾り付けられたテーブルに付くと来訪者を待つた。

## 魔性の瞳 - 41 「待望」（後書き）

本編から、「惑う夢編」の開始です。新たな登場人物達も加わり、物語は徐々に佳境へと入っていきます。ご期待下さい。

レムリアに朝食に招待されたエリアドだが・・・

ヴェロンティ連合王国／王都シンドル／富殿／レムリアの居室

「……お待たせして申し訳ない。……御気分は、いかがか？」

月並みな挨拶。朝の光の下で見るレムリアの顔に、昨夜のような苦悩の表情は見てとれない。

むりん、だからと云って、彼女の苦悩が消えてなくなつたわけではあるまいが……。

彼女は、舞踏会でのドレスとはうつて変わって、動きやすそうな実用的な服を身につけている。

口をがないう者には、女性じゃないと言われそうな服だったが、私の目から見ると、ドレスよつむしろ彼女には似合つているようにも思えるほどだ。

そして、さほど化粧しているとも思えぬ薄い化粧。あるいは、女性であることを求められるのは、あまり好きではないのかもしれない。彼女の顔を見ながら、私はふと、そんなことを思つ。

「おはようござります、ムーンシャウトわわ。」

レムリアは立ち上がりつてエリシアを笑顔で迎えた。

「お嬢さまをお迎えしているのですもの。非常に楽しい気分ですわ。わあ、お座りになつて下せませ」

自ら椅子を引いて、エリアドを座らせる。自分も隣の椅子に腰掛けたと、嬉しそうに華やかな笑みを浮かべる。薔薇色に頬が紅潮し、黒い瞳が輝いている。

「お紅茶に致しますか？ それとも、珈琲ですか？」

一つずつ、エリアドの好みを確認するように丁寧に聞いてゆく。自分は紅茶を選ぶと、後ろに控えていたアンヌに用意を、と声を掛ける。

はい、と元気良く答えると、アンヌはまずはエリアドに、そしてその後レムリアに紅茶を注ぐ。

銀のポットをトレイに置くと、銀の蓋をした皿から蓋を取つて、一人の前に出す。ハムエッグにサラダ、それから種なしのパンだ。

「どうぞ、召し上がり。」

エリアドに勧めると、自分もパンを取つた。朝食はとても美味しくできていた。ハムエッグの半熟度も絶妙ながら、サラダも冬場とは思えないほどの鮮度だ。食材は、特別に王室用に作らせているのだろう。

「天気を零すのは不作法ですけれども……わたくしは、このような天気は好きになれませんわ。」

少し眉を寄せながらレムリアは小首を傾げて言った。

「曇天や雨天は気が滅入る感じがいたしますの。」

花のような笑顔、と言つるのは斯様な笑みを言つのであるつか。そんな、華やかな笑顔をレムリアは浮かべていた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンンドル／宮殿／レムリアの居室

なぜか、その彼女の笑顔は、私にはさほど魅力的なものに映らなかつた。流浪の剣士に恋をした（かもしけぬ）年若い姫君の演技としては、おそらく申し分ないであろうその様子は、しかしながら、私にとつてさほど惹かれるものではなかつた。

とはいえ、その原因の一つは、彼女が私のことを“ムーンシャドウ（月影）”という家名の方で呼びかけたことであり、その点について言えば、それはけして彼女の非ではない。

“ムーンシャドウ（月影）”の家は、けして名のある家柄ではない。それは、父が北の魔王との戦いの中で克ち得た一代限りの騎士の称号であり、その後もなく父は戦死し、すでに存在しなくなつた家名である。2つ年上の兄は、国のために戦い、家を再興するのだと言つて、成人と同時に騎士団に身を投じたが、私はその道を途中で放棄した。そして、その兄の消息も戦火の中に途絶えて久しい。もしも仮に、その名で呼ばれるべき者がいるとしたら、それは私ではなく、兄であるべきなのだ。

私は、過去の痛みを呼び醒ました彼女の横顔を見つめ、複雑な表情で重たい口を開く。

「・・・もしよろしければ、私のことは、“ヒリアド”と呼んでもらえまいか。」

「・・・これは私の過去の罪に対する罰なのだろうか。

私は心中で小さく呟く。

彼女の問いかけに私が選んだのは、砂糖を入れない紅茶。そんなせいもあってか、あまり気乗りしないというのが正直なところだが、私はそれでも彼女に勧められるままに、用意された朝食に手を伸ばす。

しかし、時間の経過と共に、次第に仏頂面になつていくのが自分でもわかつた。

そして、そうなつた原因は、けして家名のせいだけではなかつた。

華やかな朝食。とりとめのない会話。笑顔の下に隠された真実···。そのすべてが、この国の現状そのものであるかのように思えてくる。

そう、だから、私はこの国を出た。幾多の冒險行を経て、私は幸運にもアーサー王<sup>王子</sup>という一人の人物を救い出す機会に恵まれ、この国に戻つてくることができた。もちろん、私がそのような機会に立ち会つことを許されたのは、運命の女神<sup>イスタンス</sup>の御心に寄るものに過ぎない。

しかし、私はそれでも、彼という人物によつて、この国に何らかの変化がもたらされることを期待していた。それが他力本願の愚かしい願いに過ぎぬとわかつていたにも関わらず、そう願わざにはいられなかつた···。

あの頃と、何も変わりはしないのだろうか···。何も変わってはいかないのだろうか。この国は···。

とりとめのない彼女のセリフを聞きながら、私は迷つていた。彼女にその問い合わせべきか、否か···。

もし彼女が今に満足しているのであれば、私にできることはない。  
。しかし、そもそも今に満足しているのであれば、彼女は私に  
声などかけようとはしなかつたであろうし、私もまた彼女に応えよ  
うとは思わなかつたはずだ。

私は何も言わず、ただじつと彼女の瞳を見つめる。・・・彼女の  
心を、見つめるかのよひ。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンダル／宮殿／レムリアの居室  
いつの間にか、言葉が途絶えていた。見つめ返す瞳はその眩い輝  
きを失い、代わって、深い深淵がその姿を垣間見ていた。

「退屈……させてしましましたね。」

その言葉は、自然と零れ出たかのようだった。小さく溜息を付く  
と、心持ち肩を落とし、視線を窓の外に振る。

「……それに、お気も悪くさせてしました。こちらからお誘  
いしましたのに、本当に不調法なことですね。大変失礼しました。」

丁寧ながら、どこか他人行儀な口調だった。その白い横顔には、  
何の感情も浮かんでいない。

「今朝は、お付き合に下さつてありがとうございました。一人で朝  
を食べるのに退屈してましたので……」気分、ご都合も考えず、  
短慮に走ってしまいました。」

向き直ると、ゆっくりと頭を下げた。

「……いや、貴女が謝る必要はない。私の方こそ、招待していた  
だいたにも関わらず、貴女の気持ちも考えず、自分の想いに囚われ  
てしまっていた……。謝らなければならぬのは、むしろ私の方  
だ。」

私は低い声で言った。

「・・・申し訳ない。・・・私にとつてこの国は、良くも悪くも、普段は心の奥底に眠らせていろいろな想いが搔き立てられる場所なのだ。・・・けして、それを言い訳にするつもりではないが、そのせいで貴女の気分まで悪くさせてしまったことは、本当に申し訳なく思う。

・・・どうやら、私は自分の気になることがあると、そこから思考が抜け出せぬ性質らしい。せっかく、貴女の方から声をかけていただいたいたのうのに、私は気の利かぬ男だな・・・」

ふうとため息をついて、少し口調を変える。

「・・・気晴らしにて、と言つては何だが、もし貴女さえよろしければ、どこかに遠乗りにでも出てみないか?」

ヴェロンティイ連合王国／王都シオンダル／富殿／レムリアの居室

「……お気遣い、ありがとうございます。でも……」

躊躇う想いに、レムリアの眼差しが揺れる。

「わたくし如きに、貴重なお時間を使って頂いても宜しいのでしょうか？」

「……そのようになれば、自分を卑下な扱いとはしない。幸いなことに、今の私には、自由にできる時間が十分にあるし、その時間に貴女と一緒に過ごせれる幸運を、私はうれしく思っている。」

ヒリアドは、彼女の言葉に躊躇うことなく、そう応えた。  
それは、まぎれもなく彼の本心からの言葉である。

「やひ・・・ですか。それなら、良いのですが……」

躊躇がないと言えば、嘘になる。

これまで、何人の者が近づいてきた。だが、何れもレムリアが王妹であるが為、王に近づく一手段として利用価値があると思われただけだった。

“ そうでなければ、こんなに忌み嫌われているわたしなどこそ、話しかける人などいない ”

過去の哀しい経験から、レムリアは自然とそのように思つようになっていた。

“この人はどうなのだろう？”

目の前の人物は、人を近づけさせないような、先鋭的で排他的なオーラを身に纏っている。

過去に、辛い経験をしたのだろうか？

ただ、人嫌いなのだろうか？

徐々に、相手の事が気になり始めているレムリアであった。

レムリアが躊躇するのを、エリアドは無理もあるまい・・・と思つた。

彼女の過去がつい昨日会つたばかりの他人の言葉を、そのまま無条件に信じられるほど恵まれていたとは思えないからだ。

「それより、貴女の方こそいいのか？ 私のような悪名高い者と一緒にいると、またあらぬ噂の種になってしまつのではないか？」

唇の端にわずかに歪めて、エリアドは冗談ぼく笑つてみせた。実のところ、けして冗談で済ませられるよつた問題ではないのだが。

ヴェロンティ連合王国／王都シンドル／富殿／レムリアの居室  
「わたくしの方は、特に何の心配しておりません。エリアドさまが  
“気にしない”と仰られるのであれば、遠乗りのお供をいたしまし  
ょう。」

レムリアの表情には薄い笑みが浮かんでいた。

「いひいづ言い方をしますと、お気に障るかもしれませんが・・・。  
共に世間に警戒されている身。人々に何を思われても、これ以上わ  
たくしたちの立場が悪化するところともないでしょ。」

カツプにそつと手を伸ばすと、紅茶を一口含む。紅茶は少し冷め  
てしまつており、苦みが出てきていた。

“熱も・・・冷めれば、苦い・・・”

思い返しても、この国にも都にも、心には辛い想いしか残つ  
ていなかつた。

唯一の楽しい思い出は、ヴエルボボンクに滞在した2年間だけだ  
つた。

あとは 思い出すのも辛い、暗闇に覆われているようだつた。

「・・・せつか。・・・そつだな。」

レムリアの言葉に、エリアドは低い声でそう応じた。

実際問題として言えば、彼女の言つたとおりであろうことは間違

いないだろう。

エリアード自身は、決してそれ以上の結果を望もうとも、また望みたいとも思つてはいなかつた。だが、そのよつなセリフが彼女の口から出るのを聞くのは悲しいことだとも思つた。

「・・・どこか行つてみたいといふはおありか？・・・と言つても、夕刻までには戻らねばならぬのだろうから、あまり遠出はできないが。」

エリアードは静かに告げると、レムリアの反応を待つた。

ヴーロンパトリー連合王国、王都ションドル、富殿、レムリアの居室  
「森と湖などは如何でしょ。とても綺麗な場所があるので  
すが……」

レムリアは遠慮するよひに微笑むと、躊躇<sup>ヒヤヒヤ</sup>に歩き出す。

「馬なれば少一時間とこゝでじゅうが。ここから、せまい遠  
くはあります。」

「ふむ……それはいい。では、わざとみみつ……。」

と、ヒリアドはまじめに話つて、はたと笑つべ。

「……すまない。あまり深く考えずに遠乗りに誘つてしまつたが、  
馬にはお乗りになれるか？ あまり乗り慣れないといふことであれ  
ば、私の馬に同乗していただきてもかまわないが……。」

注意深くレムリアの反応を観ながら、話を進めていく。

「……それとも、馬車を用意してもらつた方がよいだらうか？」

困つたような表情を浮かべ、ヒリアドはわざかに言ひ瀧んだ。

「……じつした経験がないものでな。……手際が悪くて申し訳  
ない。」

「心配しないで下せこませ。乗馬は得意ですので、馬で参りましょ

「お天氣も少しは好轉しそうですわ。わたくしは直ぐにでも支度が出来ますので、宜しければ空の氣きが変わらないうちに出かけましょうか？」

「……わかった。貴女あなたにお任せしよう。私の方は、とくに準備するところほどのものはない。」

「……まあ、馬の用意くらいか。」

至つて軽装備に見えるエリアドであるが、にも関わらず、いつでもすぐに旅に出られる程度のものは持ち歩いている。『いついかなる時であっても、常に最高の状態で戦いに臨めるよう』。『と様々な装備（いや、装備だけではないが）を整えてきたエリアドである。それが困難に満ちた戦いの中で生き残ってきた知恵でもあった。もつとも、自信を持つてそのように言えるようになったのは、それほど前のことではなかったが。』

「それでは、半刻後に館の前で待ち合わせましょ。」

レムリアは、侍女のアンヌに食器を下げてくれるよう頼むと。

「わたくしは失礼させて頂いて、着替えてまいります。では、のちほど。」

エリアドに一礼して、支度の為に隣室に消えた。

ヴェロンティイ連合王国／王都シンドル／宮殿／レムリアの居室

「……承知した。……では、のちほど館の前で。」

ニアードは、席を立つて隣室に引き上げるレムリアを見送ると、食器を下げに来た侍女にやつくりした口調で問い合わせた。

「……侍女殿。少し聞きたいことがあるのだが、よろしくか？」「はい、どのようなことですか？」

柔らかな返事とともに、薄い茶色の瞳が見返してくれる。レムリア付きの侍女アンヌは「一ランド出身だ。ションドルの様な北国暮らしでも褪めない小麦色の肌、肩口までの栗色の髪が“南国人”らしかった。

「……手数をかけてすまぬな。」

ニアードは侍女の顔をちらりと見ると、静かに言葉を続けた。

「……これでも、私はこの国の生まれではあるのだが、国を離れている間に少々長い“時間”<sup>時間が長い</sup>が過ぎてしまつたらしい。……ゆえに、正直今のこのことはよくわからぬのだ。あるいは、これからする私の問いは、答えづらい質問であるかもしれません。もしあなたが答えたくなければ、無理に答えずとも一向に構わない。」

真顔でそう言つと、そこで少しだけ間をとつて、見よつとよつては少々意地悪に見えるかもしれない薄い微笑を浮かべる。

「・・・が、その問い合わせする前に、一つ・・・いや、二つほど、聞かせてほしい。・・・あなたは、私のことをどの程度知っている？そして、あなたの目には、私はどのような人物に写っている？」

ヴェロンティア連合王国／王都シエンンドル／富殿／レムリアの居室

「……やうですわね……」

ちょっと困り顔で逡巡すること暫し。やがて、アンヌは意を決したように口を開いた。

「摩訶不思議な魔法の剣をお持ちの、謎めいた剣士……これが一般的にムーンシャドウ様に対しても流れている風評ですわ。それが正しいのか否かは、わたしの申し上げるべきことではないと思います。」

表情を和らげて笑みを浮かべると、スカートの裾をひょいと持ち上げてお辞儀をする。

「お気に障りましたなら、お詫び申し上げます。」

「……いや、気に障つてなどおらぬやえ、謝つてもりつ必要はない。」

「……だが、さきほどレムリア殿にもお願いしたのだが、すまないが私のことは“ヒリアド”と呼んでもらえまいか。……“ムーンシャドウ（月影）”の家名で呼ばれるべきは、この国のために戦い、そして、行方知れずになつた我が兄であるべきなのだ。」

アンヌの答へに、エリアドは静かな声でそう続けた。

「……それにしても、……摩訶不思議な魔法の剣を持った、謎めいた剣士……か。」

・・・それが本当なら、それはまた随分と好意的な評価だと言わねばなるまいな。」

唇の端に、再び薄い微笑が浮かぶ。

「・・・まあ、それはいい。では、”一般的に流れている風評”では、レムリア殿はどのように言われているのか、教えてもらつてもかまわないかな？」

アンヌの表情を見ながら、エリシアはそのように続けた。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンンドル／宮殿／レムリアの居室

「はい……」

アンヌはまた困った表情を浮かべると。

「差し出がましいようで申し訳ありませんが、これはレムリア様に直接お尋ねすべき事柄かと思います。わたしはレムリア様を良く存じ上げておりますが、エリアド様とは今朝初めてお会いしたばかりです。ご理解頂ければ幸いです。」

その侍女の答えに、エリアドは三度薄く笑つた。  
みたび

「……いや、私が知りたいと思ったのは、レムリア殿が『自分が周囲からどのように思われているだろ』と考えているかではなく、『一般に流れている風評』とやらでは『レムリア殿がどのように言われているか』であり、また周囲の者が『レムリア殿をどのように思っているか』なのだ。それは、本人に聞いてもわからぬことだよ。」

「

エリアドとしては珍しく、自分のした問いの意図を相手に説明した。

それはすなわち、エリアド自身がその相手のことをある程度信用できる人物だわ』と考えたことを意味している。

「……が、さすがに答えづらかったらしいな。まあ、無理もないが。いや、困らせるような質問をして悪かった……。

・・・私はまだ、その“一般的に流れている風評”とやらを直接耳にしたことはないが、昨夜の宴<sup>うたげ</sup>での周囲の様子を見ていれば、それがどのようなものか、ある程度は想像できる。そして、今のあなたの答えで、あなたがそうした風評とは少々異なった意見を持つているらしい、ということもわかった。

まあ、今のところは、それで満足するとしよう。

もう一度薄い笑みを浮かべると、エリアドは立ち上がりて扉に向かつた。

「・・・ああ、最後にもう一つだけ。侍女殿、あなたの名前を聞いてもよろしいか？」

何時も拙作をお読み頂き、有り難うござります。「魔性」も本編で五十編となりましたが、これもご訪問頂いている皆様のお陰です。毎日の更新が何処まで続けられるかは判りませんが、今後も頑張つていただきたいと思います。宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都シエンドル／宮殿／レムリアの居室

「あつ・・・」

口元を抑えたアンヌの表情がみるみる紅潮する。

「わたしの勘違い故に、大変失礼を申し上げました。平にご容赦をお願い申し上げます。」

スカートの端を摘むと、アンヌは深々と頭を垂れた。

「申し遅れました。わたしはアンヌと申します。レムリア様付きの侍女でございます。レムリア様とは、レムリア様がこの都にお見えになられてから、ずっとお仕えしております。」

顔を伏せたまま、言葉を続ける。

軀が小刻みに震えているのは、自分の失言の大きさに恐れ戦いでいる為か・・・。

「レムリア様に対する風評についてはご勘弁をお願い致します。でも・・・わたしはレムリア様をとても好ましく思つております。わたしや、他の使用人にも大変丁寧に、親切に接して頂いております。

とても・・・とても良い主人です。」

アンヌの必死の言葉に、エリアドはゆっくりと頷いた。

「どうせひ、そのみうだね。こうこうと参考になつたよ。・・・あ  
りがとい。」

その表情に笑みを浮かべたまま、ヒロアドはアンヌの言葉に軽く  
相槌を打つた。

「では、レムリア殿に『馬を連れて、館の前で待つてこる。』と云  
えてくれ。」

そう言つと、ヒロアドはゆっくりと扉を開け、廊下に出た。  
扉が再び静かに閉まるまで、アンヌは深く頭を垂れたままだった。

ヴヒロンティ連合王国／王都シエンダル／宮殿／レムリアの寝室  
厩 正面玄関

自分の寝室に戻ったレムリアは、ワードローブを開けて乗馬服を手に取った。白いブラウスの上に赤いベスト、脚にはペニッタリフィットする乗馬ズボン。それに、非常に軽い黒のブーツを履く。目立たないよじにと、灰色のフード付きマントを羽織れば、準備は完了だ。

姿見の鏡の前で自分の装いを確認する。

問題・・・は無くはない。

フウッとため息をつくと、レムリアはひょっと眉を上げて独りごちる。

「何を着ても、似合わない・・・」

痩せすぎ、そして雰囲気が堅すぎ。それが、レムリア自身が下した評価だった。

アンヌなどに言わせると、『「とんでもない！ レムリア様は何をお召しになつても、とっても似合つんです！」となるのだが、自分に自信がないレムリアには、アンヌの評価はとんと理解できないものだった。

「・・・乗馬するのだから、似合おうが似合つまいが、やじたる問題ではないわ。」

逡巡する心を割り切つて決めると、レムリアは手早く乗馬服を身

に付けると厩に向かった。

自分の馬、“風の囁き”には何時も自分で鞍を付けている。これは、この都に来て、“風の囁き”と巡り会つたときから続いていることわざだ。

「エリヤド様の馬は・・・そうね、“月光”にしましょ」

レムリアが“風の囁き”に鞍を付けている間、厩の侍従が“月光”的鞍を置いた。

一頭の馬を伴って、レムリアが玄関に回つてみると、まだエリヤドは来ていなかった。

「・・・」

鳥の声に誘われて天を仰ぐと、雲間の切れ目から何処までも蒼い空が見え隠れしていた。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／宮殿／レムリアの居室  
正面玄関

館の玄関へと向かう廊下の途中。ヒリアドはふと立ち止まり、窓の外に広がる空を見た。北国特有のどんよりした曇り空の切れ間から、ところどころ青い空が顔を覗かせている。

“……私は、いったいここで何をしているのだろう……”

ヒリアドは思った。

“……けして、この国に長くどざまつもつはなかつた。ふとしきさつから、奈落の淵に囚われているのを助け出すことになつたアーサー・フリヨンティという人物をこの国に送り届けたら、私はすぐにも旅立つつもりでいたはずだ。

……にも関わらず、その戴冠式を見届けた今も、私はなぜかこうしてこの国にいる……”

“アーサー・フリヨンティという人物の人と為りに惹かれて、といふわけではないのは確かなことだ。むろん、かの御仁のまとうオーラにも似た強烈なカリスマに、何も感じるものがなかつたわけではないが、どちらかというと人嫌いの氣のある私は、それほど彼と親しく話したことがあるわけではなかつたし、何よりかの御仁は、私には眩し過ぎた。

そうしたわけもあって、それが実際に受け入れられるかどうかはまた別の問題として、私はかの御仁に剣を捧げてはいなかつたし、また捧げるつもりも持つてはいなかつた”

“・・・ならば、なぜ私は止まっているのだか？・・・”

しばし空を見上げ、ヒリアードは小さくため息をついた。

“・・・考へても、わからぬものはわからぬ・・・か”

ヒリアードは氣を取り直すと、館の玄関へと向かつた。

ヴェロンティ連合王国／王都シェンドル／宮殿／レムリアの居室  
正面玄関

女性の着替えといつものには、それなりに時間が掛かるものが普通だが、エリアドが玄関につくと、レムリアはすでに支度を終えて待っていた。

「……これは失礼致した。女性の着替えといつものには時間がかかるのだろうという先入観にとらわれて、少しのんびりし過ぎたようだ。お待たせして申し訳ない。……妙な先入観にとらわれぬよう、気をつけねばならぬな。」

「お気になさらずに。不調法ゆえ、支度も早いのでしょうか？」

穏やかな表情で、レムリアはさりとて言った。

「……少なくとも私には、貴女あなたが不調法であるとは感じられないな。……まあ、たしかに、この王宮にいる他の御婦人方と比べれば、いろいろと違うところはあるのだろうが、そうした点に関して言えば、私にはむしろ貴女あなたのような女性ひとの方が好ましく思える。……まあ、それは単に、私の好みの問題なのかもしれないが。」

エリアドは薄く微笑わざわざつて言った。

レムリアはちょっと小首を傾げながらも、口元に小さな笑みを浮かべて聞く。それ以上、装いの事には触れず、連れてきた二頭の馬をエリアドに指示示した。

「……良い馬のようだ。お貸し戴けるとは添かたじけない。……遠乗りに

戦馬を連れ出すのも無粋に思えて、正直びくびくべきか迷っていた。  
お気遣いに感謝する。

・・・彼ら（馬）の名前を教えてもらつてもよろしくいか？..

「この馬は、”月光”と申します。Hリアド様によく会つた前だと  
思い、選びました。お気に召されましたか。」

「ふむ・・・・。”月光”か。良い名だ。・・・今日は、よろしく頬  
むよ。」

Hリアドはレムリアから手綱を受け取ると、スッと手を伸ばして、  
たてがみを静かに撫でる。

「よろしければ、貴女の馬も紹介してもらえぬか。」

ヴェロンティ連合王国／王都シエンダル／富殿／正面玄関

レムリアは自分の馬の脇腹をそっと撫でると言った。

「“風の囁き”（WIND WHISPER）が名前です。その名の通り、音もなく、風のように走ります。・・・国王陛下から、賜りました。」

その口調は、嘆息をするかのようだった。

想いを吐露仕掛けた自分の弱い心を叱咤すると、気を取り直すよう笑顔を浮かべた。

「ふむ。・・・“風の囁き”（WIND WHISPER）か。似合この名かもしだぬな。・・・君もようじく頼むよ。」

ヒリアドは呟くよつて言つて、一頭の馬の鼻面をそっと撫でる。そして、彼女が“風の囁き”に乗るのに手を貸しながら、つづけた。

「・・・このあたりの道はあまり詳しいないので、案内をよろしくお願ひする。」

ヒリアドは彼女に續いて“月光”に乗ると、彼女の横に馬を並べた。

「行きましょ。」

想いを断ち切るかのよつに言つと、レムリアは“風の囁き”の促してゆつくりと進み始めた。

その胸中には、まだ先ほどのエリアドの言葉が渦巻いていた。

『私はむしろ貴女のような女性の方が好ましく思える』

“そんなこと……”

自分が他人に魅力的に映るなど、レムリアには信じられない事だつた。これまで、“魔性の瞳”と忌み嫌われ、近づいてきた者も自分の地位に興味が有つた

“でも……”

でも もしかすると、今までとは違うかも知れない。

仄かな希望を胸に、レムリアはエリアドを伴い、富殿を後にした。

ヴォロントイ連合王国／王都シエンドル／宮殿／正面玄関 王家の森

レムリアはエリードを先導して王宮の馬車門に向かつた。門を警護する兵士達の几帳面な敬礼に会釈を返すと王宮の外に出る。

羽織つた灰色のフード付きのマントのフードを田深に被り直すと、小さく苦笑しながらエリードに言ひ。

「余計な詮索をされるのは、エリード様もお嫌でしようから。」

巧みな手綱さばきで“風の囁き”をギャロップで走らせる。人通りの少ない道筋を選んでいるのだろう。誰にも会わずに、城壁に設けられた小さな門までやつてきた。

レムリアが右手の指にはめた指輪を翳すと、音もなく門が開いた。

「王族だけが使う、特別な門なのです。」

短く説明すると、門を抜け、馬首を遠くに見える森に向けた。黙したまま、暫しの間馬を走らせていると、やがてその森に辿り着いた。大きな広葉樹が多い、明るい森だ。

「“王家の森”です。奥に、狩猟の館もあります。今日は、寄りませんけれども・・・」

森の中は、馬でも通れる様に道がきちんと整備されていた。並足

でその道を奥へ奥へと辿つて行くと、不意に視界が開け、比較的大きな湖が目の前に現れた。こちらの岸は所々砂地の浜があるが、対岸は小高い丘陵が断崖となつて湖に落ち込んでいた。

レムリアは馬首を右に向けると、暫くその湖の湖岸にそつて馬を進めた。更に半時ほど進んだ後、レムリアは小さな浜がある場所で馬を止めた。森がこの浜の周りを取り巻いており、外界からは隔絶された感がある静かな所だ。

「リリが・・・とても好きなのです。」

静寂の中、レムリアの声だけが伝わってくる。湖を見つめる横顔には、穏やかな笑みが浮かんでいる。

今回は、Hリニアードの視点からの描画です。

ヴェロンティ連合王国／王家の森

私は、<sup>レムリア</sup>彼女に案内されるままに馬を走らせる。

どうやら彼女は、私が考えていた以上に、馬に乗りなれているよう見えた。

“・・・彼女には驚かされてばかりだな。”

危なげない手綱捌きで愛馬を走らせる彼女を見ながら、そんなことを思つ。

王庭を出ると田立たぬよう田深にフードを被り直した彼女とは対照的に、私は素顔を晒したまま馬を進めた。“素性を隠すのは性にあわない”というせいもあつたが、そもそも隠そうとしたところで隠し切れるものではないし、そうした私に対し、まともに視線を合わせようとする者はほとんどいない。むしろ、かえつてその方が細かく観察されないということを、私は経験的に知つていた。

街を出て森に向かつ。王家の森だと彼女は説明する。

美しい森だつた。放置された素のままの森ではありえない。何者かの手が加わつていることは間違いない。あるいは、何か特別な場所なのであらうか。

「ほつ・・・」

田の前に現われた湖の景色に感嘆の呟きが漏れる。

やがて、彼女はその湖畔の一隅にある小さな浜で馬を止めた。  
そこは彼女の好きな場所なのだという。

「ふむ・・・落ち着けそうな、いい場所だ。」

“月光”から降りて、あたりを見廻す。

「・・・それとも、何か理由でも？」

“人が何かを好きになるのに、必ずしも特別な理由があるとは限らない”ということは、最近なんとなく、わかるようになつてきてはいたのだが。

ヴェロンティイ連合王国／王家の森

ヒリアードの言葉を聞き、レムリアは軽く笑った。

「好きになるのに、理由は必要でしょうか。」

そのまま、座った膝の上に頭を載せると、レムリアは視線を遠くへ振った。

折からの涼風が、さやさやと浜辺の草を揺らしている。

完全な静寂とでも言ひのだらうか。聴力が麻痺したのではない  
か、とも思えるよつた静けさ。そんな中で、身動きもせずにレムリ  
アは黙していた。微かにその背が上下していなければ、呼吸をして  
いるとも思えなかつただろう。

「……先ほど、わたくしの行動は不調法、と申し上げました。」

やがて、そつと囁く様に静寂を破る。

「その理由と、そして、何故この場所が好きなのか　それを、教  
えて差し上げましようか・・・」

その口調には、何処か危うげな響きが含まれていた。

レムリアは静かに立ち上がると、さらりとマントを取り去った。  
マントの下には、華奢な躯にぴったりとフィットする乗馬服を身に  
ついている。その紅い上衣に手を掛けると、一つ一つボタンを外し  
ていく。

ぱわっと顔を立てて、乗馬服の上衣がマントの上に重ねられた。

「・・・」

ゆつくりと振り返ると、レムリアは黙つてヒリアードを見つめた。その表情には不可思議な笑みが浮かび、その奈落の様に黒い深い瞳には、名状しがたい輝きが浮かんでいた。

静寂に包まれた森の湖畔。私は、まるでそのまま景色の中に溶け込んでしまった。彼女レムリアの後ろ姿をじっと見つめていた。

やがて、彼女はどこか危うげな響きの混じった言葉をさやかながら静かに立ち上がり、さらりとマントを取り去る。続けて、乗馬服のベストに手がかかり、まもなくそれは地面に落ちたマントの上に重ねられた。

彼女がゆつくり振り返り、漆黒の瞳がじつとこちらを見つめる。

「・・・レムリア殿。もし私のことをからかつて居るつもりなら、そのくらいにしてはもらえないか。

・・・こう見ても、私とて男なのだ。妙齢の女性に、田の前で

そのような行動を取られれば、多少は心が動く。」

私は、彼女の顔に浮かぶ不可思議な笑みと黒き瞳に浮かんだ名状しがたき輝きとをじつと見つめ返しながら、しかし、語る言葉の内容とは裏腹に、そして心を動かされたといつ風でもなく、そのように応じた。

## 魔性の瞳・59 「誘惑」

ヴェロンティア連合王国／王家の森（湖畔）

ヒリアードの言葉に、レムリアはくすりと小さな笑みを漏らした。

「年端もいかぬ、小娘が行動です。“魔剣士”と呼ばれるエリアード様ほどの方が、動じるべくもない、と思つておりますけれども・・・」

淀みなく言葉を紡ぎながらも、細い指がブラウスのボタンを解きゆくのは止まらない。

「・・・けれども。見るに堪えないから止め、と仰るのでしたら・・・」

レムリアは今まで言わずに言葉を濁した。

ヒリアードを直視してくるその黒い双眸は、止めましょうか？ と挑戦的に告げているかのようだった。

「・・・いや。『みつともないから』などと云う、つまらぬ理由で止めるつもりはないがね。  
だが、もし私のことを試しているだけなら、それは無用に願いたい。」

レムリア  
彼女の言葉に私は真顔でそう応じた。

「もし貴女あなたに、一人の男として本氣で誘つていただけるのなら、それはそれで光栄なことだが、これでも貴女あなたがその気かどうかくらいは見わけられるつもりでいるのだ。

まあ、私が言ったのとは別の意味で、貴女あなたは本氣なのかもしれないが・・・ね。

だから、もし貴女あなたがそうする必要があると思うのであれば、そのまま続けてくれてかまわぬよ。

貴女あなたの御期待に添えるかどうかはわからぬが。」

レムリアの意外な行動に、エリアドは・・・

ヴェロンディー連合王国／王家の森（湖畔）

「試すなどと、そんな不遜なことをする女だと思いません？」

ふふふ、と薄く笑つて、レムリアは意外に心外ですわと抗議する。その間も、ブラウスのボタンを外す手を止める事はない。

「わたくしが、なぜこゝを好きか……それをお見せしようと思つてゐるだけですわ。」

パサつと乾いた音がした。蠱惑的な笑みを浮かべたままブラウスを他の衣類の山に加えると、器用にブーツをも脱ぎ捨てる。その後を、乗馬ズボンが追い掛けた。最後の薄物を取り去ると、透き通るようないきの素肌を外気に晒すのも一瞬。すぐに、湖に飛び込む水音が息が詰まるような緊張を破つた。

「あ・・・」

止める間もなく、<sup>レムリア</sup>彼女は湖に飛び込んだ。

いくら昼間で陽が差しているとはいえ、ヴェロンディーは北国であり、しかも季節は冬である。さぞや湖水は冷たからうと思うのだが、湖を泳ぐ彼女の様子からそんな様子は感じられない。

そして、私は気づく。森に入ったあたりから感じていた違和感の正体……よくよく考えてみれば、このあたりの森の木々や草木の様子も、あまり北国の冬の森の雰囲気ではないといふことに。

「・・・寒くはないのか？」

私はそう言いながら水際まで近寄り、湖水に手を触れてみる。湖水はさして冷たいと言つものではなく、どちらかと言えば肌に心地よい水温だった。

何時もお読み頂き、有り難うござります。「魔性」も本編で六十話となりましたが、全体の進捗度はまだ半分も行っておりません。なかなかペースが上がりませんが、今後とも頑張って更新を続けますので、宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

透き通る様な湖水の水は、気持ちの良い冷たさで肌に心地よかつた。

どの季節でも、こここの水温は一定で変わらない。それは、この湖水と周囲を取り巻く森が、古からの魔法で守られているからであった。

レムリアは抜き手を切つて湖岸から大分先まで泳いでいくと、振り返つて岸に残したエリアドに呼びかけた。

「エリアドさま！ あなたもいらっしゃいませんか！」

莫迦なことを自分の行動をそつ思つこともある。

傍目で見れば、未婚の女性、それも高貴の出である自分が、初見の相手に肌を晒すなど、正気の沙汰ではなかつた。相手は、さぞかし呆れていことだらう。

レムリアのこのよだな突飛な行動はしかし、今に始まつた事ではなかつた。彼女は、しばしば世間の常識では計り知れない行動を取る。超然と構えていよに見えるその態度も、“魔性の瞳”といふ得体の知れない力も、レムリアを一層人々から遠ざける方向に働いた。

“理解されないものは仕方がない”

レムリアも、この頃はそう思つ様に自分を律してきた。

理解こそされないが、それが結果として人々の為になるのであれば、自分の行動には意味がある、と。

世間から、人々から弾き出されてしまつた娘が、その哀しい経験から止む無く覚えた心の自衛手段だった。そうでなければ、人々のくちさがない誹謗中傷にレムリアの纖細な心はどうに壊れてしまつていただろう。

ヴヒロンハイ連合王国／王家の森（湖）

「ヒロアダさま… あなたもいらっしゃいませんか…」

そう言つと、彼女は私に向かつて手を振つた。

既に湖水の半ば位まで達しているが、かなり手慣れた泳ぎだつた。

「… もち、じつしたものか。」

私は湖を泳ぐ彼女の姿を眺めながら、しばし考える。

湖水は思つたほど冷たくなかった。いや、むしろ冬場にしては、不自然に暖かく感じられるほどだ。

私自身けして泳ぐことが嫌いなわけではないが、さすがに彼女のよつな若い女性の前で裸になることに、躊躇いがないといえば嘘になる。

“…まあ、服の替えはあるのだから濡れてしまつてもかまわぬか”

私は口の中で小さく呟くと、

「…せいかくのお誘いだ。おつきあいさせていただくとしよう。」

彼女の言葉にせつ感じ、背中のクローケと腰のポーチを外す。それからブーツと上着を脱いで脇に置き、上半身だけは裸になると湖に飛び込んだ。さすがに、ズボンは穿いたままである。

先にいる彼女を追つて、普通に話しても声が届くあたりまで一気に泳ぐと、そのあたりで空を見上げるように仰向けに浮かぶ。

「最初から泳ぐつもりなら、言ってくれれば用意してきたんだが……。  
ね。

……だが、まあ、たまにはこういう趣向も悪くない……。

私は冬場に珍しく晴れ渡った蒼い空を見上げながら、そんなことを呟いた。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

岸辺で水飛沫が立つのを見たレムリアの表情には、悪戯っ子のよ  
うな笑みが浮かんでいた。

“泳ぎは、達者なようね”

エリードは、手慣れた感じで泳いでくる。  
それは、かなりのスピードだ。  
程なく、自分のところまでくると、仰向けに浮かんだ。

「気持ちが良いでしょ？」「

そう話し掛けるレムリアの表情には自然な笑みが浮かんでいた。  
こんなに気持ちが良いのに、顰めつ面などいしていられない。  
そもそも、レムリアは泳ぐのがとても好きだった。軀が水に浮く  
感覚まるで重さが無くなつたように感じる浮遊感がたまらない  
と感じていた。

「泳ぐのが、とても好きなのです。泳いでいると、現世のしがらみ  
が洗い流されるよつだから。」

言葉になると陳腐に聞こえるのね そう思つと、レムリアの笑  
みが深くなつた。

一々言い訳をしなくてもいいのに、そんな説明口調の自分が可笑  
しかつた。

「エリードさまも、泳ぐことに慣れてらっしゃいますのね。失礼に聞こえるかもしませんが、少し意外に思いました。」

「とても失礼な話ですわね、と屈託無く笑う。その自然な笑顔は、レムリアがいつも身に纏っている“堅さ”を和らげて見せていた。本来は、このような笑顔がとてもよく似合つ娘なのだろう。思えば、堅い鎧を纏い、作られたような笑みを浮かべねばならない現状こそが正常ではないのだ。」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

私は思わず彼女のレムリア唇託のない笑みにつられるように笑みを返す。普段よく浮かべる幾分冷やかな笑みでも、唇の端を歪めるような薄い笑いでもない。あるいは、それは何年かぶりの“心からの笑み”であつたのかもしれない。

「・・・種明かしをしようか。」

そんなことを言つと、軽く握っていた左手を開いてみせる。そこには、銀の鎖に繋がる小さな台座の上で仄かな輝きを発する一粒の真珠。

「“サイレンの真珠”（pearl of the sirenes）”と呼ばれるものだ。これの宿した魔力のお陰で、私は水中でも息をすることができるし、人並み以上に泳ぐこともできる。  
・・・まあ、なくとも人並み程度には泳げるつもりだが・・・。  
けれど、正直に言つて、あるとなしとでは大違いだろうな。  
それに・・・」

いたずらっぽい笑みを浮かべてスッヒレムリアの傍らに近づくと、彼女の手を引いていきなり水中にもぐる。

そう、手の届く程度の範囲であれば“真珠”の魔力は周囲にも及ぶ。

「・・・気分はどうかな？ なかなかこんな深いところを自由に泳ぐ機会はなかつただろう？」

“こんな表情も、出来るのね”

軽い驚きを感じる。ヒリアード「の第一印象から考へると、想いも寄らぬ事だった。

「するいわ。」

だから　思いもよらぬことながら、自然な感想が口をついてでてしまつ。

相手に顰めつ面をしてみせると、手を振り解いて身を翻す。

「浜に向かつて、競争つ！」

一聲掛けると、抜く手を切つて泳ぎ出す。スピードには自信がある。例え魔導具を使われても　負けはしない。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

魔導具（M a g i c I t e m）である“サイレンの真珠”（P e a r l o f S i r e n）の魔力は、けして小さくない。水中で、まさに“人魚の如く”行動できる力（通常人の四倍以上）を与えてくれるのだから。

とはいえ、“競争”と言われて魔導具の力を借りなくてはならぬいほど、魔導具に頼り切りになつてているつもりは毛頭ない。彼女に追いつけるかどうかはやつてみなくてはわかるまいが、彼女とは対等なつきあいでいたかつた。

そう思わせる“何か”が彼女にはあつた。

それに、このような時まで魔導具の力を頼つているようでは、“阿修羅”や“炎の鎧”を使いこなすなど、夢のまた夢。

だから　。握っていた“魔法の真珠”から手を離す。

鎖がつながつていてるから落としはしない（そのための鎖である）が、肌に直接触れていなければ“魔法の真珠”的魔力は働かない。魔力に頼らず、彼女を追つて泳ぎ出す。

それは、小さな頃、兄と近くの川で競争した時のことだった。二歳年上の兄には、一度として競泳で勝てたことはなかつた。だが、あまり身体が丈夫ではなかつたあの頃とは違う。家を出て、国を出てからも、剣も、身体も、そして、心も、鍛錬を怠つたつもりはない。

だから　。負けはしない。そう信じて彼女を追いかけた。思い切つて、息継ぎを減らして増速を試みる。

もう少し・・・もう少しで、手が届く・・・。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

白い裸身が、蒼い水の中を泳ぎ抜ける。早い だが、後を追つてくる影も、勝るとも劣らぬ早さだった。追つ者と追われる者。勝負は余談を許さぬものとなつていた。

“息継ぎを・・・”

止めれば、無論早くなる。だが、息継ぎ無しでは長くは持たない。どこで最後のスパートをかけるか それが思案どころだった。

“レムリア”

出来る限り大きく息を吸うと、レムリアは浜への最後の距離に全力を上げる。あと30フィート。あと20フィート。あと10フィート。

サバアッヒ水音をたてながら、レムリアは浜辺に倒れ込んだ。ハアハアと荒い息を繰り返すと、酸欠気味の軀に必要な空気を送り込む。

「・・・最初の・・・スタートダッシュに…助けられました」

ぐつたつと砂の上に俯せになる。今は指一本動かせない。

「早い・・・ですね・・・」

久し振りの充実感が、自然な笑みを呼ぶ。その屈託無い笑顔は、レムリアをして実年齢よりも二三歳若く見せていた。

「・・・君も、な・・・」

呼吸を整えながら、ようやくそれだけ口にする。  
仰向けにひっくり返つて、もう一度蒼い空を見上げる。

「・・・こんな気持ちになつたのは、ずいぶん久しぶりのよつな気がする・・・。」

まだ・・・、こんな気持ちになることができたんだな。私は・・・

「

傍らのレムリアの顔をじっと見る。

・・・きれいだな。と素直に思つ。

たぶん、この時からなのだろう。私の気持ちの中に“何か”的変化があきたのは・・・。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「・・・呆れられたでしょう」

さり気なく口にした言葉 胸の動悸を鎮める様に、レムリアはゆっくりと話した。

「良くも知らぬ殿方に肌を晒すなど とつて理解されるような行為ではありません」

現世<sup>うつせ</sup>では、と心の中で付け加える。

「“不調法”の冠名に、 “不作法”と不羨”を加えてしまいました。ますます、世間様から後ろ指を指されてしまいいますわね」

でも、特に気にも病んでおりません そう続けたレムリアの表情にはしかし、何処か悲しさと諦めの色が薄く浮かんでいた。

「不羨ついでに、お尋ねしても宜しいでしょうか」

一転して明るい口調に変えると、相手の肯定を待つて先を続ける。

「ヒリアドさまには、想い人か想われ人がいらっしゃいますか

「・・・まあ、呆れたとは言わぬが、驚かされたのは確かだな。

だが・・・貴女のお陰で、久しく忘れていた昔の自分を想い出すことができた。」

レムリア　彼女の言葉に、小さく苦笑しながらそう返す。

「・・・それに。旧き慣習と常識とに、盲目的に囚われているこの  
エロソディー國の変革を、さほど意識することなく陛下に期待していた私自身が、  
同じモノに囚われかねない危うさを再認識することもできた・・・」

少しだけ考えてこう続ける。

「・・・世間のことなど気になさるな。貴女は貴女のままでよい・・・  
いや・・・貴女は貴女のままの方がよい。・・・と、私は思つ。

」

私は真顔でそう続けた。

『想い人か想われ人がいらっしゃいますか』

その問いは唐突だった。彼女に“不意打ち”を食らうのは、何も  
これが初めてではない。にもかかわらず、その“不意打ち”を予想  
できない自分がそこにいる。私にとつて、それはとても新鮮な感覚  
だった。

「・・・“想い人”か。」

“想い”を寄せた女性・・・過去に、一人だけそういう女性は  
いた。しかし、それは“夢”の中のできことであり、そして、彼女  
は“現身”を持つ人間の女性ではなかった。

視線を逸らして再び空を見上げる。

「……誰かに想いを告げたり、告げられたりしたことはないな……。  
だが……。想いを抱いたことはある……。もづ、ずっと……。  
ずっと昔のことだ……。」

私は視線を彼女に戻してこいつ続ける。

「……とても不可思議な経験だつた。……今まで、誰にもこの話したことはない。とても、他人に信じてもらえるとは思えなかつたからだ……。だが……、もしよければ、聞いてもらえないか？」

ヴェロンティア連合王国／王家の森（湖）

「はい。わたくしがお聞きしても差し支えないのですれば……」

お聞かせ下さい」と静かな声で続ける。心の動搖を押し隠し、冷静に、平静にと自分に言い聞かせる。

“何も動搖することはないのよ。だって……何も失つものなど無いのだから。おかしな感情を、自分で弄ぶのは止めないと”

「うせ全ては夢だと想えば、何を恐れることがあるつか。薄く笑みを浮かべると、レムリアは砂浜に組んだ両手に頭を載せた。

「ヒツアヅヤも……。どうかお話を聞こませ」

「……それは、とても奇妙な体験だった。……ヴェルボボンクの街からさほど離れていない、街道筋の小さな宿で一夜を過ごした時のこじだ……」

私は、遠い記憶をたぐり寄せながら、静かに語り始める。

今まで誰にも話したことのない話だった。旅の途中に遭遇した、とても不可思議な、一夜のできごと……。

夜中、私は誰かが自分を呼ぶ声を聞いたような気がして、ふと田

を覚ました。その声に応えると、目の前に光り輝く扉が現われ、私は吸い込まれるようにその扉を越え、何処とも知れぬ場所に辿り着いた。

その地で、同じように扉を越えてきた数人の者たちと出会い、それぞれに自分たちのパートナーとなつた女性たちとともに、彼女たちを助けるべく、魔物に挑んだ。

・・・まあ、言つてしまえば、ただそれだけのことだ。

「・・・そして、すべてが終わつた時、私は自分が宿屋のベッドの上におり、すべては“夢”だつたらしくといつゝことに気がついた・・・といつ訳を」

その経験をともにしたはずの知り合いの大半は、そのことを覚えてさえいなかつた。また、からうじて覚えていた者も、それは單なる“夢”に過ぎないと思つていていたようだ。

だが・・・私は、それが单なる“夢”だとは思わなかつた。なぜなら、田覚めた時、別れ際に彼女から手渡された宝石が、私の手の中にはつたからだ。

私はそのすべてを彼女に語る。

「・・・これが、その宝石だ」

私は宝石の嵌まつた銀の首飾りを外して、彼女に差し出す。仄かに青みがかつた光の揺れる、なかば透き通つた白い宝石。

「・・・ムーンストーン（月長石）。・・・“静寂”を司る宝石などと聞いた。・・・国によつては“旅の石”とか“予言石”などと言われることがあるらしい」

私は静かに続ける。

「・・・これが、あの記憶が単なる“夢”でない唯一の証<sup>あかし</sup>といふことになる。・・・だが、その後、“夢”の中でさえ、一度たりとて、彼女に会えたことはない。・・・あるいは、それゆえに“心残り”になつてゐるのかもしれないが」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「哀しくとも 素敵な、思い出ですね・・・」

奇妙な感じだつた。何か、心の隅に引っかかつてゐる、そんな感じ。何を拘るというのだろうか？ レムリアは、自分でも自分の反応を意外に思った。

「あの、不躾にお尋ねするようですがれども その方と、再び巡り会いたいと、思われますか？」

「何で、こんな事を聞くのだろうか・・・」

心の中では、結論の出ない“問い合わせ”が渦巻いていた。判らなければ、黙ればよい しかし、そんな考えを何処かで拒否している自分がいた。

“ 何で・・・なのかなしら・・・”

それが判れば、苦悩することもない。

漠然とした不安を心に抱いたまま レムリアは相手の答えを待つた。

「・・・それは、難しい質問だな。」

私は彼女の問いに少し考え込む。

レムリア

「……私の中に、『彼女に会いたい』という“想い”がまったくないと言えば、それはたぶん“嘘”になるだろう。……だが、今となつては、私の中に必ずしも彼女に会つて、『これだけは伝えたい』というような特別な“想い”が残つてゐるわけではないといふことも、また事実だと言わざるを得まいな……。

しかし、それでも私は、たぶん今でも彼女には『幸せになつてほしい』と思っている。……あるいは、私は彼女が幸せになつたところを、自分の目で確かめることができないままになつてしまつたのが“心残り”なかもしれぬが、な……。」

「……とはいへ、まだ旅に出て間もなかつた“あの頃”ならいざ知らず、今の私には、『どうしてもせねばならぬ』と信じることがあり、そして、『是が非でも辿りつきたい』場所もある……。

たとえ……、彼女に再会できたとしても、今の私には、女のもとにとどまるとはできまいし、彼女が私と一緒に来たとしても、幸せになれるとは思えない……。ゆえに……、私は彼女と一緒にいられない……。いや……、彼女は私と一緒にいるべきではない……。

「……わつと思つてこる。」

ふと、いつになく饒舌になつてゐる自分に氣づいて苦笑する。

「……なぜだらう。……君に聞かれると、ずっと長ここと誰にも言えぬまま、心の奥底にしまつてあつたはずの“想い”を、いつも素直に口にすることができる……。」

なかば無意識のうち、そんな“想い”までが口に出る。

「あ……いや……、退屈な話でなかつたのなら、いいのだが……。



ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

「過度などと・・・そんな風には、思ってはおりません」

少し慌てた口調　それは、普段から冷静なレムリアにしては珍しい反応だった。

実際のところ、慎重に言葉を選びながら、精一杯自分の“想い”を吐露するエリアドの話に、レムリアは思わず聞き惚れていたのだが　そんなことなど、口が裂けても認めるわけにはいかない。自分の想いを押し隠すように、レムリアは少し素っ気なく、エリアドの話を打ち切った。

「お話し下さって、ありがとうございました。不躾ふしつけにも、お話しをせがんでしまったようですね」

失礼しました　と、小さく頭を下げる。

「でも・・・さぞかし素敵な方だったのでしょうか。エリアドさまが、自ら譲つて差し上げたくなるような・・・」

語尾が小さくなり、仕舞いには消えていた。  
湖をじっと見つめながら、レムリアは微かな嘆息を漏らした。

“この人も、本当は“光の道”を歩いて行かれる方なのね・・・”

例え、魔剣“阿修羅”を帯びる運命に有るとしても　所詮、暗闇を歩き続ける自分とは違うのだ　そう思えてしまう自分が哀し

かつた。

「冷えてきましたね」

立ち上がりつて乗馬服を取ると、手早く身につけていく。最後に灰色のフードマントを纏つた。フード深く被ると、少女なのか、小柄な少年なのか、見分けが付かなくなる。

「城へ・・・帰りましょうか・・・」

それは、恰も長い溜息を付くかのようだった。  
どこか、物言いたげに相手を見ていることを、レムリア自身も気がついていなかつた。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「……いや。たぶん、私はずっと誰かに聞いてほしいと思つていたのだろう。……だが、話せる相手がいなかつた。……貴女になら、理解して（わかつて）もらえるのではないかと、……そう思えた。」

レムリア  
彼女の言葉に、私は言つ。

「……すまない。私は、また貴女に、一人善がりの勝手な“想い”を押し付けようとしていたのかもしぬな……。」

彼女の小さな嘆息に、私はこつ続ける。

「……美しい想い出はより美しく、そして、苦い想い出はより苦くなるものさ……。もう、ずっと昔のことだ。……正直に言つが、私はもう彼女の名前さえ覚えていない……。もし本当に会えたとしても、わかるかどうか……。」

小さく自分を嘲笑して、服を着る。

「……たとえ、誰一人に理解され得ず、この世界でたつた一人になるとしても……。私は、それをせねばならぬ。そして、その先にある場所に辿りついてみせる。……ずっと、そんな風に思つてきた……。だが……。」

“……もし、ともに歩いてくれる人がいてくれたら……。”  
パートナ

私はじつと彼女の横顔を見つめる。

それは、彼女と知り合つまでは、一度として抱いたことのない“想い”であった。

だが・・・、それが相手のことを考えぬ、一人善がりの愚かな“想い”に過ぎないこともわかつていた・・・。

ゆえに・・・。私にはそれを口にすることはできなかつた・・・。

ヴォロントレイ連合王国／王家の森（湖）

「・・・思い出ですか・・・」

レムリアはせつと溜息を付いた。

思い出を糧に、田指すものに向かつて着実に歩いてゆく  
な経験が皆無な自分には、出来ないことだった。

“思い出なんて・・・心に痛いだけ・・・”

思い出したくない それがレムリアの正直な心境だった。悲惨  
な過去、暗い思い出。ヴォルボボンク滞在の二年間を除くと、レム  
リアには楽しい思い出の記憶など思い出せなかつた。

「・・・どうされましたか?」

ふと顔を上げると、真剣な表情で自分を見つめる眼差しがあつた。  
小首を傾げて、不思議そうに相手を見る。知らず知らずの内に、  
その深い黒い瞳が相手のそれを覗き込んでします。

魔性の瞳。

魂が深遠に吸い込まれるような、奈落に落ちる感覚を相手に与え  
てしまつたの瞳。その瞳が、無防備にも大きく見開かれていた・・・  
。

『・・・思い出ですか・・・』

ため息と共に洩れた彼女の言葉には苦いものがあった。  
複雑な想いを秘めた私の視線に気づいた彼女の黒く深い瞳が、静かに私を見つめる。

### 魔性の瞳。

しかし、私にとって、その瞳はけして恐ろしいものではなかつた。それは、むしろ、そう・・・「懐かしい」とでも言えばいいのだろうか。

私にとつては、ある種の既視感（Deja vu）さえ伴つものだ。

“・・・そう、私はこの瞳を知つてゐる。”

それが私の身体を流れる血に刻まれた遙かな過去の記憶の一部なのか、あるいは永劫の後に辿りつくであろう遙かな未来の予感なのか。それは私にはわからない。しかし・・・。

“・・・イスタンス（運命の女神）の織りなすタペストリイに賭けて、私はこの瞳に出会つことを知つていた。”

私にはそんな風に思えた。あるいは、それは私の単なる思い込みの過ぎなかつたのかもしれないが。

「・・・レムリア殿。・・・もしよければ・・・、私と一緒に・・・」

「

私は、彼女の漆黒の瞳を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。  
いや、開こうとしただけだったのかもしれない・・・。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「何を・・・」

言つのですか」と言う言葉を、とつさに飲み込んだ。この捕らえ所のない相手は、自分の瞳を覗き込んでも何の変化もないこの人物は、一体何を言いかけたのだろうか。

そんな筈がない。

そんな訳がない・・・

信じられない・・・？

心が揺らぐ。自分自身がよく判らない。いや 判りたくないのか？

レムリアは何度も瞬きをして、霧の様に取り巻く迷いを払おうとする。

だが、相手の視線は自分を見つめたままだ。

「・・・あの・・・」

もどかしい。

どうして、眞く言葉が出てくれないのだらう。  
胸が熱い いや、痛いのか？ それもよく判らない。

「・・・こま、何を・・・」

途切れ途切れの言葉が、今のレムリアには精一杯だった。  
無防備な表情で、レムリアは相手の瞳をただ見つめた。

「・・・

レムリア  
そうして彼女と見つめ合つたまま、いつたいどれだけの“時”が  
流れただろう。

私には、然とわかりはしなかった。

「・・・すまない。」

私はゆっくりと瞼を閉じ、深く息を吸う。  
そして、再び彼女を見つめ、ゆっくりと言葉を続ける。

「・・・どうやら私は、貴女にずっと一緒にいてほしいと思つて  
いるようだ。

・・・貴女の気持ちや、都合も考えず・・・

それは、少し前までは口にすることまできなこと思つてはいたはず  
のしかし、真摯な“想い”だった。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「わたくしに、居て欲しい・・・」

レムリアは、思わず驚きに大きく目を見開いた。胸の動悸が止まらず、頬が熱い。

「・・・お、お戯れを、エリヤドさま。わたくし、などと「冗談を仰いざとも、エリヤドさまには、釣り合いのとれる姫君が数多もいらっしゃるでしょう」・・・」

漸くやがて言いかけたものの、その語尾は小さく消えてしまつ。

ああ、何を言つて居るのだろう・・・

考えが全く纏まらなかつた。

手が白くなるほど握り合わせると、唇を噛んで下を向く。だが、相変わらず相手の視線は、自分へと注がれているようだつた。

「・・・」

大きく、息を継ぐ。

胸の動悸が、少しずつ収まつてくる。

何時もの如く、自分の内面を見つめるように、静かに自分に言い聞かせる。

そうね そんな筈が無いでしょう？ 幻想を見ては駄目。幻想を抱いても駄目。あなたは 魔性の瞳、災厄を招く者、呪われし者なのだから 想いを断ち切るのは、簡単だから・・・。

でも。

そう でも。逡巡する心を、このままにしておきたくはない。誰にも話さず、一人で嘆く現状が好きなわけでもない。寂しくない訳じゃない。

でも・・・

意を決して、顔を上げる。相手の目を真っ向から見返すと。

「一つだけ、教えて下さい。何故、わたくしなのですか

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

『一つだけ、教えて下さい。何故、わたくしなのですか』

その彼女の言葉に、無意識のうちにツツッと表情が緩み、私は軽く微笑む。

「覚えているかな？ ついさきほど、この場所が好きな理由を聞いた私に、貴女はこう答えた。

『好きになるの』、理由は必要でしょ？』

むりん、言葉にできる理由もあるし、それを知りたければ、いくらでもお教えしよう。だが……、けして、それだけではない、といつことばわかつてほしい。』

私は静かに言つ。

「……それに、先に断つておぐが、これは私の単なる思い込みに過ぎないのかも知れぬし、こいつはある“言葉にできる”理由のうち、私にとっては意味のある、一つの答えに過ぎないということも忘れないでほしい。

貴女なら、私のことをわかつてくれるのではないか？ わからうとしてくれるのではないか……。そして……、私なら、貴女のことをわかつてあげられるのではないか。いや……、貴女のことわかりたい、理解したい、と……、そう思えた。……そして、

もし互いに相手のことをわかり、相手を受け入れられるなら、良きパートナーになれるのではないか。そう思えた。

たぶん、それが今、私が貴女<sup>あなた</sup>に一緒にいてほしい。一緒にいたい、と思う最大の理由なのだろう

苦笑して、いつ続ける。

「・・・理屈っぽい前置きのうえに、わかりにくい答えで、すまないな。だが・・・今の私に言葉にできるのはこの程度のものだ」

そこで言葉を切り、もつ一度彼女の深い瞳を正面から見つめる。

「ところで・・・聞いてもいいか？ 貴女<sup>あなた</sup>は私のことをどう思つている？」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

その一言を、聞かれたくはなかった。自分では尋ねておいて、何て不公平なのだろうとは思つたが、レムリアは自分でも答えてその答えが見つからないのだった。

「・・・あの・・・」

何か話さなければ 焦りが、更なる焦りを生み、際限ない悪循環に捕らわれる。

「・・・わたくし・・・」

何を言おひ。どう、答えよひ。迷う以前に、何を迷つているのかが判らない。このもやもやした感じは何？ わたくしに、何を言わさせようとしているの？

聞いても、誰が答えるわけでもない。心の中の自問自答は、迷宮の中を堂々通りするだけだった。しかし、黙つたままでいるわけにはいかなかつた。相手は、自分の正直にその心情を吐露した自分も、その想いに精一杯答えなければいけない。

「・・・あの・・・お氣を悪くしないで、聞いて下さい・・・。わたくし、わたくし、は・・・」

何かが胸の奥から込み上げてきた。唇を強く噛むが、何の役にも立たない。目頭が熱い。どうして熱いの？ 頬を伝わる滴は何？

わたくし、なぜ泣いているのでしょうか・・・

止まらなかつた。後から後から、熱い涙が頬を濡らした。何でだ  
るか。どうしてだらづ。

哀しくないのに、なぜ涙がながれるのじょうか・・・

「涙なんて・・・枯れ果てたと思っていたのに・・・。変・・・で  
すわよね、わたくし・・・」

レムリアはしどろもどろになつっていた。相手は、自分の唐突な錯  
乱振りに呆れ果てているだらづ。でも、涙は止まらない。

“知恵の塔”での試練の時以来初めて、レムリアは自分の心の制  
御を失つていた。あたかも幼い少女の様に、ただただ、涙を流すだ  
けだつた。

## 魔性の瞳・77 「希望」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

『涙なんて・・・枯れ果てたと思っていたのに・・・。変・・・ですわよね、わたくし・・・』

その言葉と共に彼女レーリアが見せた涙に、私は一瞬だけ言葉を失った。この意志の強い少女が、平常心を失う程に落涙しているとは・・・。しかし、私にはその涙がけして否定を意味するものではないのだろう、ということは感じられた。彼女を見つめているうちに、私の表情にも穏やかな微笑みが戻つていた。

「・・・“涙”というものは、“心”が動いた時に流れるものか。・・・少なくとも、私の言葉は、貴女の“心”に届いたらしい・・・」

私は、そつと彼女の頭を覆うフードを下ろす。

泣き濡れてはいたが、それでも、けぶるような深い双眸が姿を現す。その黒い瞳は、自信なげに私を見上げていた。

「・・・今、答えが見つからないなら・・・、いや・・・、心のうちをつまみ言葉にすることができないなら・・・、焦らずとも構わない。」

・・・貴女あなたはまだ私という人間のことをよく知らぬだろうし、私もまた、貴女あなたのことをよくわかつておらぬ。

・・・ゆえに、互いのことをもつとよくわかるための機会がほし

い。

・・・私と一緒に、旅をしてみないか?」

それは、とても当たり前のことであるかのようこそ、自然に出てきた言葉だった。だが、その言葉を聞いた彼女の表情には、僅かながらも、影が差し込んでいた。

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

胸が熱かった。後から後から 胸の内から湧き出すかのよひに、熱い涙が頬を濡らした。

「れで、良いのでしょうか・・・

「こんなに自制を失うなんて。『こんなに、感情を顯すなんて。自分は“夢見”なのだ。人と世に、未来に通じる導きを示唆する者。常に冷静に、常に客観的な立場で有りねばならぬ者。』

「こんなに動搖してしまって・・・

自分を導いてくれた生真面目な師匠、真理查の表情が脳裏に浮かぶ。真理查は、こんな自分を見て何と言つだらうか。これくらいの事で動搖する自分に、呆れるだらうか。

しつかりしなければ。

気を取り直す。奥歯を噛みしめると、涙を拭つ。こんな想いは押し込めてしまおう。そうでなければ・・・気が狂つてしまつ。

「……ヒリアードさん、」

声が出た。もつ 大丈夫。

「わたくし如きを『所望下わつて、ありがとうございます。嬉しさの余り、不覚にもみつともないところを見せてしまいました。どうか、お許し下さるませ」

膝を折って、優雅に一礼 わんわん、やれば出来るじゃないの。

「御存じでしょ？　わたくしは、この国では斯くも恥み嫌われている存在でござります。兄が国王であるといつことだけで、存在することを許して貰つてこます。ヒリアードさんのような、前途がある方と釣り合いがとれる筈がありません」

ほら、もう少し。もう少しで心の扉が閉まる。

「前にも申し上げました。ヒリアードさまに釣つ合つ姫君など數多とありますでしょ？　どうか、わたくしなどは捨て置き、本当に望まれる姫君をお捜し下さるませ」

そして、決定打を言おう。諦めるために・・・

「・・・それでも・・・わたくしを『所望とあれば・・・“夜”的お付き合こする』ことには敵かではあつませんよ」

わたくしも、エリアードさまに興味がありますから ふしだらな女でしょ？ そんな言葉をさらりと言つと、婉然と笑いかけた。

「戯れ言を申し上げすぎましたね。聞き流してくださいませ。わあ、城に帰りましょう」

“風の囁き”の鞍に手を掛けると、一気に跨つた。

## 魔性の瞳・79 「要求」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

やがて彼女は何かを決意したかのように唇を噛み締め、涙を拭う。しかし・・・、そうして紡ぎ出された彼女の言葉は、少しも自分の胸に響いてはこなかつた。

「・・・」

幾分冷やかな、そして、自嘲気味にも見える小さな笑みが、私の唇の端に戻つてくる。

「・・・残念だが、他の女性に興味はないな。・・・私は貴女に興味を持つたのだ。私が興味を持ったのは、貴女が女性だからではなく、貴女が貴女だからだ。・・・私とどこの姫君の釣り合いが取れようが、そんなことは関係ない」

『わたくしも、ヒリアドさまに興味がありますから ふしだらな女でしょう?』

艶然と笑おうと努める彼女の言葉に、なぜだか急におかしくなり、唐突に私は大きく笑つた。

「あははははは」

私が笑つたのをどう受け止めたのだろうか。堅い表情を浮かべながらも、彼女は平板な声で言つ。

『戯れ言を申し上げやすみましたね。聞き流してくださいませ。わあ、城に帰りましょ!』

そう言って“風の囁き”に跨った彼女の手を引き、なかば強引に馬から降ります。

そのまま、呆気に取られたような表情を浮かべている彼女に、

「失礼」

短く言つて唇を重ねた。

「・・・では、『夜』もお付き合いいただきたい」

唇の端には、小さな しかし、不敵な 笑みが浮かんでいた。

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

何が起ったのか、すぐには判らなかつた。唐突に“風の囁き”から降ろされると、力強く抱きしめられて 唇を奪われた。

どうしたの？

恥辱心と戸惑いで、全身が戦慄く。

相手が何かを言つて いる 夜？ 夜を、付き合ふと言つの？

なぜ、驚くの？

あれは…あれは、そんな積もりではなかつたの！

貴女あなたが誘つたのよ。

そんな・・・・・

“線”を越してしまいたいのでしょうか？ ならば…

・・・なじば、どうしたところへ。

彼に・・・抱かれなさい。

息を飲む。胸に鋭い痛みが突き刺さるかのよつだ。

そして、貴女<sup>あなた</sup>は変わるわ。誰にも影響されないくらい。誰にも、屈服<sup>くつ</sup>す<sup>る</sup>ことが無いくらい。誰にも、

変わつて・・・しまつへ。

独りで生き、独りで死ぬ。理想の夢見ね。

そんな・・・嘘でしあつ・

そんな訳ないでしあつ? どうしたの? 嬉しくないの?

「やめてえええつ!」

叫んでいたのは、自分だった。

迸るような悲鳴を上げると、幾筋もの雲くもが、頬を伝つて流れ落ちる。がくがくと躯を震わせ、自分で自分を抱きしめる。強く・・・・・強く。

無黙よ。

息が止まる。胸が苦しい。躯がどんどん冷たくなる。熱いのは頭だけだ。気が狂いそつ。

狂つているのよ、貴女あなたは。

ち、違つつ！

自分で何時も言つてるでしょ？ “現世せんせいは夢ゆめにて、夢ゆめこそ眞まことと狂氣きょうきで正氣せいきの夢を観る” つて。あれは、嘘うそ？

あ、あ・・・

田を逸らしても、現実は変わらないわ。世に生きるのが、辛く

なるだけよ。

い、嫌・・・

ホントに、往生際が悪い・・・

何かが切れ掛かっていた。  
いや、既に切れてしまっているのかも知れない。  
意味を為さない言葉の断片を繰り返しながら、レムリアは幼い子  
供のように、ただ震えていた。

何時もお読み頂き、有り難うござります。おかげさまで、本編で八十話となりました。遅々として進まない話にやきもきされているかも知れません。継続して毎日更新に頑張りますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

唇を重ねたのは数秒にも満たぬ短い時間。

しかし、彼女の見せた反応は、無垢な少女のそれであり、けして大人の女性のそれではなかつた。

大人びた振舞いをしてはいても、言葉や振舞いほどに大人ではなかつたということだ。

あたりまえではないか。

Hリアド。おまえはわずか17歳の少女に何を求めていたのだ。

私は震える彼女の髪をそつと撫で、優しく言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

・・・彼女の心まで届くように、と願いながら。

「・・・レムリア。もし貴女あなたが私のことを怖いと思うなら、私はこのまま貴女あなたの前から姿を消し、一度と現われまい。・・・貴女あなたが興味を持った私という人間が、こいつ一面も持つていいのは、間切れもない事実なのだから」

ムーンストーンの首飾りをはずし、彼女の手にそつと握らせる。

「・・・その宝石いしは、貴女あなたにさしあげよう。受け取つてもらえれば、

うれしく思つ

それは、仄かに青みがかつた光の揺れる、なかば透き通つた白い  
宝石。

「・・・その宝石が司るという“静寂”が、きっと貴女の心を静め  
てくれよう。・・・そして、さきほど私が貴女に告げた“一緒に  
いてほしい”という言葉が・・・“夢”ではなかつた証と  
なつてくれるることを、期待する・・・」

## 魔性の瞳・82 「涙滴」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

レムリアがゆっくりと顔を上げると、そこには自分を見下ろす優しげな表情があった。

ああ、この人はこんな表情も出来るのね……

不安感も恐怖感もなかった。ただ、しっかりと自分の道を歩く人がそこに居るだけだった。

自分は、なんて子供なんだろ？…

夢見だ、預言者だと言つたところで、真に大人として振る舞う相手の前にあつては、それは虚勢としか思えなかつた。子供の自分が、とても恥ずかしかつた。

「『めんなさい』……」

涙がゆっくりと頬を伝つ。

「……ですね、わたくし……。駄々つ子のような……自分でも、呆れてしまい……」

泣き笑いの表情。だが、それは紛れもなく十七歳の少女の素顔だった。

華奢な躯に小さな、細い顔。見上げる瞳は、その深い闇の色を失い、生真面目で純粋無垢な輝きだけを宿していた。

「・・・平凡だけれども、幸せな暮らしが欲しかった そう言つたら、笑いますか？ 何も考えずに、毎日笑つて暮らせたら嬉しいです そう言つたら、軽蔑しますか？」

同情して欲しくて、言つてゐるのではないのです そう言葉を結ぶ。ちょっと、子供の自分が我が儘を言つてゐるだけなんです、と。

さあ、もう十分でしょう？ 嘆いても、泣いても、現状は何も変わらないわ。

・・・そうね。判つてゐるわ。

相手に依存するのは止めなさい。貴女は夢見。独りで生き、独りで死ぬのがその路なのよ。

ええ。知つてゐるわ。

ならば、毅然とした大人の態度を取りなさい。

・・・そうね。

ふう、と溜息をつく。判つて いる 判つて いるの だけ ど。

「・・・どうして、いつも 辛く 感じるの でしょ うか・・・」

呟く ように、その 想い は 声 に 出され てしまつて いた。

澄んだ 瞳 が、奈落の 絶望 の 色 で 染め られ て いく。もう 泣 も 流れ な  
い。 流 し た く て も 流 れ て は く れ な か つ た。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「……いや。……けして、笑いはせぬ。……私とて、貴女と  
変わらぬ時があつた……。  
……貴女より幾許か長い経験と、……苦い想い出だが、私に  
“答え”を教えてくれたに過ぎぬ……。」

私は彼女の言葉にそう応じた。  
レムリア

『どうして、こんなに辛いのでしょうか……。』

ため息とともに洩れた彼女の想いに応えるよつこ、私は静かに言葉を紡ぐ。

「……使い古された言葉なのだろうが、『人間は一人で生きてはゆけぬ。』という言葉もある。

……その言葉が正しいかどうかは、正直私にはよくわからぬ……。

……“人間”であることをながば以上捨て、他人との関わりを最小限にすませ、多くの人々（ひと）の中にありながら、一人孤高に生きる。……そんな生き方も、けして不可能とは思わぬ……。

……“阿修羅”を手にした私は、少なくとも一時期、そのような生き方をしてきたのだから……。

その頃の自分に想いを馳せる。

「……だが。……もし貴女に、私と同じものが見えるのなら……。  
。そして……、貴女の視ているものが、私にも見えるのなら……。  
。私たちとともに……、一緒に歩いてゆくことができるのでは  
ないか。……そんな風に思えた。

。……それでも、貴女の背負っているものを、私が代わりに背負  
うわけにはゆかぬだろうし……、そして……、私が背負つてい  
るものを、貴女に背負つてもらうわけにもゆかぬだろう……。

。……けれど、もし、ともに歩くことのできる者がいるなら……。

。……今までとは、少しだけ違う気持ちで歩いてゆけるようにな  
るのではないか……。

。……昨夜、貴女と初めて出会った時……。ふと……、そん  
な気がした……。」「

彼女の頬にわずかに残った涙の跡に指先でそつと触れ、その漆黒  
の瞳をのぞき込む。

絶望の色に染まつた彼女の瞳を見るのはつらかった。

いや……。彼女の瞳を、絶望の色に染まつたままにしておきた  
くはなかつた。

「……レムリア。……貴女は、昨夜、私と踊った時、感じなか  
つたか？」

だからこそ……あの時、『人』が、人で有り続けるために狂わね

ばならないとしたら・・・

そんな問い合わせしたのではないのか?』

私は静かに問いかけた。

## 魔性の瞳・84 「崩壊」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

問い合わせられた言葉、そして差し出された手。

「わい。

この手を取るのが。暗闇から、光の世界に足を踏みだすのが。

もしも・・・

もしも。もしも・・・また独りになつてしまつたら。自分は耐えられるのだろうか。自分は、その事態になつても生き続けることが出来るのだろうか。

耐えられない？

そう、耐えられないかもしれない。壊れてしまうかもしれない。狂氣と正氣の狭間で、辛うじて踏み止まつている危ういバランスに狂いが生じ、奈落の底に向かつて永遠に落ちて行くのかも知れない。

それでも・・・

良いのかも知れない。例え、それが長続きしなくても。例え、その後に来るものが破滅であつても。一時が楽しく有れば、それで良いではないか？

莫迦な・・・

心の声が聞こえる。「己を曲げ、安寧に身を委ねよ」という声が。その声に負けそつになる。自分を覗き込む、こんな優しい眼差しに負けそつになる。

負けたつて、良いじゃないの。貴女が、貴女でさえ有れば。

わたしがわたしで在ること。それは、何を持つて成り立つのだろうか？ この軀が在るからか？ この心が在るからか？ それとも・・・

「・・・」の想いを、持つからですか・・・

言葉が零れていた。辛くて、辛くて　心の痛みは、自分をどうにかしてしまった。そつだった。

“ お願い・・・そんな目で見ないで・・・”

軀が、軋む。

“ お願い・・・そんな風に想わないで・・・ ”

心が、軋む。

「 お願い・・・ 」

何をお願いするのか？ 優しくして欲しいのか？ 亂暴にして欲しいのか？ それとも、心が揺らぐ自分を、奪つて連れ去つて欲しいのか？

「 ・・・わからない・・・わたしには・・・わからない・・・ 」

めくるめく世界が回り始める。そして、わたしは壊れしていく。瞳の中から光が消え、軀が急速に冷えていく。

心が、死ぬ。

何も言えぬまま、何も答えられぬまま レムリアは困惑の海に軀を投げようとしていた。全てを、忘却へ。全ての、諦めへ・・・。

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

「…………」

私は、ふと心に浮かんだ言葉を口に出す。

「…………私は考える。だから私は存在する。…………そんな意味の、古い言葉だ。」

私は彼女をじっと見つめる。

「…………レムリア。…………頼む。逃げないでくれ。

“人”は、多くの悩みを抱え、迷いながら生きている。

そして、“生きる”といつことは“選択する”ことであり、“選択する”ことは“変わる”といつことである。

確かに、悩むこと、考えることをやめ、忘却に身をゆだねて“変わること”を放棄してしまえば……、  
・・・樂しくなれるのかもしれません。

だが・・・、それは、“生きる”こと、“存在する”ことを、棄てるに等しい。

・・・私は、けして、そんな貴女と、ともに歩きたいわけでは、  
ない・・・。」

彼女の両手を包み込むように、心の痛みを癒すように、優しく、  
強く、握り締める。

「……私は、貴女あなたに、とても“酷”なことを求めているのかもし  
れぬ……。  
……私は、貴女あなたと一緒に来てほしいと思つていてる。

しかし、それは、けして私に頼つて考へることを放棄して生きて  
ほしいと思つていてるわけではない。

私とともに歩きながらなお、貴女あなたには、貴女自身の“道”を選択  
してほしいと思つていてる。

……それがいかに困難なことかは承知の上で、私は貴女あなたにそれ  
を求めている……。

……むりん、もし貴女あなたがそうするため、私にできることがあ  
るのなら、なんなりとお手伝いしよう。

だが……、それでも、私が私の“道”を選んだよう……、  
貴女あなたにも、貴女自身の“道”を、選んでほしい……。

そう思つて……。」

私は静かに彼女を見つめ、彼女の手にそつと唇を触れる。

『今我ら鏡もて見る如く、見るといひの朧なり。されど彼の時には、  
顔を対せて相見えん。』

なぜか、そんな言葉が思い出された。

「・・・私たちには・・・似たところが、ある・・・」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

涙が流れた。後から、後から 銀の筋を引いて、頬を流れ落ちていく。

あ、暖かい・・・？

心に差し込んだ一條の陽光のよう、不意に感じたもの。その想いが徐々に大きくなつていき、レムリアはそつと仰ぎ見た。

ああ・・・

どこか困ったような、それでいて優しげな表情。自分を見下ろすその双眸には、真摯な輝きが宿つているように思えた。

心配・・・してくれているのですか？ こんなわたしでも？ 人に在りざるものでも？ 忌み嫌われているものでも？？？

疑問が浮かんでは消えていく。いや 溶けていくとでも言つた方が良いのだろうか。

信じて・・・みよつ・・・

莫迦なことをしているのかも知れない。愚かな考えのかも知れない。所詮、人は独りで生き、独りで死ぬ そんな声も頭の奥から聞こえてくる。

でも・・・

自分を見つめる瞳は、暖かさと優しさに溢れていた。こんな自分の事を、本当に心配してくれていた。

勇気を、出してみよう

逃げていた自分。  
避けていた自分。  
諦めていた自分。

それも自分なのだから、そんな自分と決別することは出来ない。だけども、そんな自分を変えようと努力することは出来る。迷いはまだあった。しかし、もはや逡巡はしていなかつた。

意を決して、言葉を紡ぐ。一步一步、自分が変わるために。

「・・・はい。わたくしたちは、似ているかも知れませんね」

何時しか、涙は止まっていた。そして、厚い雲間から一筋の陽光が荒れた大地に差し込むように、微かな笑みが口元には浮かんでいた。

「無謀無思慮かも知れませんが・・・一度だけ、夢から醒めてみようかと思います・・・」

精一杯の勇気を出して レムリアは未知の世界に一歩を踏み出した。色のない、孤独な世界を後にして 哀しみや苦労は多いが、喜びもある世界へ・・・。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「・・・レムリア。」

私には、その彼女の微笑みは何よりうれしく思えた。  
人形のようにも見えた偽りの仮面の微笑みでも、どこかに陰りを  
残した微笑みでもない。

少し躊躇うようににはにかんだ微笑みだが、まぎれもなく彼女自身  
の意志で紡がれた、心からの微笑み。

彼女の手の中のムーンストーンの首飾りをそつと拾いあげ、漆黒  
の瞳を見つめながら、彼女の首にかける。

「・・・“今”という“時”が、けして“夢”ではない証として。  
・・・私の言葉が、けして“夢”ではない証として。  
・・・そして、“今日”という日の想い出に。」

彼女をそつと抱き寄せ、耳元に囁くやく。

「・・・約束するよ。君はこれからいろいろな経験をするだろう。  
・・・けして楽しいことばかりではないと思うが、それらはいつ  
か君にとって、忘れ難い“想い出”となる。  
・・・君が“生きて”いる限り、きっと。」

私はそう言つて微笑つた。

「ありがと。とっても・・・嬉しいです」

「なんでなのだろう。不意につまづく葉が出でこなくなってしまった。

なぜだか、躰がすぐ熱く感じている。

心臓の鼓動は早鐘を打つかのように暴走気味。こんな感覚は初めてだった。

「あの・・・」

「この人は、いつまでわたしを抱きしめているのだろう。不快ではないけれど、躰が熱くて、おかしくなってしまった。」

「あの・・・お城に、戻りませんか？」

囁くような声しか出なかつた。

「この状態から抜け出したいという想いと、ずっとこのままでいたいという想いが交錯する。

“わたしは、どこか変になってしまったのだろうか？”

はつきりしない頭で考えてみる。よく分からない。

でも、抱きしめられて、相手の鼓動を感じられることが、こうも居心地が良いとは思わなかつた。

「ね、エリ亞ドさま・・・お城に・・・」

声が途切れがちになる。

「ああ、頭も躰も熱い。わたしはどうなつてしまつただろつか・・・」

## 魔性の瞳・88 「夢幻」

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）

腕の中、<sup>レムリア</sup>彼女の華奢な身体は小さく震えていた。

「あ・・・、あ・・・。・・・そうだな。」

途切れ途切れに紡ぎ出された彼女の言葉に、私は彼女を抱いた腕をそっと緩める。

「・・・すまない。・・・人の、・・・人の身体が温かいものだつたのだということを、・・・久しぶりに思い出していた。

・・・痛くはなかつたか？」

けして痛みを感じるほどしつゝ抱きしめたわけではなかつたが、彼女になんと聞けばよいものか、うまい言葉を見つけられず、結局そんな言葉が出てしまう。胸元に感じた彼女のぬくもりは、それほどに忘れ難いものだつたのだろうか・・・。ふと、そんなことを自分に問うてみる。それに対する明確な答えが返つて来ることはなかつた。だが、それでも・・・。

「・・・レムリア。・・・私は、君に出会えたことを、心からうれしく思つよ」

その気持ちには生涯忘れ得まい。私にはそんな風に思えた。

「・・・平気、です・・・」

レムリアは呟くように言つと、相手の顔をそつと仰ぎ見る。ともすれば、冷厳に見らがちな表情には、優しげな笑みが浮かんでいた。

“ああ・・・この人は、こんな表情もできるのね・・・”

自分に会えたことを嬉しく思つてゐると、どこか恥ずかしそうに話してくれてゐる相手の柔らかい表情が、今は自分一人だけに向けられている。その事実がレムリアには嬉しく思えるのだった。

「・・・わたくしも・・・」

想いには、想いで応えなくては。心を閉ざしてきわたしだけど、大切にしなければいけない事柄ははつきり判る・・・。

「・・・ヒリアードさまにお逢いできて、とても嬉しく思つております」

そう、この想いに偽りはない。少なくとも、今、この一瞬は・・・。

魔性の瞳・89 「両想」

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「・・・レムリア。」

私はじつと彼女を見つめる。

「・・・面と向かって言われると、存外に恥ずかしいものだな・・・。  
。だが・・・、君のその言葉を聞けてうれしいと思っている自分も  
いる。

・・・不思議なものだ。少し前までは、自分がこんな気持ちにな  
れる人間だとは想像することさえできなかつたというのに・・・

彼女の黒い瞳に言葉が途切れる。

「・・・レムリア」

彼女の柔らかな黒髪をそつと撫で、黒い瞳をじつと見つめる。そ  
して・・・。

さきほどは強引に奪つた彼女の唇に、今度はそつと・・・、そつ  
と自分の唇を寄せていく。

「ん・・・」

その甘い口づけは、レムリアの心に甘美な陶酔を呼び起こした。  
相手の長く纖細な指が、繰り返し優しく髪を透くことも、その想い

をこや増してゆく。

「エリシアさま……」

何度も、何度も 相手の名前を繰り返して呼ぶ。呼んだ回数だけ、相手との絆が強くなるのだと思つかのよに。だが、そんな僅かな時間も、過ぎ去るのは早い。

「エリシアさま……。陽が暮れていってしまいます。お城に……戻りましょう、ね」

名残惜しさを残して、レムリアはエリシアから身を離した。余り遅くなると、兄王と姉姫を心配させてしまつ。

「また……」一緒にわせて頂けると……とても、とても嬉しく思います」

頬を染めて、そんな言葉をレムリアは言つてみた。黒い双眸は濡れたように輝き、その端正な表情には自然な笑みが浮かんでいる。その心には、一辺の曇りも無いのだろう この瞬間、レムリアは心が通じ合えたという幸福感に、溺れる想いだつた。

ヴヒロンニア連合王国／王家の森（湖）

「……そうだね。私としても、貴女とのつきあいを今日だけのものに終わらせたくない。……だが、まあ、今日のところは帰るにしそうか。“夜”をつき合つてもられないのは、少々残念ではあるが、ね」

唇の端に皮肉っぽい笑みが戻つてくる。（おそらく）真つ赤に染まる（である）レムリアの表情の変化をちらりと見ながら、私はこのように続ける。

「……冗談だよ。そうだな、こいつ言えばわかつてもうに入るかな。  
・私は、星々と放浪者の神セレステイアンの追隨者（Follow  
er of Celestial）という立場にある。夜空に輝く星々の下、“夜”的一時を一緒に過ごすということは、私の気持  
ちの中では、まあ、そういった特別な意味もあるということだ。  
・・・だが、焦りはすまないよ。もしこれから、私たちの運命が交  
錯してゆくものなら、こづれ、せつとそういった機会もあるわ。」

セシルも少しだけ表情を引き締める。

「……それに。せつかくの気分に水を挿すより悪いが、おそらくこれから先、考えなくてはならないことはいくらも出てくるだろ  
うしね。貴女の婚約者と名乗っていたあの男のことをや、兄君や義  
姉君のことにして、ね」

一瞬、レムリアの顔が火照つたように紅潮した。驚いたように見上げた先には、余裕の笑みが浮かんでいる。

「あの・・・どうしても、お望みでしたら・・・」

その先の言葉を、敢えて続けようとしたその時の自分は、すっかり「己を見失っていたのだろう。少なくとも、後になつて冷静に考えると、今置かれている立場で自分が言つて良い言葉などではなかつた。

だが、運命はきちんと帳尻を合わせてくれるようだ。そんな自分の浮いた気分も、ヒリアドの次の言葉を聞いて一瞬で消失する。

「・・・あの、男・・・」

心が急速に冷めてくる。問題は全然片づいてはいない こんなところで、こんなに惚けている場合じやないのだ。

「仰るとおりですわ。すっかり時間を使つてしまつて わたくし、どうかしてありました。急ぎ、お城に戻りましょう」

“風の囁き”を呼び寄せると、ひらりと跨る。この場を去るのが非常に心残りではあつたが、そんな自分を冷笑する声も聞こえてくる。

婚約者のいる身で、他の男性と一緒にいたのよ。当然噂にはなつてゐるでしょ？

それは、予期していた。

ましてや、相手は王国随一の富豪。国に対する影響も少な  
くはないわ。

それだけは、避けなければ・・・。

あなたを庇つているお兄さま、お姉さまのことを考  
えるのね。あなたの行動は、彼らの立場を一層難しくするわよ。

そんなこと、判つてゐる。だから・・・

だから、何？

だから・・・“夢”を見よつと思つたのだけビ・・・

夢は、夢でしかないわ。叶わない、現世の夢<sup>うつせ</sup>・

渋面を作つている自分にはつとすると、笑みを表情に載せてエリ  
アドに言つ。

「あれ、行きませじよ」

昨日は更新できず、申し訳ありませんでした。昨日より一週間の出張に出ております。（これも、空港のラウンジで更新します）基本的に、出張中は更新が難しいので、恐縮ながら再開は31日から、させて頂き度。宜しくお願ひ申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖）

「……レムリア。……今、少しばかり急いでみたところで、問題の根本的な解決には繋がらない」

私は、今にも駆け出そうとする“風の囁き”（Wind Wish per）の手綱を取り、そう言った。

「……“時”を無駄にはできないが、必要な“時”はかけなくてはならない。ゆえに……」

少しだけ間を取り、彼女の瞳を正面から見る。

「……無礼は承知の上で聞く。……もし貴女に答えられるものならば、教えてほしい。

……昨夜、バルコニーで貴女と別れた後、貴女の部屋を訪ねるまでの間に私が見たものが何だったのか。……ヴァルガー・オフ・エルドと名乗つたあの男は本物なのか。

……貴女の姿があの場から消えた後そこに現れ、“黄昏卿”（たそがれきよう）と名乗つた人物が事を収め、私に貴女の部屋を教えてくれた。それゆえ、私は貴女の部屋を訪ねることができた。

……幸いにしてか、不幸にしてか……私は貴女その他にも“夢見”と呼ばれる者を知っているのだ。……これらのこととは、貴女が人々から“夢見姫”と呼ばれていることに関わりがあるのではないか？」

私はそのように続けた。

「・・・・・」

呼吸をしていないかと思われるような長い沈黙 だが、実際は数瞬にしか過ぎなかつた。俯いていた顔をのろのろと上げると、レムリアの小さな顔には何の表情も浮かんでいなかつた。

「エルド男爵は、わたくしとの結婚を望んでいるそうです」

掠れるような、低い声 何の抑揚もない。

「“黄昏卿”と云う方が何方じなたであるかは知りません。でも・・・」

でも、誰が“黄昏卿”を名乗ったのかは“知つて”いる。黄昏卿 この国は、黄泉への路を辿つているのだろうか。

「ああ、帰りましょー! 来た時とはまた違つた道を知つているのです。そちらから帰りましょー」

一転、明るい表情で朗らかに言つと、 “風の囁き” の馬首を巡らせた。

「ヒリアドさまー 競争ですわー!」

その言葉が聞こえたのは、レムリアと“風の囁き”が文字通り風のように駆けだした後だつた。

魔性の瞳・91 「許嫁」（後書き）

全く別編の書きかけを間違ってアップしてしまいました。そもそも思議に思われたことでしょう。誠に申し訳ありませんでした。正しい本編に差し替えましたので、宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティイ連合王国／王家の森（湖）王都

「……やうか。」

私は小さなため息をつく。  
彼女は、知つてのこと、わかつてのことのすべてを話していく  
わけではない。そのようなことは、ある意味、当たり前のことは  
のだが、なぜか私には、それがとても残念なことに思えた。

『ヒリアドさま、競争ですわー。』

“風の囁き”が駆け出し、彼女の声が響く。  
・・・あるいは、それは「自分を追いかけてきてほしい」という、  
彼女なりの表現なのだろうか。  
ふと、そんなことを思つ。

“・・・ならば。”

「・・・おつきあこわせ、いただくとよつか」

口の中で小さく呟き、『月光』の跨ると、首筋を軽く叩く。

「・・・頼むよ。『月光』。」

まるで、その言葉に心えるかのよう、『月光』は静かに駆け出  
した。

一陣の風のよすに走る“風の囁き”。巧みに馬を操るレムリアの乗馬術は確かなものだった。

“早く、早く　もっと、早く”

レムリアの高揚した気持ちが、愛馬に拍車を掛ける。往路にはあれ程時間を掛けた王家の森を抜ける道を、復路ではあつという間に駆け抜けてしまう。

程なく、王宮を取り巻く城壁に辿り着いた。多少息を荒くしながら、振り返つて追つてきたエリアドに悪戯っぽい笑みを向ける。

「わたくしの勝ち！」

些か子供っぽい言い方をすると、門に向かって右手に嵌めた指輪を翳す。ギギギ、と軋みながら門が外側に開いた。

「えつー！」

門を抜けようとしたレムリアは、寸前で馬を止めた。アーチウェイを抜けた先に、道を塞ぐように一人の人物が立っていたからだ。顔も見たくない人物　嫌悪感で顔を背けた主の心を感じ取つたか否か、“風の囁き”が二三歩後退する。

ヴェロンティ連合王国／王家の森（湖） 王都

「お待ちしておひましたぞ、姫君」

口元に冷笑を浮かべながら、その男は低い声で言った。ヴァルガー・オフ・エルド、ヴェロンティ連合王国の男爵にして、王国でも最も富んだ貴族の一人。その本人が、暗い笑みを浮かべて立っていた。

「断りもなく外出されるとは、兄王陛下もご心配であられますぞ。さあ、私と一緒に王宮に戻りましょう」

近づいてくると、レムリアの手を取ろうとする。

「触らないで…」

咄嗟にエルド男爵の手を払いのけると、レムリアは馬首を巡らせて自分の後ろに続いていたエリアードの傍らに下がった。

息が乱れて荒く、その表情は真っ青だ。

それでも、意志を振り絞つて否定の言葉を口にする。

「エルド男爵。わたくしは自分で王宮に帰れます。エスコート頂ける方もいらっしゃいますので、貴方のお手を患わせる必要もありません」

心優しいこの娘にして、これほどまでに冷たい声がだせるのか  
そう感じさせるようなレムリアの<sup>こわな</sup>聲音だった。

「それに、わたくしが誰と外出するかは、わたくし自身の決めるこ  
とです。誰に断る必要がありますか？」

必要以上に、レムリアは攻撃的だった。

その声音と表情には、相手に対する嫌悪感がありありと見え隠れ  
する。

いつもの自制心は、完全に何処かに飛んでしまっていた。

ヴェロンティ連合王国／王都（王家の門）

「私は“外出をされるのが良くない”と申し上げているのではありませんよ」

エルド男爵は勿体ぶつた口調で言ひ、小刻みに躰を震わせるレムリアを上から下まで舐めるように見る。無遠慮も斯くなるものか、という様な不躾な視線である。

「然るべき相手に“断りもなく”外出されるのは、国の重要な立場に在られる方にしては軽慮な行動ではないか、と申し上げているだけですよ。貴女あなたを捜すために、動員された騎士の方々の労苦を考えてもみて頂きたいのですな」

意識してやつてているのだらうか　相手をゆつくりと覗るような言い方をしている。

「さあ、“然るべき相手”がわざわざこいつして来てあげたのです。大人しく、私と共に王陛下の所に参りましょ。さあ。」

その一言と共に、レムリアとエリアドの周囲に、兵士が降つて湧いたように現れた。

エルド男爵が小さく顎をしゃくると、その内の一人があつという間にレムリアの馬を引いて“王家の門”を潜つてしまつ。

間髪を入れずに、門とエリアドの間に兵士の列が出来る。字面通り、蟻一匹入る隙間もない。

「くくく、手間を掛けさせて下さいますね。我が僕も程々に成されないと、この国と王陛下にござ迷惑を掛けことになりますよ。それでも、宜しいのですか？」

田の前に惹かれてきた馬上のレムリアに言つて、ホールド男爵は下卑た笑みを浮かべながら皮肉っぽく鼻を鳴らした。

## 魔性の瞳・95 「魔剣」

ヴェロンティ連合王国／王都（王家の門）

「・・・フッ。」

私は、氷の如き薄い微笑みを浮かべ、立ち並ぶ兵士たちをじろりと一瞥する。

すべてを凍てつかせる“極北の永久凍土”の如き、冷やかな視線。彼らを完全に無視して、右手を虚空に翳し、“それ”を呼ぶ。

飾り気のない簡素な灰色の鞘に収められた一振りの太刀。

“阿修羅”

私は、手の中に現われた“それ”を、至極無造作に彼女の腕の中  
に放る。

「・・・マーガレット・レムリア・オフ・ヴェロンティ。

その剣を持つてゆくがいい。・・・陛下には、それでわかるはずだ」

見かけとは裏腹に、言葉にできなかつた“万”の想いを、ただ一振りの剣に託して。

手の中に落ちてきたのは魔剣　この世の理の外に在る、と尊される黒の刀。初めて触れるその感触に、レムリアは一瞬背筋に悪寒が走るのを感じた。

鋭い、凍り付くような波動

鞘によって封印されても、レムリアの纖細な心には、刀の発する“色”が感じられた。何処までも深く、何処までも暗く　遙かな古代からの想い

何かを振り払うかのように三度首を振ると、レムリアは顔を上げて射るよつにエルド男爵を見た。

「それでは、兄の所に行きましょ。但し、予め警告しておきます。我が身に何か不埒なことを行おうとしたら、遠慮なくこの剣を抜かせて貰います。貴方も、この剣が何であるか御存じでしょう？　理解されているのならば、詰まらない考えはお止めになることね」

氷のような冷たい声で言つと、最後に一度、エリヤドに視線を振つた。

“貴方の心、確かに預かつて参りますわ。そして、兄さまに、はつきりと申し上げます”

その深い黒い双眸に、精一杯の想いを込みると、毅然と身を翻して王宮を目指して馬を進めていった。

ヴェロンティ連合王国／王都（王家の門）

“「、小娘が・・・”

その深い奈落の淵の様な、レムリアの黒い双眸を直接覗き込みそうになつて、エルド男爵は慌てて目を逸らした。“魔性の瞳”<sup>ちまた</sup>でその恐ろしさを喧伝されてい効果を自分で試してみるほど、さしものエルド男爵も醉狂な考えは持つてはいなかつた。

“王の義妹でなければ、誰がこんな乳臭い小娘を望むものか”

その“小娘”が気迫に、完全に気圧されていることを忌々しく思  
いながらも、エルド男爵は精一杯の虚勢を張つた。

「宜しいでしよう、姫君。兄王陛下の元へ、謹んで御案内致すとし  
ましよう。しかし“不埒なこと”とは 私もなかなか見くびられ  
たものですね」

王家の血筋で無ければ、誰がこんな貧相な小娘に興味を持とうか  
言外にそんな言葉を匂わせながら、エルド男爵は冷笑を浮かべ  
てみせる。

誰が何と言おうと、自分は王国に並ぶ者がない権勢者なのだ。そ  
んな自分が、何を恐れることがあるうか。それが姫を名乗る小娘だ  
ろうが、食いつぱぐれの青臭い素浪人だらうが

そう自分に言い聞かせていると、再び自身に名誉と誇りの想いが  
戻つてくるような感じがした。

「では、そこな剣士。貴公はお役目御免だ。この門を通りるのは王族のみ故に、諦めて正門に回るが良い」

ヒアドにそう言ひ放つと、ヒルド男爵は慌てて去つてこくレムリアの後を追つた。

魔性の瞳 - 96 「矮小」(後書き)

仕事の都合で、アップが7日中に間に合いませんでした。従い、一話続けてアップ致します。

ヴェロンティ連合王国／王都（王家の門）

精一杯の虚勢を張つてレムリアの後を追いかけてゆくその男（エルド男爵）の様子を、私は冷やかな笑みを浮かべたまま、視野の片隅で見送つた。

“・・・やはり、彼女はこの国に残るべきではない・・・”

そんな想いが自分の中で一際大きくなつてゐることに気づきはした。だからと言って、彼女をこの国から連れ出してどうするのか。自分に、確たる当てがあつた訳ではない。暫し思案してみるが、早々良策が思い浮かぶわけでもない。

「・・・さて。どうしたものか。」

眩くよつと洩らして、夕闇の迫り来る空を仰ぐ。

・・・そう。元々私にとつて、この国は、けして“愛すべき我が祖国”と呼べるような存在ではない。それゆえ、自分がそのような“想い”を抱いてしまうことに対する躊躇<sup>じまど</sup>いは、実のところ「ない」と言つてしまつても過言ではない。だが・・・。

“・・・当の彼女は、はたしてどう思つてゐるのだろう。”

そんな風に他人の気持ちを慮るのは、私にとつて久方ぶりのことであつたかもしれない。

様々な事柄に想いを巡らせながら、私は固く閉ざされた王家の門

に背を向けると、ゆっくりと歩み去った。

“・・・もし彼女レムコアがいなければ、私がこの都に来る」とは、一度と  
ないのだろうがな。

頭の片隅で、ふとそんなことを想いながら。

ヴォロンティ連合王国／王都／中央市場

喧噪が聞こえてきた。どうやら、マーケットの方からだ。塵一つなく整つた、どこか冷たい街であるヴォロンティ連合王国の首都シエンドルにあって、唯一活況を示しているのがこのマーケットだつた。ここでは、神曜日と自由日を除く日に自由市が開かれていた。もつとも、『自由市』と言つても、きちんと市の方に登録された商人しか店を出せないのが如何にも杓子定規のこの国らしかつたが。

喧噪の原因は、マーケットの中央にあつた。背の高い若者に、男の一人組が激しい調子で何かを怒鳴つているのだ。

「要らぬ口出しさは止めて貰おう!」

「商人から、正当な対価を払わずに商品を得ようとする」とを止め

ることだが、『要らぬ口出し』でしきうか?」

「余計なお世話だ!」この国には、この国の律リフがあり、我々はその番人たる騎士だ! 」この国のことばこの国の中ものが決める! 他国者は黙つていて貰おう!」

口論を吹つ掛けているように見える一人組は、驚くことにこの国の騎士であると名乗つた。その外見や振る舞いから到底想像にも及ばない。

「まあ、止せ。コノート。所詮、どこの馬の骨ともわからん他国者だ。まともに相手にするのも馬鹿馬鹿しい。日を改めるとしきょう」「む…判つた。モンマス、貴公がそう言つなら、この場を納めるとしきつ

「そつだ。庶民を寛大に扱つ  
る舞いでもあることだしな」  
それが騎士たる者に要求される振

「ノート、と呼ばれた騎士は若者に振り返ると、横柄に言つて言い  
放つた。

「他国者、命拾いしたな。今日は貴様の無礼な言葉を聞き流してや  
ろう。だが、次に見かけた時は容赦はしないぞ。よし、モンマス。  
行くとしよう」

「命は大事にするんだな、他国者」

典型的とでも言えるよつた捨てセリフを残して、その一人は立ち  
去つた。だが、騒動は收まらない。

「あんた！ 何て事をしてくれるんだ！」

おろおろとその状況をみていた商人が、唐突に捲し立てた。

「えつ・・・・」

「お城の騎士様の機嫌を損ねてしまつて、これからどうやって商売  
すればいいんだ！ ああ、どうしよう、どうしよう……」

周囲に店舗を出している他の商人達とみると、『我関せず』とば  
かりに視線を逸らしてしまつ。関わり合いになりたくない、という  
雰囲気が濃厚だ。

もう一つ大きな溜息を付くと、若者は途方に暮れたように一人で  
嘆く商人の傍らに立ちつくした。

ヴェロンンティ連合王国／王都／中央市場

王家の門を離ると、大回りして王城の正門を潜り街路をゆく。市場の喧騒に、私はグレイホークを思い出す。

“この国も、下町の雰囲気は他国とさほど変わらぬのだな。”

最初のうちは、そんな風に思っていたのだが、どうやら、今この国には、そんな当たり前のことを望めぬらしい。

不意に不愉快な光景が視界に飛び込んでくる。

商人から商品を巻き上げようとする横柄な騎士を、その背の高い若者は止めさせようとしているようだ。この国で久しぶりに見かける若者らしい正義感は好ましく思えたが、同時に、騎士を名乗る一人組の愚かさは度し難いものに思えた。

若者がヴェロンンティの者ではないらしく、そして、騎士の一人組がこの国の人だということが、腹立たしさを助長させる。

私は少し離れた場所から、騎士だと名乗る一人組を冷やかに眺めた。その視線に気づいたのか。騎士たちは、ひとくそり捨てセリフを残して去つていった。

しかし、騒動はまだ收まらなかつた。今度は、商人がその若者を非難し始めたのだ。私はもはや呆れるのを通りこして馬鹿馬鹿しくなつていた。

“・・・どうやら腐つてるのは、富廷だけではなかつたらしい。”

「……夙川のひとはな。その男の血業血脉だ」

若者の傍へひし馬を進め、冷やかな口調で囁く。

「……この国には“悪いこととは悪い”“正しいことは正しい”と主張することをやできぬ者が多過ぎる。そのような状態を黙認することは、それに加担してこること等しいことじとを、この国の人間の者は学ぶべきだな」

ながば独り言のよつて、つい続ける。

「これ以上、この場所にどまつていても、何も良いことはないぞ。もし行くべき場所があるなら、やはりに向かうがいい」

ヴェロンティ連合王国／王都／中央市場マーケット

「ご助言、感謝致します」

エリアドの“凍氣”にあてられたのか、商人はただ口をぱくぱくするだけの状態だった。

若者の方は、少しホットした表情をエリアドに向けた。

「申し遅れました。私はフランスといつ者です。失礼ながら、貴方も外つ國のお方でしょうか？」

温厚な物腰と礼儀正しい物言いからは、そこはかとない気品が感じられる。

「もしも、お時間がありましたら、ご助力頂いた御礼の代わりに、一献如何でしょうか？」

私の泊まっている宿の酒場は非常に良い雰囲気ですよ、とフランスは続けた。

「・・・残念ながら、私はこの国の生まれだ。長いこと異国で過ごし、最近戻ってきたばかりだから、この国の無神経さに、いまだに慣れることができぬ。・・・ただ、それだけのことだ。」

若者の問いかに、私は冷やかな表情を崩すことなく、苦々しげに言

葉を紡ぐ。

“……ちじくない。なぜ、このよつなじとに関わったのだ？”

実際レムリアと出会つてから、私は自分が少しびつ変わつてきて  
いるように感じていた。

なぜ変わつたと感じるのかは、自分でもよくわからなかつたのだが。  
・・・

「・・・お誘いはありがたいが、今はそういう気分にはなれそうも  
ない。もし“縁”があれば、どこかで会う機会もあるだろう。

・・・もつとも、この国で“私”のような者と一緒にいると、廻  
りからどのよつな目で見られるかは“推して知るべし”だがな。  
・・・私とは、これ以上関わらぬ方がいい。」

私は、その若者に興味を失つたかのよつて、馬首を返してその場  
から歩み去る。

外見的には彼とさして変わらぬ二十歳そこそこにしか見えぬ私に、  
このよつな物の言い様をされた彼が、どのように感じていたかは私  
にはわからぬ。だが、外見的にはどうであれ、その時、私はこの  
国に疲れていた。この国の濁り、濁んだ雰囲気に。

魔性の瞳 - 100 「変化」（後書き）

何時もお読み頂き、有り難うござります。おかげさまで、掲載百回となりました。今後とも面白くすべく精進して参りますので、宜しくお願ひ申し上げます。

ヴェロンティイ連合王国／王都／中央市場

マーケット

「おやおや。どうやら、不味いことを言ってしまったみたいですね。私もまだ修行が足りないなあ」

去つていくエリアドの後ろ姿を眺めながら、その若者は苦笑いを浮かべた。

「成る程、あのが噂の“魔剣士”殿ですか。やはり人の噂など当てにはならない、と言つといふですね。さてさて、非常に興味深い事態になつてきましたね、これは」

「ここにこ笑いながら独りしゃがるが、その双眸には鋭い輝きが宿つていた。

「今の状態ではお話しにもなりませんが、本人が自覚して精進した場合、その成長が楽しみですね。まあ、何れにせよ、あの“阿修羅”を帶びていて、何も起こらないという訳がありませんからね。放つて置いて欲しいと思っていても、周囲がその様にしてくれませんから。まあ、まだ判つてはいな」ようですが・・・」

「いやはや、目が離せませんねえ、とのんびり独白する。エリアドの姿が完全に見えなくなるまで見送ると、踵を返す。

「さて、と。取り敢えずは宿に戻りましょうかね。リックもそろそろ到着している筈ですし・・・」

宿に帰つて善後策を講じましょうかね などと口づさみながら、爽やかな笑顔を浮かべた若者は、人混みに消えていった。

いや。

「あの～、 “銀の枝” といつ宿に行くにはどうすればいいのでしょうか？」

道が判らなくて、迷つて いる姿が見られたといつ。

**魔性の瞳 -101 「自覚」（後書き）**

更新に間が開いてしまって恐縮です。出張続きですので、11月末まで更新が不定期にならうかと思います。宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門

王宮。ションドルの中心部にあって、王宮広場の北側に面している。円形のその広場からは放射状に大通りが市内へと伸びていく。そして、丁度真北に王宮への正門があつた。

王宮の正門は、常に近衛歩兵一個小隊が守っている。もともと、かつて王宮の正門が攻められたことが無かつた為、その警護は形骸化しつつあるのだったが。

「万事異常はありません」

型通りの報告。恐らく、近衛兵達にはそれ以外の言葉など思いつかないのだろう。表情こそ変えない乍らも、正門警護の騎士たるシコテファン・ラダノワは心の中で嘆息していた。

「了解。警護を続けよ」  
「はっ！」

同様に、型通りの指示を返してやる。それ以外の指示を受ければ、近衛兵達は混乱するだけだ。

“斯様な状態で、何か起こった時にどうするのか？”

幾度と無く繰り返した疑問である。だが、自分なりに解決策を図るにしても、誰も“革新”には無関心だ。

“これまで続いたように、これからも続く、か……”

今の乱世にあって、その様な硬直した考え方が如何に危険かこの国の大部分の者には、その事実が全く見えないようだ。

“ 考えても仕方がない、いや、斯様なことを考えるのは間違っている 何度も言われたことか ”

そして、疎んじられた挙げ句、騎士団から転属となり、正門の近衛兵の隊長という訳だ。自嘲気味の笑いを抑えると、引き続き警護の任にあたった。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門

町を抜け、私は王宮正門前の広場に出る。門には、いつもの如く警備の近衛兵たちが並んでいる。初めてこの城を訪れた時にも感じたことだが、型通りの対応しかしない、まるで人形のような兵士たちだ。

実際に“北”との戦いに赴いている兵士たちであれば、多少は違うのだろうが、もし“北”的奇襲を受けるようなことにでもなれば、この都は程無く陥ちてしまうだろう。そんなことを思いながら、当たり前のよう前に正面から門に向かう。

「・・・警備」「苦労。」

一声だけ掛けると、“月光”に乗つたまま、エリアドは悠然と門を潜つた。

番所の入り口に立つと、黙つてその人物が門を通り抜けていくのを見送る。己の行為が、些か無遠慮とも取られかねなかつたのだが、実の所シユテファンは余り頓着してはいなかつた。

“あれが、彼の魔剣士殿と言つ訳か。お目に掛かるのは初めてだが・”

成る程、と頷けるような鋭さを内に秘めている感を受ける。そん

・”

な御仁には、この平和惚けしたこの国の警備体制には苦笑すら出ないだろう。そんな想いが浮かんでは消える。所詮は、斯様な考え方こそこの国では外様なのだと、そう苦笑いしながら思うのも毎度のことだった。

アーサー・アートリム王子と、隣国ヴェルナのアン・コーデリア姫が婚姻し、全てが良い方向に動くと期待されていたのではあるが、そんなことも、実際は国の責を全て一人の肩に載せ、“後は任せた”と言つてはいるだけの構図だった。変わろうとする意識が国民に無く、どうして王と王妃の一人だけでなんとかなるうか。それを想うと、目に険しい光が宿るのを止められもしなかつた。

“だが・・・一人糸がつたところで、どうにもなるまいが・・・”

熱くなつたところで、賛同してくれる友人も同志もいない。『世こそ和すれば事も無し』と思つてることが常識と化しているこの国のこと 異端的でそぐわない考え方だけは敏感だ。

“魔国との前線に送られて果てるか。まあ、それでもこの場で朽ち果てるよりはマシなのだろうがね”

自嘲気味な笑みは癖になる。思わず口元に手をやつて、ふと見られていると感じて視線を上げた。

**魔性の瞳・103 「自嘲」（後書き）**

大幅にお待たせしてしまって恐縮です。色々と公私ともに立て込んでおりまして、年が変わるまで更新が不定期になります。何卒、宜しくお願い申し上げます。

ヴヒロンティ連合王国／王都／王宮正門

ヒリアードは、ふと、近衛兵の一人 服の装飾から見るに、おそらく隊長格の人物であろうと思えた に、田が止まつた。その瞳に、他の者には見られぬ“光”が宿っていたからだ。

“・・・瞳に、このよつな“光”を宿す者が、まだこの国にいたのだな。”

わずかに田を細めて、その男を見る。

「貴公・・・。(やは・・・)」

一瞬、やう聞ひひとつして、言葉を止める。

“・・・いや、もう十分だ。これ以上、この国と関わり合ひになる必要はない。”

自分にやう言ひ聞かせ、やうくじと顎田する。

「・・・いや、なんでもない。」

私は黙つて正面の王宮に視線を戻し、やうくじと馬を進めぬ。

魔劍士は、一礼して門を抜けていった。口にしかけた言葉は、し

かし最後まで話されることはなかつた。

“交わらぬのが命運か・・・。全ては、糸を紡ぎし女神のお心の儘に、とこうこのなのだらうな”

「」の俗っぽい考えに苦笑しながらも、ふと、視線を上げると。

“ふむ・・・”

王宮の方から、五騎の近衛騎士が笑いながら正門に向かつてくる。豪奢な衣装は、騎士正装を可能な限り華美に仕立て上げたものだ。

“着飾るばかりが騎士ではなかうつこ”

必要以上に、その身をキラキラと輝かせて、近衛騎士達は馬を進めてくる。と、自分たちに向かつてくる魔剣士の姿が漸く目に映つた。

「おやあ？ これは、舞踏会におられた騎士殿ではなかうつか？」  
「おお、そのとおりだご同輩。それも、エルド男爵様の許嫁に手を出したとか」

「許嫁？ ああ、『魔性の瞳』姫か」  
「お似合いかもしれんぞ？ 」の者も“魔剣”を帶びていつのうからな」

はははは、とあくまで爽やかに近衛騎士達は笑つた。相手の耳に、その会話が入るのを見越しての行動だった。

「何があつても、扉は開けておくよつこ。いいな」

部下に指示を出すると、シユテフアンは詰め所を出た。ゆっくつと魔剣士の後を追つ。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門

耳障りな声が聞こえてきたのは、門を抜けてすぐのことだった。無駄に豪奢な服に身を包んだ騎士の一団がやってくるのが目に入る。そのような不必要的飾りの多い衣装など、死線を潛り抜けてきた者から見れば、“無駄”どころか、敵につけられる“隙”以外の何者でもないのだが、どうやらこの国の騎士たちにはそういう考えはないらしい。

「……やれやれ、難儀なことだ。関わり合いにはなりたくない。」こちらではそう思っていても、簡単には許してもらえないらしい

ヒリアドは口の中で小さく呟く。長旅にも耐えられる実用向きの革の黒い外套ロングコートに身を包んだ私の姿は、この国では必要に目立つてゐるかも知れない。そんなことを思いながら、まっすぐ馬を進めゆく。

“ヴェラット、リグリア、ギャラン、トーナ、フルーオーか。厄介な相手だな”

魔剣士に向かってくる近衛騎士達を見やると、シュテファンは軽く嘆息した。大公家の子息が一人も含まれている。これは、彼らとの揉め事が即座に厄介事となることが約束されているようなものだつた。

“愚かな上に、氣位だけ高い。全く、始末が悪い”

シユテファンには、後に起きたであろう騒動への邂逅がまず不可避に思えた。

「やあ、魔剣士殿。ご機嫌は如何かな」

口先だけは友好的に、先頭に立つて馬を進めていた近衛騎士が口を開いた。

「おお、名乗らねば失礼か。とは言つても、我が名は広く知られているからな。当然知つてはおろづな」

「あまり社交的な御仁ではないだからな。知らないかも知れないぞ、ヒューバート」

「ははは。その様な相手にも寛容な態度で接する。それが近衛騎士としての慎みよ」

傲然と嘯くと、その近衛騎士はエリヤドに対し、サー・ヒューバート・ヴェラットと名乗つた。

“やれやれ・・・始まつたか。後は、魔剣士殿が賢明に振る舞ってくれることを祈るばかりだな”

いつも通り無表情なシユテファンの顔からは、如何なる想いがその心に渦巻いているか、知ることは難しかった。

ヴォロントレイ連合王国／王都／王宮正門

『やあ、魔剣士殿。ご機嫌は如何かな。』

ヒリアードは馬を止め、無表情に彼らをじりじりと一瞥する。

「・・・問題ない」

近衛騎士の言葉に応じたのは、何の感情も籠もっていない平板な声。むろん、彼らの出自など知るはずもなかつたし、また知りたいとも思つていなかつたのだから、その後の彼らのセリフに異論など挟めようはずもなし。

「・・・で、そのサー・ヒューバート・ヴォラット殿が、私に何か用でもありますか？」

ヒリアードはそのよつてに続けた。

「日も暮れできましたが、夕食を召し上がりにいらしたのかな、魔剣士殿は？」

ヴォラット卿は、口調に丁寧に保つて言った。

「我らとて、麗しの姫君との優雅な食事、と洒落込みたいのはやまやまながら、如何せんこれから市中警邏の仕事が待つてゐる

「左様。身分が自由の方が羨ましいことですね」

ヴェラット卿の言葉に和する様に、隣の近衛騎士が呵々大笑した。

「しかしだぞ、方々。我らの働きがあればこそ、魔剣士殿の様な御仁も枕を高くしておられるのだ」

「ヒューバート殿の言う通りですな。まあ、せいぜい人生を謳歌することですな。我らがしつかり護つて上げる故に」

徐々に、口調に侮蔑的な色合いが混ざっていく。と、その時。

「斯様なところで、何を無駄口を叩いているのか！」

裂帛れいぱくの気合いを込めた言葉が近衛騎士達を打つ。飛び上がる様に振り向いた彼らに向かつて、一騎の騎士がだく足で近づいてくる。

「た、隊長つ」

先程までせせら笑うかの様だったヴェラットが一転して情けない声を上げる。

「貴殿ら。疾うの昔に中央市場に赴いている筈ではないのか？ このような所で、何を油を売つている？」

声を発したのは、はつとする様な女性だった。小柄ながら、瞳を輝かし、裂帛の勢いを言葉に込める気迫は、大の男五人を軽く飲む。

「そ、即刻、現地に赴きます」

「行け。私を失望させるな」

「ははつ！」

馬に拍車を当じると、五騎の近衛騎士は脱兎の如く、その場を立ち去った。

「揃いも揃つて・・・」

舌打ちしそうな女性騎士に、シユテファンは近づいていった。

「バーナード卿、良いところへいらっしゃいました」

「ラダノワ殿か。またもみつともないとこ見せたな」

バーナード卿と呼ばれた女性騎士は苦笑しながらシユテファンに親しみを込めた笑みを向けた。

「貴公にも迷惑を掛けた様だ。部下が申し訳ないことをした」

丁寧に頭を下げると、バーナード卿は静かに言つた。

ヴェロンティイ連合王国／王都／王宮正門

「……いや、問題ない。彼らが口にした通りのことをしているのであれば」「は

ヒリアドは表情を崩すことなく、平板な声でそう応じた。

「……得体の知れぬ“流浪の剣士”上がりの新参者が大きな顔をしていると思えば、多少の皮肉を言つてみたくもなる。……まして、彼らは生死を賭した本当の戦いの場を知らぬ。……わざわざ、貴女あなたに頭を下げるつもりよつたことではない。」

ヒリアドは静かにそう続けた。

「話が分かる御仁だな、貴公は」

印象的な輝きを放つ瞳を僅かに細めと、独り言のよつた言葉が漏れる。

「存外、流されている噂こそ、無責任なものかもしかんな。すまぬ、名乗るのが遅れた。セイ・フロム・バーナードと言つ。王陛下より直々に下命され、近衛騎士隊を預かっている」

改めて頭を下げ、丁寧に名乗った。

「部下の無礼な態度を許容して欲しいとは言わぬ。先のことは誠に申し訳がなかつた。今後、斯様な問題があれば、遠慮無く私に言つ

て欲しい」

言葉と態度に、真摯な姿勢が良く顯れていた。

エリアードはしばし相手の顔をじっと見て、ゆっくりと重たい口を開いた。

「……いや。 わきほども言つたが、問題はない」

少し考えて、低い声でこう続ける。

「……エリアード・ムーンシャドウ。 星々と放浪者の神の追随者セレスティアンにして、 “阿修羅” の使い手」

それから、視線をわずかにずらして、傍らに立つもう一人の騎士の方を見る。

「正門衛士の隊長の任にあります、ラダノワと申します」

視線を振られたシユテファンは短く名乗つた。それを聞いていたセイは、僅かに片眉を上げたが、何も言わなかつた。

「私は任務がありますので、これで失礼致します」

一礼すると、踵きびすを返して正門に向かつて歩き出した。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門

「・・・衛士の警護隊長？」

その男の言葉に、エリアドは口の中で小さく呴いた。その呴きには、微かだが、不審気な音色が混じっていた。彼の身のこなしは、わざほどの近衛騎士を名乗った者たちより数段上に思えたからだ。

「・・・」

エリアドは暫し、詰め所に戻つてゆく彼の後ろ姿を、じつと見送つた。

「・・・どうやら、わざとらの言葉は撤回しなくてはならぬようだ。・・・やはり、この国には、いろいろと問題があるらしい。・・・私が口を挟むような問題ではないのかもしれないが。」

ながば独り言のように呟く。

「・・・セイ殿と言つたか。私も、これにて失礼させていただく。・・・おそらく、人を待たせているかと思うので。」

もう言つて、彼女に一礼する。

「・・・」

黙して歩き去るシユテファンの背を見つめるセイの瞳には、鋼の輝きが宿っていた。

「世の中には、不条理と感じる事柄が多く存在する。残念だが、動かせぬ事実だ。だが、苦言や不満だけを呈し、己は何もせぬ様な手合には、国に悶着を起こす手合だと向ら変わりはない」

夕闇が迫る空を仰ぎ見る。

「どの様な形であれ　　“国を護る”責を、誰かが負わねばならぬ。その行為が正当に評価されなくとも、それが理由に己が為すべき事から逃れていたら、それは己に対する裏切りだ」

初見の貴公に語りすぎたか、と苦笑いを浮かべると、エリヤドニセイも応礼した。

「愚かあれ、なんあれ　　「己が己であれば良い」

最後にさう言葉を詰ふと、馬を返して正面へと戻り始めた。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門 王宮

セイの言葉に苦笑しつつ、エリアドは王宮に向かつて馬を進めた。自然、セイと馬を並べる形になる。

「……人には、それぞれ“為すべき役割”とでも言つよつなものがある。……國に仕える」ともまた然りといふことなのだろうな。……この國に戻つてきて、やつと、少しづつわかつてきただが

「……眩くよにエリアドは言つ。その口調には、何處か老成した響きがあった。

「……あるいは、己は、<sup>おのれ</sup>そうした行為を正当に評価できる人間でありたいと思つてしまふのは、己の行為が正当に評価されていないと感じていることの裏返しだったのかもしれないな」

冷厳とも思える程の表情の口端に、自嘲気味の笑みが浮かぶ。

「……この國に戻つてきて、よかつたのかもしれぬ。……この國を出る前にはよく見えていなかつたいろいろなことを、十年以上の“時”を隔ててあらためて見直してみると、これまでとはまた別の理解が生まれてくる。……そのことだけをとっても、陛下や……（やや躊躇いがちに）……レムリア殿には、感謝しなくてはなるまいな」

“……そして、星々と運命の女神の導きに……”  
（イヌタス）

エリアドは夕闇が迫りつつある空を見上げると、心の中で運命の紋様を織りなす女神に短い祈りを捧げた。そんな下界の祈りの声に応えるかのように、黄昏の空に輝く一番星が煌めいて見えた。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門 王宮

黙つて空を見上げる相手に会わせて、セイは並足で王宮正面玄関に向かう。

“魔剣士と言われているが・・・まだ若いな。その割には老成した口調で話すが・・・”

それは自分も同じなのだろう、と思い返してセイは人知れず苦笑していた。自分が説教じみた事を多々言つところが、同僚のハウによくからかわれる一因なのだろうが。

「己」が内に真理を見い出し得るのは幸せなことだ。その想いを大切に育むと良い。」

そうは思つても、やはりそんな事を言つてしまつ辺り、やはりセイには杓子定規の嫌いがあるのだろう。そんなセイの言葉に対して、低い笑い声が出迎えた。

「相変わらずの説教上戸だな、セイ」  
「ハリーっ！」

正面玄関から背の高い騎士が歩いてくると、エリアドとセイを出迎えた。褐色の髪に褐色の目。人をおちよくなした様な笑みが口端に浮かんでいるのが全体的に不真面目な印象を与えていた。

「はじめまして、だな。私はハリー・ハウ。貴公の横にいるバーナ

ード卿の同僚だ。よろしくな

「ハリー、こんなところで何をしてる？ 今日は非番だったのではな

いか？」

「まあね

苦笑しながら頷くと。

「そこの御仁を迎えてに来たのさ。サー・ムーンシャドウ。私と一緒に来て貰えないかな？」

「何處に連れてく氣だ？」

「気になる様なら、セイ。お前さんも一緒に来たらどうだ？」

いつもの揶揄する様な口調にかちんと来たセイは怒りを込めて言った。

「無論、同行する。」

ヴーロンティ連合王国／王都／王宮正門 王宮

実のところ、セイがその時のエリアドのことを「若い割に老成した口調で話す」と思ったのも無理はなかつた。この時、コモン暦556年生まれのエリアドの実年齢は二十九歳だつたのだ。しかしながら外見的には、誰が見ても二十歳そこそこの若者にしか見えないこれはどうしてなのか？

・・・エリアドは、以前の旅の途中で、とある廃墟に巣喰つていた幽鬼との戦いで受けた老化を治すため、手に入れた“若返り”的魔法の秘薬が少しばかり効き過ぎてしまい、今度は逆に元の年齢よりも若くなつてしまつていたのである。だから、そのことを知らぬセイがそのように感じたのは、ある意味至極あたりまえのことなのであつた。

『サー・ムーンシャドウ。私と一緒に来て貰えないかな？』

背の高い騎士の言葉に、エリアドは小さくため息をつく。

「・・・サー・ムーンシャドウ（ムーンシャドウ卿）か。・・・陛下には、丁重に、『その称号は、辞退させていただきたい』と申し上げたはずなのだがな。・・・と、ここで貴公らに言つたといふで詮無きことか。」

その口調に含まれていたモノを感じて、セイの態度が目に見えて強張る。それを余所に、ゆっくりと馬から降りたエリアドは、少しだけ口調を改めて続けた。

「・・・わかつた。その件については、もう一度、私から直接、陛下に申し上げることにじよ。・・・で、ハウ卿。私はどちらに行けばよろしいのか？」

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮正門 王宮

「おつと、それは失礼

ハリーはおや、と言いつ顔をすると。

「では、差し支えなければエリアード殿と呼ばせて貰おう。ああ、私の事は“ハリー”でも“ハウ”でも、何と呼んで貰つても結構だ」「お調子者め、と言いつような咳きが傍らからしたが、ハリー・ハウは何処吹く風だった。

「さて、と。謁見の間に同行して貰いつように言われている。レムリア姫様も一緒におられるよ。いけ好かない御仁も一緒にねえ」

「これも運命かな、と肩を竦めて苦笑する。

「エルド男爵もいるのか」

「ああ。やつこさん、何か噴火寸前だつたけどな」

「虚偽威しであろう

「身も蓋もないが まあ、その通りだな」

それぞれの性格なのだろうが、碎けた口調で話すハウとは対照的に、その堅い口調を崩さないバーナード。打ち解けていふとは言えるのだろうが。

「……こちらとしても、そう呼んでもらえる方がありがたい。」

二人の漫才じみた遣り取りに些か頭痛を感じながらも、エリアドはハリー・ハウと名乗った騎士の言葉にそう応じた。そのハリーは、謁見の間に同行して貰うように言われている、と続ける。

「……謁見の間、か。了解した」

エリアドはほとんど表情を変えずにそう応じて、ゆっくりとそちらに向かって歩き出す。

互いにヴェロンティ三騎士と呼ばれる二人が深い信頼関係で結ばれているであることは容易に見てとれた。彼らのような人物が“上”にいる間は、この国もそう簡単に滅びはしないだろうとも思えたが、同時に、彼らのような人物が“上”にいるにもかかわらず、この国があちらこちらに見え隠れする退廃の兆しは、この国を覆う事態の深刻さを示しているのではないか……。エリアドには、そんな風に思えてならなかつた。

ヴェロンティ連合王国／王都／王宮 謁見の間

エリアド、セイとハリーの三人は、巨大な白銀の両開き扉が三つ並ぶ王宮正門に近づいていった。全てを白い大理石で作られた王宮は非常に壯麗な姿であり、“中原の宝玉”と呼ばれていることも頷けるところだつた。

三人は正門を固める近衛騎士に馬を預けると、一つだけ開いている右の大扉を潜つた。中は高い天井のホールになっており、正面には上に続く大階段となつていた。セイは躊躇無くその階段を上がりしていく。その勢いに薄い笑みを浮かべてハリーが、一步遅れてエリアドが続く。

階段を登り切ると、そこは両側に石の円柱が並ぶ莊厳な回廊になつていた。ハリーが足を少し早めるとセイに追いつき、エリアドが二歩後を追う形となつた。やがて、両開きの巨大な扉にぶつかると、二人はそこでその歩を止めた。

「直衛の近衛騎士達がいないねえ」

「・・・」

何か並てこするようなハリーの言い方に、額に青筋を立てるセイ。

「今日はベルムントの隊が当直だ」

「影も形も見えないけど？ 定時退城かな？」

「黙つてろ。」

おーこわ、と小声で言つとエリアドに笑つてみせる。顰め面をして、何かを考えているセイ。

「じゃ、開けるかな」

「ちよつと待て」

ハリーの手をセイが止めた。

「どうした？漸く異常事態を感じたかい、セイ

「貴様もそう思うのか」

「ああ。幾らウチの近衛騎士がボンクラでも、持ち場を離れはしないでしょ？ ということは……」

〔己〕の剣の柄に手を掛けると、セイは静かに言った。

「一人とも。中に入るが」

「りょーかい。では、行こうか」

ハリーが扉に手を掛けると、大きく開け放つた。

謁見の間に近づいてゆくにつれ、あたりに奇妙な気配が漂い始め  
る。

「……」

“……嫌な気配が漂つているな。……何かまずい」とでも起き  
てこらのだらうか。”

起こうり得る事態について、いくつかの可能性がエリアドには思  
い浮んだ。……が、それらはどれ一つとっても、あまり考えたくない

い可能性だった。そのよつた事態になつてゐるくらいなら、いつそのこと異界の魔王でも降臨している方がありがたいくらいなのだが。・・などという甚だ不穏なことを考えながら、しかし、実際のところ、そのような（異界の魔王が降臨しているというような）可能性はさほど高くあるまいとも感じていた。おそらく、この場で起これ得る中で最悪の可能性は“阿修羅”的暴走であり、二つめはレムリアの“夢見”的暴走であろう。そのよつた状況になつてさえいなければ、まだマシな方だと言わねばなるまい。

『二人とも。中に入るぞ。』

『りょーかい。では、行こうか。』

「・・・了解した。」

エリアードは一人の言葉にゅつくり頷き、開いてゆく扉の奥をじつと見た。

ヴェロンディ連合王国／王都／王宮 謁見の間

大きな両開きの扉の向こうは、五百人からは入れそうな大広間となっていた。一番奥の壁には、壁一面を覆うフリヨンディとヴェルナの連合旗、通称“盟約の旗”と呼ばれる旗が天井から垂れ下がっていた。

「……私奴は、私に与えられた権利故に申し上げているのです」

甲高い、どこか神経質な声が広間に響く。そして、それに応じる静かな声も。

「貴公の権利については、十分に考慮をすると申している」

僅かながら苛立ちを口調に滲ませてヴェロンディ連合王国国王アーサー・アートリムが応えた。普段、冷静沈着で知られている名君にしては、些か珍しい態度である。

「ならばっ！ 約束の儀に従つて下さいませ！」

「斯様に冷静さを欠いては、纏まる話も纏まらなくなりますぞ」

静かな、何処か揶揄する様な合いの手。だが、エルド男爵は諦めきれないのか、尚も抗弁しようとする。

「しかし」

「……おや。何方からいらしたようですね」

その、見知らぬ人物からの言葉に臆することもなく、セイとハリーは歩を進めていく。王座の前には、国王アーサー・アートリムと、エルド男爵、そして非常に背の高い、黒衣の貴族風の男がいた。

「只今戻りました、陛下」

丁寧な騎士礼をするハリーとセイ。アーサーは一人に頷くと。

「サー・ムーンシャドウ。急なところ、良くなってくれた」

挨拶するアーサーの傍らで、おつかなびっくりエリアドの方を伺うエルド男爵を庇うかの様に、貴族風の男が一步前に出た。片眉を微かに上げると、男は口を開いた。

「エルド男爵の所で食客をさせて貰っている、ラ・ルと言つ者だ。高名なる騎士の方々、特に“魔剣士”殿と面識が持てて光榮に思つ

お見知りおきを、と如何にも懇懃に名乗る。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

開いた扉の向こうは、少なくとも私が想像した“最悪の事態”にはなつていないうつであつた。実際にどうだつたかは、ともかくとして・・・ではあるが。しかし、少なくとも、あまり近寄りたいとは思えぬ“嫌な”気配が漂つていたことは事実だと言わざるを得まい。そして、その雰囲気を作り出している（よつにも思える）奇妙な気配の持ち主　背の高い騎士風の男が慇懃に名前を名乗る。騎士風の姿をしているにもかかわらず、エリアドにはその男が見た通りの“騎士”だとは到底思えなかつた。

“・・・ラ・ル”

その響きには、得体の知れぬ禍々しさがあつた。男の視線を受けとめ、少しの間、視線を交わす。それから少しだけ視線をずらして、こう続けた。

「・・・陛下。その称号は、『辞退させていただきたい。』と申し上げたはずですが。」

「不快な気分にさせているのであれば、済まないと思うが・・・

アーサー・アートリムの表情には微苦笑が浮かんでいた。

「要らぬ、と云つのであれば、取り上げれば宜しいではありますか

不羈にも口を挟んだのはエルド男爵だつた。その傍らにはラ・ル

と名乗つた男が冷笑を浮かべていた。

「エルド男爵。王陛下がエリアド殿と話されている最中だ。口を挟むなどとは無禮であるうー！」

礼に失したエルド男爵の態度に噛み付くセイ。相変わらずだねえ、とばかりに肩を竦めるハリー。

「黙れつ！ たかだか騎士風情が大公家の者に意見することこそ失礼千万つ！」

「何だとつー！」

エルド男爵の一言は、曲がつたことが大嫌いなセイの琴線に触れてしまつた。こうなると、烈火の如く怒れるセイを止めるのは至難の業なのだが、しかし。

「ふつ、大人げなく騒ぐ方こそ無様よの」

言いながら、セイに視線を振るラ・ル。途端、セイがピクристも動けなくなつた。軀が小刻みに震えているのは、意志の力を振り絞つて未知なる力に抗おうとしている為なのか。

「はつ、いい様よ！ いつもの勢いはどうしたー！」

エルド男爵は、一つ教訓を垂れてやろうとばかりに手を振り上げた。同僚を庇おうとハリーが前に一步でよつとした。その時。

「御前であらせられるぞ。双方、控えい」

深みのある威厳に満ちた声に、エルド男爵の振り上げた手がピタ

りと止まる。

「ほお・・・これはこれは」

田を細めてほほえむラ・ル。謁見の間にいる誰よりも背の高い戦士が、槍を手に静かな足取りで室内に入ってきた。

「陛下。遅くなり申した」

「良いところへ来た、アクティウム」

心持ち安堵の表情を浮かべるアーサー。丁寧にアーサーに頭を下げると、一転厳しい表情で周囲の顔を見回した。

「王陛下の御前である。双方、品位を落とす真似は控えよ。バーナード、ハウ、騎士としてもっと自重せよ。エルド男爵。大公家の特権は国が律を遵守してこそ在るものです。ご存じないとは言わせませんぞ」

「そ、その様なこと、言われないでも判つているつ！」

「ご存じであれば結構。では、時鐘も鳴った今、何を為すべきかもお判りであろうつ？」

「む、無論だ！」

ラ・ル殿、引き上げるぞ！ そう叫ぶと、最低限の礼をしてエルド男爵は足音も高く立ち去つた。薄く微笑んだラ・ルなる人物も、莫迦丁寧に会釈するとエルド男爵の後を追つた。

「王陛下。些かお騒がせしてしまつたようですね」

「いや、アクティウムが丁度良いところに来てくれて助かつたよ」「勿体ないお言葉」

その長身を折り曲げる様に答礼すると、ジロコとセイとハリーを見込んだ。

「エルド男爵の挑発に乗るではないと言つたであらう? セイ、ハリー」

「しかし、アクティウム! あの様な不法が罷り通つて良いといふことでは無いでしよう!」

「私も、セイの意見に賛成ですね」

まあ、感情的になつてしまつのはセイも反省しなければなりませんがね、と余計な言葉を付け加えて、セイにギロリと睨まれる。

「その辺でいい、アクティウム。それより、契那は如何した? いつも一緒にありますわ、王陛下」

アクティウムのマントの影から、小柄な少女が姿を顯した。優雅に、実に優雅にお辞儀する。

「王陛下、お客様の方、セイ様、ハリー様、『きげんよ』  
「久しぶりだな、契那」  
「こんばんわ、契那ちゃん」

真面目な声と不真面目な声が挨拶を返す。

「そこにいたのか、契那。良かつたら後でレムリアの所に寄つてあげて欲しい。義妹も喜ぶだらう」

「はい、王陛下」

鈴が鳴る様な澄んだ声で、契那と呼ばれた少女は笑顔で応えた。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「・・・」

暫しの間、エリアドは最後に入ってきた深みのある声の持ち主と他の者たちのやりとりを、じっと見つめた。そのやりとりが終わると、その人物と彼の陰から現われた少女（契那）に軽く一礼だけして、再びアーサー・アートリム王に向き直った。

「・・・不快なわけではありません。・・・が、その件については今一度、考え方を直していただきたく・・・」

少しだけ間をおいて、エリアド静かな口調で続けた。

「・・・かつて、私は“この国に仕え、騎士として生きる”道を捨て、”夜空に輝く星々の下、世界を彷徨う”道を選んだ者です。その私が、陛下からそのような称号をいただいたのでは、”一命を賭して、この国に仕える”道を選び、北との戦<sup>いくさ</sup>の中、行方知れずになつた我が兄に、顔向けができませぬ」

エリアドは淡々と語つた。その表情からエリアドの真意を読み取ることは、もとより感情を表すのが乏しい故、非常に困難だつた。直情的で真面目なセイはその憤りを表情に隠さず、対照的にハリー・ハウは面白そうな笑みを浮かべている。威厳に満ちた大戦士、アクティウム・エパミノンダスは無言で国王の脇に立つ。

ただ、偉丈夫アクティウムの傍らに立つ契那と呼ばれた華奢な少女のみが、僅かにその大きな瞳に不可思議な輝きを浮かべてエリア

ドを見つめていた。

ヴェロンティイ連合王国／王都／謁見の間

「ふむ・・・どうしても嫌だと言つことであれば、位返上も止む無しと思うが・・・だが、そうなると、王宮への入城もすんなりは行かなくなるな?」

アーサー・アートリムの最後の疑問形は、アクティウムに向けられたものだった。

「左様。サー・ムーンシャドウ、王陛下の仰る通り、貴殿の嫌がる“位”が貴公の宮殿での身分を保障しておる。本意では無からうが、ここは事情を理解する必要があろうかと思うが、如何か?」

無論、レムリア姫様の為もある、とアクティウムは付け加えた。その間に、アーサー・アートリムも頷く。

「エリアド。先程、レムリアにもはつきり言われたのだが 私は、君がレムリアにしてくれたことによても感謝しているのだよ。国元には帰つてきたが、あの娘は全く笑うことが無かつた。レムリアを見る周囲の目は、邪なものであつても、優しいものではなかつたらだ。だが、そんな不憫な娘に、君は笑顔を取り戻してくれた。そのことに関する礼の形、と言つ訳ではいけないだろ?」

真摯な言葉だった。真剣な表情で、アーサーはエリアドの目をのぞき込んだ。

「あの・・・差し出がましい事とは存じますが…」

澄んだ声が、皆の注意を喚起した。アクティウムの傍らに立つていた華奢な少女は、優しげな笑みを浮かべて言った。

「国の公式なお客様である“自由騎士”には、王陛下しか裁定できません」

「そうか。契那の言う通りだな。エルド男爵が圧力を掛けようとも、自分では如何ともしがたいということだ」

田を細めて、養い子に笑みを向けるアクティウム。

「恐れ多くも、国民全てに敬愛されている王陛下に圧力をかけるなど以外の外、ということを考えると、エリアド殿、これは安全保障と言つてもなるんじゃないかな」

面白そうな口調はハリー・ハウ。その横で、不正なことがあったら自分が成敗してやる、とセイが息巻く。

「やつじつことだよ、エリアド。皆が言つたことを理解して貰えたかな？」

「ここにひと笑つてアーサーが言つた。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「・・・」

時々この人の腹の中には、黒い尻尾の生えた悪魔が棲んでいるのではないだろうか、と思うことがある。にこにこと微笑いながらそのままに言う彼（アーサー王）の顔は、実に楽しそうだった。そうでありながら、時折り見せる真摯な眼差しは、けして彼が一時の想いや感情に任せて言葉を発しているわけではないことを示している。いや、彼だけではない。かつて、私が捨てたにもかかわらず、ここにいる彼らは、私のことを迎え入れようとしてくれている。しかし、そして、だからこそ、彼らの言葉に甘えるわけにはゆくまい、とも思えるのだ。

“・・・彼女に出会う前の私であれば・・・、そして迷つことでもなかつたのだろうがな。”  
レムリア

王宮への出入りがどうなるうが、ヴァルガー・・・エルドという鼻持ちならない貴族がどのような圧力をかけてこようが、おそらく気にもとめなかつたであろう。しかし、彼女とのことを言わせて初めて、私は自分の中に“躊躇い”のようなものがあるということに気づいた。・・・いや、気づかされた、と言つべきか。そう、その時の私の中には、間違いなく“躊躇い”があつた。

「・・・」

しばし瞑目して考え、言葉を探しながらゆくつくつと口を開く。

「・・・陛下。・・・“灰色の預言者”殿から“阿修羅”を托された者として・・・、私には、為さねばならぬことがあります。・・・おそらく、レムリア殿に、“夢見”として、為さねばならぬことがありますように・・・。

けして、称号をいただくのが嫌だ、といつわけではないのです。・・・しかし、そのような称号をいただいても、私には、この国のために・・・、レムリア殿のために・・・、何かできるほど長い時間、ここにとどまることはできない・・・。

そして・・・、何もできないにもかかわらず、そのような称号をいただくのは、心苦しいのです。」

少し間を置く。

「・・・レムリア殿との出会いは、・・・私にとって、生涯忘れ得ぬでき」となるでしょう。・・・ですが、それでも、私には、この国にとどまることはできないのです・・・。」

自分の心の中に抱えた“想い”とは裏腹に、私はそつと葉を選ばなければならなかつた。表情にこそ出しあしなかつたつもりではあるが、しかし、心中の葛藤を彼（彼ら？）から隠し切れると思つていたわけでは、決してない。

**魔性の瞳 -118 「苦笑」（後書き）**

今回は、ヒリアド視点からお送ります。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「ムーンシャドウ様。貴方さまは何を迷つていらつしゃるのでしょ  
うか？」

その言葉は、春の暖かさを帶びていた。互いの間の距離をそつと  
詰めると、契那はエリアドの正面に立つた。

「“人”が人として、その生の間に為せることは少ないかもそれま  
せん。けれども、どれくらい真剣に、どれくらい真撃に生きたかど  
うか。そのことが、闇への誘惑を内に秘めてしまつてはいる“人”  
で在ることへの救いとなるのでは、と思います」

貴方さまの苦惱もきちんと理解していないわたしが、差し出がま  
しいことを申し上げてました、とその少女は言葉を結んだ。碧がか  
つた灰色の瞳が、じつとエリアドを見つめている。そして、その瞳  
の奥には、長く忘れていた心の平安が見え隠れするよつた気がした。  
荒んだ心を和らげるような微笑みを浮かべると、少女は深々と一礼  
した。

「……どのくらい真剣に生きたかが、“人”である」との救いに  
なる？」

エリアドは、少女の言葉を呟くよつとく返す。暫し瞑目して、  
天を仰いだ。

その言葉は、ヒリヤードにとって、あたかも闇の中を照りひし玉や一  
条の光輝であるかのように思えたのだ。

「……契那殿、と申されたか。感謝する。……その言葉、しか  
と胸に刻み込んでおく」とじつよひ。

ヒリヤードはアーサー・アートリーム王に向を直すと、斯様に続けた。

「……陛下。申し訳ありませんが、『称号』の件については、  
今しばらく考える時間をいただきたく。」

小さく一礼して、あたりをちらりと覗廻す。

「……ヒリヤード、陛下。……私をお呼びのことでしたが?」

“……わたくしハウ卿は、レムリア殿も一緒におりたるよつなこ  
とをと言つてはいたが……”

そんなことを思ひながら、アーサー・アートリーム王の言葉をじつ  
と待つ。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「つむ、けだし賢者の名言かな」

「まむまむ、と契那の頭をに手をやりながら、アーサーは笑った。長身の王と並ぶと、小柄な契那は頭一つ以上の身長差がある。そんな王も、アクティウムに比べれば背が低いのだが。

「称号の件に関しては、『思慮深い』形で考えてくれると助かるな。まあ、無理強いも出来ないけれどね」

「それでも、陛下の好意に度を超して甘えるでなけれよ、サー・ムーンシヤード」

傍らに戻つた契那の背に手を遣りながら、針を刺すアクティウム。

「ところで 夕食会を行ひ聞き及んだのですが？」

「ああ、その為に諸君を呼んだのだよ。主賓はエリアドとレムリアだけどね」

勿論来てくれるだろ？ とアーサーは思い出した様にエリアドに向かつて付け加えるとこいつと笑つた。

「“鈴の間”に準備を整えているからね。今日は何が觀られるだろうね」

「……夕食会、ですか。」

エリザベスは小さくため息をついて、そう聞いて返した。

「……もし辞退させていただいてもかまわないのであれば、辞退させていただきたい。……というのが、正直なところではあります、……ですが、……ですがに、わざわざわけにはいかないでしようね。」

一瞬、幾つか断る口実を考えてはみたのだが、結局エリザベスは諦めてそう応じた。そして、その話題を打ち切るかのように口調を変えてみる。

「……ところで。一つお教えいただいてもよろしくですか？」

少しだけ間を置いて、アーサー王の許しを待つ、エリザベスの口に続けた。

「……わきまえ、男爵閣下に同行していた御方は、どのような方なのでしょう？　もし御存知の方がおられるのであれば、お教えいただきたく」

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「貴公・・・」

エリアドの言葉を聞き、セイの眉間にには日に見えて青筋が立つた。それを、目線で制するアクティウム。ハリーは薄く笑つて状況を観ている。

「おや。お気に召さないか。」

残念だけど、無理強いはいけないからねえ、ヒアーサーは一人ごちる。

「仕方がない。それでは、夕食会はまたの機会にするとしようが。お？」

謁見の間に、近衛騎士が一人入つてくると、アーサーに深々と一礼する。

「王陛下。騎士同盟よりの使者が参つております。王陛下への謁見を願い出でおりますが、如何致しましょうか？」  
「判つた。こちらへ案内する様に」  
「はっ！」

一礼して騎士が退出する。

「アクティウム、貴公はここに残つてくれたまえ。セイとハリーは

エリアード殿を頼む  
「はい、お任せを」

暗雲を孕んだセイに代わってハリーが答えると、アーサーに一礼して、外に出る様に一人を促した。

一礼してハリーに促されるままに外に出る。正直、意外ではあった。夕食会とやらについて、アーサー王がいつも簡単に引き下がるとは思っていなかつたからだ。

“……とはい、この代償、けして安いものではなさそつだがな”

隣にいるセイの表情にそんなことを思いながら、こう続ける。

「……済まないが、レムリア殿にお会いできるか伺つてはもうえまいか？ 差し支えなければ、ときほどの預けものをお返しいただきたいのだ」

ヴェロンティイ連合王国／王都／謁見の間

「姫君に逢つだと・・・」

振り返ったセイの双眸には、剣番な輝きが宿つていた。爆発しそうなセイを見ると、後から歩いてきたハリーは同様に足を止め、徐に壁に寄りかかると目を閉じた。

「如何なるア見で、その様な要求するのか。貴公は、自分が王陛下にどれだけ礼を失した言動を取つたか、理解しているのか？」

怒氣を孕んだ口調で、セイは続ける。

「あまつせえ、先程“氣が乗らぬ”と白らが断つた相手に逢つだと？ 貴公は礼節といつもの理解しているのか？」

ぐるりと身を翻す。マントがふわりと揺れ動く。

「案内など、私は」免被る。常識も知らぬ者を姫君の元に案内しては、彼の男爵を案内するのも同じだ。失敬する！」

一言も口を挟む余裕を与えず、足音高く拍車を鳴らしてセイはそのまま立ち去つた。終始無言であったハリーは、セイの姿が廊下の角の向こうに消えると、よつこりしじょと壁から身を起した。

「まあ、ひじこ反応ではあるけどね」

肩を竦めるとハリーはひとりごちる。面倒事は、出来れば「遠慮願いたいんだけどねえ、と呟いた後。

「責任感や礼節を説くのはワタシの仕事じゃないんだけどね。まあ、こうなっては仕方がないかな。エリアド殿、少しでも自由騎士としての責任を感じるなら、取るべき行動がある筈だよ。おっと、『好きで自由騎士に成った訳でもない』という戯れ言を言つのは止めようね。実質的に権利行使している今、その様な発言は本末転倒だつて事くらいは理解しているだろうからね」

薄い笑みが、眞面目か不眞面目か判らない表情を彩る。

「今ままだと、『最低ヤロウ』の位に定着つてことになるね。件くだんのお貴族様と変わらないよ、それではね

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「……やれやれ。セイ殿を完全に誤解させてしまったらしいな。・  
・・夕食の招待を受けることと、姫君にお会いして、預け物をお返  
しいただくことは、別の問題だと思っていたのだが。・・・“礼節  
”というものは難しいものだな。・・・できるものなら、そういう  
ややこしいものとは無縁でいたかったのだが、今となつてはそういう  
言つていられないということか」

ハリードはは小さく息を吐くと、一転、真剣な表情でこう続けた。

「……とはい、あまりことを長引かせて、レムリア殿の負担を  
大きくしたくはない。・・・ハリー殿、今さうで申し訳ないが、自  
由騎士の称号も、夕食へのご招待も、有難く受けさせていただきた  
い。と陛下にお伝えいただけまいか。それと、もし御存知であれば、  
レムリア殿が今どちらにおられるか、ぜひともお教え願いたい」

深々と頭を下げて頼み込む。

「……実は、さきほど、姫君に“太刀”を一振りお預けしたのだ。  
・・・本来なら、けして他人に預けるような代物ではないのだが・・  
・。それが必要になるかもしれないと思えたのだ。・・・おそらく、  
持ち慣れぬ物であることにも加え、長時間あの“太刀”と共にいる  
のは、いかにレムリア殿とて、かなりの負担になるかと思われるゆ  
え。・・・どうか、お願ひ致したく。」

その時エリードが見せた表情は、それまで見たことがないくらい

真剣なものだつた。

そのエリードの言葉を聞いて、ふう、とハリーは息を吐く。

「まあ、誰にでも事情はあるつてことだらうがさうね」

寄りかかっていた壁から身を起すと、苦笑いを浮かべた。

「わかつたよ、仲立ちはしよう。と言つたが、それでもしなければ事態は収まらないだろうしね。おつと、セイの怒りを解くのはその中には含まれていなからね。大体、間接的に話したら、セイの怒りを煽るばかりだよ」

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「すまないが、宜しくお願ひする」

ふう、とエリアドは小さくため息をついた。

「むりん、セイ殿には私から説明するつもりだが・・・」

言葉尻を濁す所に、彼の迷いが感じられた。

“さて、どのように説明したものやら・・・”

エリアドには、セイを納得させられる自信などあらうはずも無かつた。

しかし、現時点の最大の心配事が“阿修羅”を預けたレムリアの安否であることを考へると、たのえ今解決策が思い浮かばなくとも、すぐに行動したいと言つ想いが強い。

無論、全てが単なる杞憂に過ぎないのかもしぬないということも承知してはいたのだが、エリアド自身も不思議なくらいレムリアのことが気になっていた。

「物事を複雑に考えないことだよ。誠意を持つて当たれば、相手も誠意を持つて返してくれるだろ? だからね。逆に、邪念や打算が混じれば、眞く行くものも眞く行かなくなるわ」

ハウはそういうと、思案に暮れるエリアドを先導するように歩き始めた。

「不思議なことにね、セイはそう言つた邪心や邪念を的確に把握してしまった。お陰で、セイに正義だと認められることは、ここでは非常に高く評価されるつてことだ。これは、あの男爵様とて例外と主張する」とは出来ないんだよ」

まあ、余人であればいざ知らず、私利私欲つてものが欠落してゐるあの潔癖お嬢さんだからなんだけどね、とハリーは笑つて言つた。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「・・・なるほど」

エリアドはハリーの言葉に小さく頷くと後に続いた。

「セイ殿には、正面からぶつかってみるしかなさそうだな。・・・それでダメなら、私もそこまでの人間、ということだ」

唇の端を歪めて小さく微笑う。

「ハリー殿。貴公には面倒をかけてしまい、誠に申し訳ないと思つてはいるのだが・・・。面倒ついでに、もう一つお教えいただけないだろうか？」

何故か、エリアドにはずっとさきほど謁見の間で見かけた一人の人物のことが気になつていた。ヒルド男爵ではない。彼と同行していたもう一人の人物の方だ。

その男の名乗つた“ラ・ル”という名前には、何處か不吉な響きが感じられた。いざれどどこかで剣を交えることになるのではないか・・・何の根拠もないということはわかつていただが、そんな予感すら感じられるような、そんな気がしてならなかつた。

“レムリア”という、エリアドがこれまでに感じたことのない共生感を覚える女性と知り合つた矢先に、“彼”的ような人物が現われたことが、エリアドには單なる“偶然”だとは思えなかつた。

“私は、けして“運命論者”ではないつもりなのだがな”

エリアドの唇の端に浮かんだ笑みは、少しだけ大きくなっていた。  
そんな時、後ろから声が掛かった。

「出来うる限り、彼の者には関わりを持たない方が宜しいでしょう  
その涼やかな声に振り向くと、先程謁見の間に紹介された契那  
という少女が歩いてくる。

「おや、契那ちゃん。何時の間に追っかけて來たんだい？」  
「マスターに、姫さまの所への案内を申しつかって参りました」  
「お、それは助かるねえ。ありがとうございます、契那ちゃん」  
「セイさまも先に行かれておりますわ」  
「それなら、尚更契那ちゃんがいてくれて助かるよ」

少しお芝居がかつた調子でおどけるハリーに、少女は慈愛に満ちた  
笑みを浮かべた。

ヴーロンペイ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「……何も“望んで”関わり合いになりたいと思つてゐるわけではない。かの御仁の“何か”が気になつてゐるのは確かだが、ね」

ヒリアードは少女にそつと感じた。

「だが、君がそつと云つてゐるなり、今のところはこれ以上の詮索はなしにしておこう。その前に解決しておいた方がよい問題がいくつかあるところとも確かにことなのだろうし、ね。」

ふう、と小さくため息をついて、ヒリアードは傍らの窓から夜空を見上げる。

やはり、自分はこゝした場所には向いていないのではないか。そんなことを、ふと感じる。旅の空の下、街の明かりが届かぬ夜のキヤンプで仰ぎ見る、天を埋め尽くす無数の星々が少しだけ懐かしく思つ出された。

「差し出がましこ」とを申し上げてしまひました

「不快に思われたのでしたら、どうかお許し下せこませ、と少女は深く頭を下げた。

「契那ちやんの意ひ」とせむつともだよ」

やれやれ、とハリーは肩を竦めた。

「詭弁というのはね、エリアド殿。誤った事柄を無理して自分に納得させる為に言ひ言葉なんだよ、知っていたかい？」

解説する義務なんてないんだけどね、と契那の手前、戯けてはみせるが、その双眸は全く笑っていない。

「人が誰かを想う時。それが、自分の心に及ぼす影響は少なくない。相手によって、成り立つてしまう関係は致命的なものにもなるのさ。無防備に相手に心を晒すつてことって、キミには想像できるかい？」

懸念の表情を浮かべて眉宇を寄せる契那に、心配ないよとでも言うように微笑むと。

「弱い心の持ち主が一人でもいると、強固な結界も役に立たなくなる。自分に何が出来て何が出来ないのか その違いを判らなかつたが為に、命を落とした者は沢山いるよ」

「ハリーさま。」

「おつと、言い過ぎたか。失言を許してくれたまえ、エリアド殿」

悪びれずに、にこにこと笑みを浮かべると、ハリーは一人を先導して歩き始めた。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「……貴公たちの言葉は、心して胸にとめておくことじょう、ハリー殿。おそらく、貴公が抱いた懸念は、もっともなものなのでありますし、貴公は、これまでそうして命を落とした者を見てきたのでありますから。」

ハリーの言葉に応じるエリアドの口元には、小さな歪みが戻つてくる。

「……だが、貴公たちに、これまで見てきたものがあるよつ、私にも、これまで見てきたものがある。……結局、人は、自らが信じるよつに生きることしかできない。……そこまで言い切つてしまえば、少し言い過ぎになるのかもしれないがね。……そして、その代償は、どのような形であれ、いづれ“身をもつて”支払うことになる。その生き方が正しかろうと、あるいは間違つていようとも。……そうだな。私が倒れる時には、私にでき得る限り、貴公たちを巻き込まぬように注意するよつ。」

少しだけ間を取ると、言葉を続ける。

「……悪く思わないでほしい。貴重な助言をいただけたことは感謝しているし、貴公たちのような考え方も嫌いではない。だが、他の言葉を確かめもせずに信じる者は、盲目であること以上に、世の中に目を閉ざしていると私は思つてゐるのでね。」

“あえて、そこまで口にせぬ方が無難に済むのかもしれないな”

とそんなことを思いながらも、エリアドはそのすべてを口にした。  
それが、この国に蔓延しつつある“事なれ主義”に対する反発だ  
つたのか、それとも私自身の若さゆえだつたのか・・・その判別  
は、その時のエリアドにもつかなかつたのだが。

ヴェロンディ連合王国／王都／謁見の間 回廊

「まあ、もつともな反応だね」

一つため息をつくり、ハリーは苦笑するように言った。

「でもね、小利口な道を歩もうとしない考え方はそれなりに賞賛に値するね。傷ついても、苦悩しても・・・その結果手に入れたものは、自分の中で生きていいくだらうから」

おひと、キミと話すと、なにか説教くさくなってしまはうね、と笑う。

「でもね、忘れないで欲しい。この国は、微妙なバランスの上に成り立つていて。この王都も王城も、護る結界は昔の遺産だ。それを、強化する術も力も、今のこの国にはもう無いのだよ。それでも、北の魔国と対抗出来てるのは、王陛下と妃殿下のお力の賜さ。それ故に・・・」

「・・・それ故に、お一方を護ること、そしてこの王城と王都を護る結界を維持することだが、わたしたちの使命なのです。たとえ、それが命に代えることになつたとしても」

ハリーの言葉を、契那が引き取つて言った。幾ばくかの悲壮感と絶望 それが、二人の表情に垣間見えた。ヴェロンディ連合王国 安寧と光の庇護に有つた国が、何時しかその軌道を狂わせ、奈落へと向かつて落ち込んでいくかのよつた、そんな破滅的な断片を見る思いだった。

「ムーンシャドウさん」

沈み込むような重苦しい雰囲気は、契那の声によって破られた。その整った顔立ちには、愁いの影が差し込んでいる。

「レムリアちゃんの元に急ぎましょ。何か…芳しからぬ感じを、受けます」

「契那ちゃんの予感はよく当たる。ヒリアード殿、姫君の所に急いで」

「…」  
「ひらだ、と黙つとハリーは先頭を切つて走り始めた。契那も後を追つ。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間　回廊　レムリアの居室  
「・・・ほめてもうつよつなことではない。・・・私は、そういう  
やり方でしか自分を納得させられない不器用な人間だという、ただ  
それだけのことだ」

ハリーの言葉に応じたエリアドの返答には、少し自嘲氣味な色彩  
が混じっていた。

見れば、その厳しい表情にも、心持ち苦笑いが浮かんでいる。  
ふむ、と一つ息を付くと。

二人の決意の言葉に、小むく頷いてこう続けた。

「・・・」の国が、両陛下と、そして、貴公たちがあなた　命を賭ける  
に値するだけのものであることを祈っている

珍しくも、それはエリアドの心からの想いであった。

『ムーンシャドウを』

そんな沈鬱ちんうつな雰囲氣を破つた少女の声は、憂いの影を伴つものだ  
つた。

『レムリアさまの元に急ぎましょ。何か・・・芳しからぬ感じを、  
受けます』

『契那ちゃんの予感はよく当たる。エリアド殿、姫君の所に急いで

「・・・了解した」

エリアドは一人の言葉に短く応じると、足早にその後を追つた。  
レムリアは、普段王族が済む翼とは反対側にその居室を貰つている。

何故に、国王と王妃に連なる部屋を貰つていないのか 理由を正せば、それは実に詰まらないモノなのだが・・・

それで余人からの不協和音が減ることことで、渢々国王アーサー・アートリムも、王妃アン・コ・デリアも我慢をせざるを得なかつた。この国の最高権力者とはいえ、その手足が縛られている悲しき実例だつた・・・。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間　回廊　レムリアの居室  
胸騒ぎを覚え、セイは足を速めた。一般的なレムリアへの風聞故に、普段から人の気配が少ない王宮の“姫君の翼”部分だが、それでもこの静けさは異常だった。

セイの脳裏に、先程エルド男爵と共に王の御前にいた黒衣の男の姿が過ぎた。絡みつく様な笑みの記憶が、如何にもセイの心をかき乱す。

「あの様な、あからさまに怪しげな人物さえも出入りしてしまっている　都の結界は、いったいどうなつてしまっているのか・・・」

“内から結界を綻びさせるのは、闇に隙を作っている弱い心”

先日のハリーの言葉が聞こえてくるかの様だった。眉宇を寄せて、セイは騎士として礼を失しない範疇で脚を早めた。

「むっ・・・?」

唐突に胸を襲う重い不快感に、セイは己の懸念が間違っていないことを悟った。この先　姫君の居室の方に何かがいる。セイは意を決して全速で走り始めた。

長い廊下を走り、階段を駆け上る。ブーツに付けた拍車が、大理石の階段に当たって鋭い音を立てる。重苦しい気配はますます大き

く、その圧迫感は普通の者で有れば怯ませるに十分な心理的な圧力があつた。

だが、セイはだてに“JUSTICE”的銘を抱いていの訳ではない。その圧力を跳ね返すかの様に最後の一区切りを走りきると、レムリアの居室に突入した。

「姫君っ！ 『無事であられるかっ！』

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

レムリアは瞳を軽く閉ざすと、居間の安楽椅子に軀を深く沈める。全身が氣怠いが、何が原因かはわかつていた。

『阿修羅』

起源も、本質も不明な剣。“魔劍士”と呼ばれているヒリアード・ムーンシャドウから預かつた、彼の者の帯びる剣。

「・・・」

寝台の上に置いたままの剣に視線を遣ると、重苦しい波動が微かに伝わってくる。

“深くは考えないようになないと”

下手をすれば、強大な力を秘める剣に、心を持つていかれる可能性もあるわ。でも・・・

思考の流れが引き戻された。窓から吹き込んだ風が、カーテンを揺らしている。レムリアはゆっくりと立ち上がった。

「どなたか・・・いるのですか？」

自分で、窓を開けた覚えはない。自然に開く訳もない。考えるまでも無かつた。急速に広がる邪悪な波動に、軀が微かに震えている。

『ぎじり』

木を敷き詰めた床が僅かに鳴った。そして、悪夢の様な姿の相手がその身を顕した。

「妖魔！ こんな所に！」

無意識に、一歩一歩と後ずさりしていた。黒い翼を持つその凶悪な相手は、バルコニーに通じる高い窓から入り込んでくる。禍々しい赤に輝く凶眼が、己の獲物を睨め付ける。気力を奮い起こし、その狂気に満ちた闇を見返す。

トン、と軀が何かにぶつかった。寝台だ。寝台？ 寝台には確か・

一瞬の行動だった。振り返り様に阿修羅に手を伸ばすのと、猛禽妖魔がその凶悪ながき爪をレムリア目掛けて振るうのが同時だった。

「くづ・・・」

肩口を切り裂かれ、鮮血が舞い散る。歯を食いしばると、両手で阿修羅を握りしめ、そのまま相手に叩き付けた。

『ガアアツ！！』

灼熱の鉄にでも触れた様に、猛禽妖魔は飛びする。鞘に入れたままだが、多少は効いている様だった。震える手で、必死に阿修羅を構えるが、肩口からの出血が急速に力と氣力を奪っていく。相手は、ジリジリと再び躊躇寄つてくる。

と、その足取りがピタリと止まった。拍車が鳴る音が通廊に木靈していくと、扉を蹴破る様にして室内に誰かが飛び込んできた。

「姫君っ！――」無事であられるかっ！――」

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「何奴っ！！」

シャリーンと鋭い音を立てて剣を引き抜くと、今まさにレムリアに襲いかかろうとしていた巨躯の悪鬼にセイは立ち向かった。

念を込めるが、手に持った長剣が白色光を放つ。歩みを止めてセイに向き直った怪物に、体重の乗ったセイの必殺の一撃がヒットする。

『グアアアアアアツ！』

強烈なノックバックによつてバルコニーの方まで吹き飛ばされた猛禽妖魔は、そのまま欄干を越えて下の庭園に落ちていった。

「姫君っ！ ご無事か！」

「わたくしは大丈夫です、セイ！」

レムリアの側に駆け寄つたセイは、バルコニーから更に三体の猛禽妖魔がのそりと入つてくるのを目撃した。

「！」私は私にお任せを。姫君は早く脱出されて下をこい！」

通廊へレムリアを押し出すと、長剣を両手で構える。眩いばかりの白色光を放つその剣は、ヴェロンティ王国の至宝、セイの家に代々伝わる聖剣『ノルン』だ。

「どこから忍び込んだかは知らぬが、姫君の安らぎを侵害した罪、万死に値する。天道に代わり、我が裁定を下さん。」

厳かに言い放つ。長剣の放つ光は、目にしていられない程の輝きだ。その“光”の圧力に押され、じりじりと猛禽妖魔達は後ずさつて行く。

「！」

その動きは、目で追えるものではなかつた。眩く輝く彗星が飛び込んだかのように、室内が輝きで満たされた。

『ガアアアツ！…！』

一瞬の事だつた。断末魔の絶叫が響くと共に、三体の猛禽妖魔は最初のものと同じ方向に吹き飛んでいった。その身に宿す光の力を剣に凝縮して、剣撃と一緒に相手にぶつけるセイの得意技、“フランツシャー”（閃光撃）である。

「これで終わりとも思えぬが…・・・」

眩いた瞬間。激痛がセイの躰を走り抜けた。

「な、なに…・・・」

セイの影から、鱗の生えた一本の手が伸びていた。そして、その手に握られた曲刀が、セイを深々と貫いていた。

「くつ・・・・・」

力を振り絞つて躰を引き抜いて振り返る。見る間に礼装の上衣が紅く染まっていく。

『キシャアアアツ』

妖艶な女性の上半身に蛇の下半身。六本の手には、それぞれ凶悪な刀が握られている。猛禽妖魔よりも遙かにやっかいな相手 女蛇妖魔だ。

「上級、妖魔・・・」

霞む瞳を見開いて、奥歯を噛み締める。これしきの事で、ヴェロンディ三騎士の一 角が倒れる訳には行かない だが。

『グアアアツ』

バルコニーから三度の咆吼が聞こえる。開いた戸口の外に潜む複数の黒い影。まだ先程の猛禽妖魔が残つて いるのか！ 前に女蛇妖魔、後ろに猛禽妖魔 傷口からは止め処なく深紅の命が流れ出す。

“ 天秤を・・・使うしか・・・”

覚悟を決め、震える手で聖剣を握り直した時。通廊から疾風のよう に室内に飛び込んできた者がいた。

「 契那ちゃん、セイを御願いします！ エリアド殿、相手を足止めしますよ～！」

地に崩れ落ちる前に、聞こえてきたのはそんな叫び声だった。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「はいっ！－」

ハウとエリアドが女蛇妖魔と猛禽妖魔を牽制していの隙を縫つて、  
契那はセイの所に走り寄つた。

地に倒れ伏したセイの息は早く、浅い。

止め処ない深紅の流れが、地面に不吉な模様を描いていく。

「セイさま、今お助けします！」

契那はその小さな両手をセイの傷口に翳すと、瞳を閉じて精神を  
集中する。

心の奥底から力を引き出す様に。

自分の中から、自分に宿る“モノ”をセイに分け与えるようになります。

『治癒（HEAL）』

その呪言と共に契那の両手が真っ青に輝くと、みるみる内にセイの傷口が塞がつていく。

やがて、ゆっくりとセイが瞳を開いた。

「契那・・・か。すまぬ、手間を掛けた」

「お立ちになれますか？」

「・・・大丈夫だ」

契那の肩を借りると、セイは立ち上がった。

少しふらつくが、最早脱力感は無い。先程まで蒼白だつた表情にも、血色が戻っている。

拳が白くなる程聖剣の柄を握りしめると、セイは短く言つた。

「借りを返してくれる。」

「私も行きます。」

一瞬、セイと契那の視線が交錯する。

ふつと笑うと、セイは不敵な笑みを浮かべて頷いた。

「よし。不埒な輩を、全力で叩くとしよう」

「はい！？」

二人は笑みを交わすと、妖魔と渡り合うハリーとエリアドの加勢に向かつた。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「大丈夫か？」

エリアドは、扉のところにいたレムリアに短く声をかけ、血の滲む肩口に“癒しの手”（LAY ON HANDS）を翳した。その右手が蒼く輝くと、レムリアの肩の傷が徐々に治っていく。

「大丈夫です」

エリアドの言葉に、レムリアは気丈な笑みを返した。

努めて冷静には振る舞つてはいるが、微かに躯が震えるのを止められなかつた。

それもその筈。騎士であつても、妖魔に遭遇して生き残らえることは少ない。ましてや、何の技量も持たないレムリアであれば尚更だつた。

妖魔と戦つハリーの助勢に向かうエリアドの背を見ながら、レムリアは阿修羅を硬く抱きしめた。

「レムリア。いいか、少しつらことは思つうが、今しばらく氣を抜くな」

何か予感めいたものを感じたエリアドは、“阿修羅”を抱えるレムリアにそう言い残して、少しだけ遅れて部屋に入る。

『契那ちゃん、セイを御願いします！ エリアド殿、相手を足止めしますよー』

「了解した。」

ハリーの言葉に短く応じて、バルコニーから入つてくる猛禽類を思わせる数体の魔物に対峙する。

『キシヤヤヤヤ——ツツツ。』

人に倍する巨躯。醜く曲がった大きな嘴を持つ禿鷲に似た頭部。禍々しさを湛えた真つ赤な凶眼がこちらを見る。左右の翼を大きく広げ、鋭い鉤爪を構えて、“それ”は威嚇の咆哮を発した。

「……タナ・リ妖魔か。」

猛禽妖魔、ヴロツク。上級種の中ではさほど強大な力を持つ方ではないといわれる妖魔であるが、ブライムブーン現界でそう滅多やたらに出会える魔物ではない。……いや、少なくとも、そう言われているはずである。

小さく咳き、真紅の手甲 “炎の鎧” に、呼びかける。

「ヒリアド・ムーンシャドウの名において、“正義”を為さんがため、私は“汝”を求める。“火炎剣”よ、我がもとに！」

巻き上がつた真紅の炎とともに、一振りの細身の漠羅爾刀はくらる刀が手の中に現れる。

「……さて、どうしたものか。流石に、こ<sup>ノ</sup>を妖魔タナ・リ”とまとめて噴き飛ばしてしまつわけにもゆかぬだろつしな」

唇の端に皮肉っぽい笑みを浮かべ、『冗談とも本氣ともつかぬ口調で呟きながら、妖魔の爪を受け流す。

“炎凄斬”（えんせいざん）。“炎の鎧”と“火炎剣”に秘められた“力”には、確かにそれだけの威力がある。その“力”を使うには、己が心に秘めし“心意の祠”にある“心”、“技”、“体”、3つの心の扉を開かなければならないし、その結果支払うことになる代償は、けして小さなものではないのだが、今の自分なら、それがけして不可能ではないということもわかつてている。

“……だが。やはり、それは最後の手段だろう。となると、今は己の持つ剣の技のみで、妖魔タナリどもと対さねばならぬということになるな……”

正直なところ、何がエリアドを躊躇させていたのか、それは彼自身にもしかとはわからなかつた。だが、『その“力”は、今ここで使うべきではない。』という強い予感めいたものがあつたのは確かなことだ。その一方で、久方振りの実戦に“剣士”としての血が騒いでいたことも、また確かな事実ではあるのだが。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

“妖魔とは・・・嫌な予感が当たつたのか？”

エリアードと肩を並べたハリー・ハウは、手に馴染んだ愛剣『ヴァンガード』を握りしめた。例えどんな相手が来ようとも、後ろにレムリア姫を庇う状態で、一步も引くことは出来ない。

「ハウさま、ムーンシャドウさま。援護、申し上げます」

後ろから契那の詠唱<sup>えいじょう</sup>が始まった。

言葉の力が増すに従い、手にした剣が蒼く輝き始める。鋭さを増した剣先に、その勢いに次々と妖魔は地に崩れしていく。

「待たせたつ！！」

短く叫ぶと、セイが戦線に参戦した。聖剣ノルンが発する強烈な輝きが、妖魔を圧倒していく。趨勢は決まつたかのように見えた。だが。

「あれは、何だ？」

背筋に寒気を感じて、思わずハリーは呟いた。黒く霞むような不気味な空間が女蛇<sup>マニレス</sup>妖魔の背後に沸き起こっている。

「転移門（GATE）！ 結界に護られている、この聖域にか！」

信じられない事態だった。強固な結界で護られている宮殿深奥に転移門が開かれるとは。

「ハリー！ エリード！ 転移門を封じる、援護を頼む！」

セイ<sup>セイ</sup>が女蛇妖魔<sup>マコトス</sup>に向かつて走り出した。セイを妨害しようとする猛禽妖魔<sup>ヴロック</sup>を牽制する。

『ハウさま、ムーンシャドウさま。援護、申し上げます。』

少女の詠唱とともに、手にした刀に青白い輝きが宿る。

「・・・添い。」

短く礼を言いながら、一人の戦いぶりを見つける。

“・・・さすがは、ヴェロンディ三騎士と呼ばれるだけのことはある、といったところか”

このような場所に妖魔<sup>タナ・リ</sup>が現われる、などといつ、およそ信じ難い事態に遭遇して、とつにこれだけの行動ができる者が、はたしてどれだけいるだろ。そのような者が一人 いや、あの少女も含めれば、三人も いる。

“この国も、まだそう捨てたものではないか・・・”

そんなことを思いながら、目の前の猛禽妖魔<sup>ヴロック</sup>を斬り伏せる。

残る猛禽妖魔<sup>ヴロック</sup>をハリーに任せ、セイとともに転移門を開こうとす

る女蛇妖魔マリリスに對峙する。

「セイ殿、何か転移門ゲートを封じる手段をお持ちか？ もしそちらになければ、私がやる。・・・いささか派手なことにはなるが、このうえ妖魔タナリどもを呼び込むよりはマシだらうからな・・・」

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「もう聞こえていないさ！」

妖魔と切り結びながら、ハリーが叫んだ。

「“天秤”を使うのだろう！ 今はそれが一番確実だ！」

セイは女蛇妖魔に閃光撃を打ち込んで進路から排除すると、剣を地面に突き立てた。一気にセイの“氣”が上昇する。

「セイに妖魔が取り付かないように援護する！」

目の前の妖魔を切り捨てる、セイの右側面を護るべく前に出る。

「・・・ふむ。」

“・・・“天秤”か。どうやら、何か手段があるらしい。”

「そういうことなら、この場はお任せするとして。」

ハリーの言葉にそう応じたエリアドは、反対側　彼女の左側面に場所をとり、女蛇妖魔を牽制した。

「天空に風、大地に水、人心に炎……」

澄んだ声で、セイの詠唱が響き渡る。集中しているセイは無防備

だが、その側面をハリーとエリアドががっちりと護っている。

「……始まりの光に在りし如く、世々の理に裁定を下したまえ」

きつと瞳を前方の闇に見据えると、両手を開いて前に突き出すと一聲鋭く叫んだ。

「天秤つ（W A A G E）！……！」

途端、目映いが室内を満たした。セイの両手が白く輝くと、眼前に光り輝く天秤が現れた。

「始まつたな」

剣を下げる、ハリーが静かに言った。  
見ると、女蛇妖魔マリスも猛禽妖魔カロックたちも動きを止めている。と、その姿が急速に希薄になっていく。

「“裁定”が下った。転移門（GATE）も崩れるぞ」

「う、という音を最後に、黒く口を開けていた転移門がかき消えた。同時に、妖魔の姿も消滅していた。

「セイつ」

崩れ落ちるセイに走り寄ったハリーは、とつとセイを抱き抱えた。セイは蒼白な顔色で、瞳を堅く瞑っていた。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

『天空に風、大地に水、人心に炎・・・』

澄んだセイの声が朗々とあたりに響く。

心なしか、妖魔たちは、その言葉に怯んでいるように見えた。それは、セイの言葉が“言靈”と呼ぶにふさわしい“力”を有しているという証である。

「・・・古の“聖句”・・・」

セイが言葉として発したのは、まさに“失われた西方樂士”に伝わる“力の言靈”だった。現代にて、その言葉自体を知る者も少ない。

“・・・まさか、この国で“聖句”を使う者に出会おうとは”

この“聖句”は、まさに“言靈”と呼ぶにふさわしく、その“力”を使うために、尋常ならざる“意志”の力を必要とする。けして並みの者に使うことのできるものではない。ニアードが知る限りにおいて、『守護者（WARDEN）』の一人（『紅の勇者』ランバルトと『蒼の賢者』ダリエン）を除けば、この“聖句”的力を使つたことがある者は、『灰色の預言者』天査の娘、真理査と（後に女王に即位する）コーランドのコーラライン王女くらいだった。

『天秤つ（WAAGE）-.-.』

セイの言葉とともに日映い光が室内を満たし、妖魔たちの姿が消えてゆく。

“・・・さすがは、エルディ（AERDY）の古き血に連なる末裔（タナリ）の国と言つべきか”

蒼白な顔色で倒れこみ、ハリーに抱きかかえられるセイの横顔を見ながら、私はそんなことを考えていた。

「大丈夫か、とは聞かぬよ。しばらく休んだ方がよいだらうからな。ハリー殿。セイ殿のことは任せてしまつてかまわぬいか

あたりの気配を確認（DETECT EVIL）しながら、私はそのように続けた。

「わかった

ハリーは額の汗を手甲で拭うと頷いた。

「心配しないでくれ。“天秤”を使った後のセイは何時もこうなるからな。エリアド殿はレムリア姫様を頼む」

ハリーが目線を向けた先では、契那がレムリアに付き添っていた。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「・・・忝い」  
かたじけな

エリアドはそういうふうと、セイとハリーに小さく頭を下げた。

“・・・さすがに、妖魔の気配は消えたようだな。・・・もつとも、  
“天秤”に耐えるような相手であれば、そもそも気配など感じ取ら  
せはしないかもしだれぬが、な・・・”

エリアドはあたりを静かに見廻した。

レムリアの部屋を訪れるのは昨日から三度めだが、ビリヤリヤ  
と、少し落ち着いてあたりを見る心の余裕ができてきたりして。  
意外に、などと言つては失礼かもしれないが、ここが王族の居室  
であるという事実を考えれば、そう言つてしまつてしまつても、け  
して言い過ぎにはならないくらい、シンプル質素な部屋だ。

“・・・しかし、妖魔タナリなどが、王宮の、このような奥深くにまで侵  
入してくるとは。・・・面殿を守る結界に、何らかの形で“綻び”  
ができるところと考へるべきなのかもしれない”

恐らく、部屋に置かれている家具は、どれも良い品なのだろうが、  
けして華美な装飾が施されているわけではない。

“・・・それにしても。なぜ彼女が狙われる？ “阿修羅”を持た  
せたことが裏田に出たか？”

“・・・それとも、彼女自身の身に、何か妖魔タナリに狙われるだけの理

由があるのか？

・・・いや、理由はあるな。・・・“王の妹”などといつ立場一つをとつて見ても、彼女に利用価値を見出す者はいよ。・・・まして、 “災厄を告げる者”、“魔性の瞳”などと呼ばれるだけの“何か”を、彼女が本当に持つているのであれば、その先は言わずもがな・・・か”

そんなことを考えながら、レムリアと契那のところに向かつたエリアドは、あるいは少し難しい表情をしていたかもしない。そのことに気づいて少しだけ表情を和らげ、私はこう続けた。

「・・・一人とも、大丈夫か？」

「大丈夫です」

壁に凭れて、床に座っていたレムリアは顔を起こした。傍らに付く契那が慎重に傷の手当てをしていた。

「傷は、塞がっています、姫さま。もづ、心配はありません」  
「ありがとう、契那ちゃん」

ゆづくじと、レムリアは立ち上がりつた。躰が揺れるのを契那が隣で支える。

「この剣をお返しします。危ないとこりを、助けて貰いました」

古びたその剣を、そつとレムリアはエリアドに差し出した。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居館

「……いや、あまり大丈夫ではなさそうだな。」

エリアドは差し出された“阿修羅”を受け取りながら、レムリアの表情を見てそう感じた。

無論、エリアドの懸念はレムリアが妖魔から受けた傷のことではない。

“……“阿修羅”の“氣”に当たられた、といったところか……”

当たり前のことだが、エリアドがレムリアに“阿修羅”を渡したのは、けしてそのような余計な負担を掛けさせるつもりでしたことはなかつた。自分がレムリアの側に居られ無いながらも、“阿修羅”を持たせておけば、何らかの役に立つだろうと考へたからだ。しかしながら、鞘から抜かずとも、レムリア程の“力”を持つ者であれば、“阿修羅”的“力”を感じ取ってしまうことなのだろう。

「……すまない。余計な負担をかけさせてしまったようだ。」

スッ、と音もなく、私の手の中から“阿修羅”が消える。

「お気になさらずに」

レムリアは、氣丈にも笑みをエリアドに向けると、ふうと小さく

息を吐く。

「契那ちゃんも、もう大丈夫だから」

「わかりました」

“・・・はたして、この契那という少女は、どうなのだろう?”

レムリアと契那の遭り取りを危機ながら、ふとそんなことを思い、エリ亞ドは傍らの少女の顔をちらりと見た。

そつとレムリアから手を離した契那は、エリ亞ドに目線を向ける。

「どうかされまして?」

ヴェロンティイ連合王国／王都／レムリアの臣属

「・・・いや・・・」

“・・・氣のせい、か”

「なんでもない・・・」

ヒリアードは、契那の言葉にそつ感じた。

“・・・どうやら、彼女（契那）は、何も感じていなことうだ。  
・・・もしくは、感じたということを、こちらに感じさせないだけの資質がある・・・か”

答えるでない二つの推論の間で、ヒリアードは口が思考が空転するのを感じた。

“・・・少し、神経質に考え過ぎてこいるのかもしけぬ、な”

もう一度、ヒリアードはゆっくりとあたりを見廻した。

「・・・それにしても、なぜ・・・」

“・・・このよつなどに、妖魔が・・・”

小さく洩れたその疑問は、ヒリアードの中からなかなか消えようとしなかつた。

推測ですが・・・と前置きして、契那は話し始めた。

「このションドルの都全体には結界が張られています。大抵の妖魔は、この結界で防がれてしまします。異空間からの呼び出しによつて出現する上位の妖魔ならば、この結界を越えることが出来るでしょうが、それでも宮殿に張られた結界 これは、都全体のそれよりも数倍強い結界です を破ることはできません。ましてや、その最奥にあるこの場所には、更に強力な結界が張られています。通常ですと、到底妖魔の出現など考えられません」

「簡単だよ。結界に綻びが無いとしたら 誰かが手引きしてるんだな」

「ハリー！ 滅多なことを言つな！」

何時の間にか、意識を取り戻していたセイが思わずハリーの言葉に否定の声を上げた。

「おいおい、簡単な引き算だろ、セイ。今の状況で都の結界が無くなつてみる。何時も虎視眈々とこの国を狙つてている北の魔国に一気に席巻されるさ。そうなつてないつて事は、結界は保持されているつてことだ。そうなると、誰かが結界を撲めて（たわめて）、中に進入するルートを作つたとしか思えないね」

「仮にその様な“門”が作れたとしまして その存在は非常に強大な力を持っている、という事になります。その様な存在がここに居るとしまして、尚もわたくしたちがこのままで居られると言つことは・・・」

「・・・その存在の気まぐれに過ぎないってことなのでしょう」

契那の言葉を、レムリアが引き継いだ。

「つまりだ 緊急事態つてことだ。今は、宮殿に安全な場所は一切無いって考えた方がいい」

腕組みしたハリーは軽く溜息をつくとセイを見た。

「王陛下とアクティウムにすぐ報告しよう」

微塵も躊躇にも無くセイが返すと、ハリーはエリアドとレムリアに言った。

「それが良い。エリアドは姫君を護つて付いてくれ。姫君、宜しいですね？ ここに残られるのは安全ではありませんので」「ええ。わかつています。足手まといにならぬよう、気を付けます」

ハリーに頷くと、次いでレムリアは小さくエリアドに頭を下げて言った。

ヴェロンティイ連合王国／王都／レムリアの居館

「……やはり、そういうことになる、か

なれば予想していたこととなる、あらためてそういう断言されると、  
エリ亞ドは言葉に詰まった。

『王陛下とアクティウムにすぐ報告しよう』

『それが良い。エリ亞ドは姫君を護つて付いてきてくれ』

セイとハリーの遣り取りに、エリ亞ドも短く応じて言った。

「……了解、した。」

結界を撓めた者が何者で、それが誰の心の隙に付け込んで王宮内にまで入り込んできたのか、まるで想像できないわけでもなかつたが、そうだと断言できる確証があるわけではない以上、この場でそのことに触れるのは躊躇われた。

もつとも、その何者かがどのような者なのかといふことは、当時の私には想像することできなかつた。その時の私にわかつたのは、「自分たちは今、途轍もなく厄介な事態に陥っている」という、単純な事実だけだった。

「……気にするな。……少なくとも、君一人のせいではない。」

どこか憂いを秘めたレムリアの顔をちらりと見て、私は小さくそう言った。

「・・・」

ヒリアードを見返したレムリアは、無表情に近かつた。小さく頷くと、そのまま無言で脚を昂める。

「ムーンシャードをね、ちよつと。」

やう言つて、ヒリアードの手を引つ張るのは契那だった。レムリアから少し遅れると、ヒリアードだけに聞ひやべるとうに小声で言つた。

「この事態を招いた原因を、あなたが誰に特定しているかは判りませんが、その一端が姫さまにありますと聞ひ憶測めいた発言は軽率です」

一つ溜息をつくと、念のために言つておきますが、と続けた。

「この様な意図など無かった、とわたしに言ひの意味があります。要は、姫さまがどう感じられ、どうお取りになるかです。今の一言は、恐らく間違つて理解されてしまうとおもいますけれども」

どうれれますの? と契那は形の良い眉をよせてヒリアードを見た。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室

「いずれ、答えはわかる」

エリアドは、契那の言葉に平板な声で応じた。  
恐らく、レムリアと知り合つ前のエリアドなら、それ以上の説明はしなかつただろう。

だが。

「……いや、これでは、言葉が足りない、か」

田線は、少し前をゆくレムリアから逸つた。エリアドは続けた。

「……レムリアが妖魔<sup>タナ・リ</sup>に狙われたのが、もし“単なる偶然”であれば、それに越したことはないと思っている。  
だが、同時にその可能性はあまり高くないだらつとも思つている。  
彼女よりも、むしろ私のせいかもしないがな」

エリアドの口調には、次第に血潮氣味な咳きが混じていった。

「……彼女がどう感じて、どう受け取るか……か。  
……気の廻し過ぎの上に、配慮不足というわけだな。  
……“自意識過剰”なのだろうな。……私も、……彼女も

それだけを呟つと、唇の端が小さく歪め、エリアドは先を急いだ。

「「」理解に問題があるように思えますけれども、ムーンシャドウセ  
ル」

だが、追及の手を緩めることなく、契那が言った。

「あなたの仰つたことは、姫さまに『姫さまがいらっしゃるから、  
結界に撓みが出来た。』と受け取られてしまつた、とわたしは申し上  
げているのです。おわかりになりませんか？ 物事の受け取り方は  
は二面性があることを、あなたはおわかりでしょう？」

僅かな苛立ちが、その聲音には含まれていた。

「あなたは、理や運命にも影響を及ぼすことが可能な神器をお持ち  
になつていらっしゃいます。それを委ねられたあなたが、なにゆえ  
に物事を『自分に都合良く理解されてしまい、客観的に見る努力を  
なさりうとはしませんの』とおっしゃつ？ 姫さまの事をさしおこたとし  
ても、『自分の尊厳のほつが重要なのです』とおっしゃつが？」

言葉が過ぎたとは思ひません さつまつ契那の双眸には強い輝  
きが宿つていた。

「あなたは、誰と関わり合つになつておるとお思いですか？ もつ  
と、真剣に思考することを進言致します」

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの臣属

「……ふむ。そういう受け取り方があるのか。」

エリアドは田線を少女（契那）に転じて、呟くように呟いた。実のところ、そのような受け取り方があることだけで、エリアドは気づいていなかつた。

「たしかに、私は、彼女が私の言葉をどのように受け取るか、ということまで深く考えていなかつた。

……というより、私の言葉が別の意味で受け取られる可能性を考慮していなかつた、と言つべきか。

……君の言つよつこ、言葉には、一面性、……いや、多面性と言えるほどに、解釈の仕方があるのでない。

……言葉というものは、便利なようでいて、実は不便な……

いや、危つこ、もの……なのかもしれない、な。」

歩みは緩めず、レムリアの後を追いながら、エリアドはながば眩くよつこそう続ける。

「……契那嬢、といつたか。御助言、感謝する。……君の言つ“尊厳”という言葉が、君が私の言葉を『私の正しさがいざれわかるだろ』。』といつ意味だと受け取つた結果なのであれば、その一言でさえ、『私の言おうとしたことは、君には伝わつていなかつた』といつ証にななるのであつから」

歩を早め、レムリアとの距離を縮める。

「・・・レムリア。・・・少し、かまわないか。」

それを伝えなければならないところではわかつたが、どのよう  
に伝えればよいか、わかつていただけではない。今さら私が『結界  
が撓<sup>たわ</sup>んだのは、君のせいではない。』と言つてみたところでは、彼女  
がすでにそうだと思つていてるのであれば、もはやさしたる意味はな  
いのかも知れない。

しかし、それでも 『のままにしておけばいいことではなによう  
に、ヒリアドには思えた。』

魔性の瞳 - 143 「曲解」（後書き）

暫く間が開いてしまいました。公事が忙で、思つたりたり更新が出来ませんが、少しずつでも進めて行きたいと思います。

ヴェロンティ連合王国／王都／レムリアの居室 回廊

契那は、少し歩く速度を緩めた。必然、先に歩いているレムリアに追いついたと脚を早めたエリアドとは距離が開く。

“エリアドさま……世の中は田に見えるものばかりではあります。それが判らないとは思いませんけれど……”

想いが言葉として伝わらなかつたのは、お互い様のようだつた。そして、そもそもじかしさが契那をして次の行動に移ることを躊躇わせた。

「余計なことを、申し上げましたね」

そつと咳いてみる。

自分で判断して、自分で行動する “助言に感謝する”と言われたものの、それを字面通りに受け止められるほど、自分には純粹さが欠けていると、契那は思つた。

そして、そんな想いしか抱けない自分が少し悲しかつた。

後ろからの足音が近づいてくる。

レムリアは本能的に、その足音から逃げようとする自分を押さえよつとした。

“逃げて、どうなるものでもないでしょう?”

自分にそう言い聞かせてみる。理性では判っているが、感情が付いていかない。往々にして生じる心の軋みに、レムリアは胸が痛かった。

“どうして、こんな子供じみた反応をしてしまうの？”

苛立ちは収まらないし、熾きの様に燃る想いも止まらない。それでも、呼びかける声に努めて平静に返そうとするのは、自分が臆病故なのだろうか。

「・・・」

小ちく息を吐くと、意を決して声に出す。

「なんでしょうか、エリアアドリーム？」

ヴォロントイ連合王国／王都／回廊

「……さて、どのよひに言えればいいのだろう。」

声は掛けたものの、エリアードにはビのよひに話せばいいのかなど、判りはしなかった。

「……いや、その……、……ビのよひに言えば、判つてもらえるだらう」

一瞬天を仰ぎ、言葉を選びながら、途切れ途切れに話し始める。

「……レムリア。君は悪くない。……たとえ、君が今回のできごとに関わりがあるとしても、君が悪いわけじゃない。……たぶん、私も、君と同じくらい今回のできごとにほんわっている。……いや、それどころか、君のところに妖魔タナ・リが現われたのは、君のせいではなく、私が君にあの“剣”を預けたせいかもしれない。……あの“剣”は、たしかに、この都の結界を揺るがすだけの“力”を持つている。……すまないと思つてゐる。……謝つて済む話ではないと思うが……。れもほどは言葉が足りなくて、君を傷つけたのではないかと……」

エリアードにしては珍しくも、つつかえながら、じぶんもどうこう続ける。

「……それに、もしも仮に今回のできごとに君が関わっているとしても、あの湖の畔ほとりで君に言った私の気持ちは揺るがない。それを

伝えておきたくて・・・

その時のエリシアの顔からは、普段の私が無意識のうちにつけている（あまり感情を表に見せない）無表情といつも前の仮面が、たしかに剥がれ落ちていた。

魔性の瞳 - 145 「心情」（後書き）

お待たせしてしまってすみません。亀の子スピードアーティスト、少しでも更新を続けていきます。宜しくお願い申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「・・・気に、しないで下わい」

漸く 漸くレムリアは、その言葉を口にすることができた。その声が掠れたようにも聞こえたのは、レムリアがそれほどまでエリアドの態度に驚いたからだつた。

何時も斜に構えた、鉄面皮の彼が 所在なげに、少し赤面してゐるかのように、謝つてゐる？

そんなことを相手に強いる程、わたくしは我が儘に振る舞つていたというの？

「・・・」

色々な想いが経巡つて、レムリアの心は大きく動搖してゐた。だが、流石に夢見 そんな心の内を表に見せず、努めて冷静に言葉を紡いだ。

「わたくしの方こそ 先ほどは助けに来て頂いたのにもかかわらず、御礼の言葉が遅くなりました。不作法なわたくしを、何卒ご容赦願います」

出来る限り丁寧に、出来る限りの優しさを込めて、レムリアは表現を試みた。不要に謙るような言葉を、相手に言わるのは、単に自分が不出来な証拠だ。

しかし、そう思えば思つ程、言葉と態度が硬くなる。

“ これでは、わたくしの想いが伝わらない・・・”

心の中で至らない自分を叱咤しながらも、レムリアは顔をゆっく  
りと上げる。

伝えたいという想いを。  
知つて欲しい気持ちを。

例え、自分をさらけ出さねばならなくとも

「でも・・・」

笑みを浮かべてレムリアはそつと囁いた。

「・・・気に掛けて頂いて、とても嬉しく思っています」

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

囁くよつなレムリアの言葉に、ヒリアドはひびひびと言葉を返した。

「……いや、私の方こそ言葉が足りず、誤解を招くよつな言い方をしてしまった。そのことを、彼女が気づかせてくれた」

「契那ちゃんが……」

「そうだ」

少し後ろにいる契那を見て小さく微笑み、ヒリアドは続けた。

「まずは、事実を確かめよつ。そして、それにどう対処するか……だ」

「そうですね」

ヒリアドに頷いたレムリアは、徐に歩みを遅らせたると、契那が追いかけるレムリアの顔があつた。先程の、ヒリアドとのやりとりが心に棘を刺した様に残り、知らずに俯いて歩いていたようだ。

「契那ちゃん」

名を呼ばれて、契那ははつとして顔を上げると、田の前に優しく笑いかけるレムリアの顔があつた。先程の、ヒリアドとのやりとりが心に棘を刺した様に残り、知らずに俯いて歩いていたようだ。

「姫さま……」

「驚かせてしまったのならば、『めんなさいね。ヒリアドさまから

伺つたわ。気を遣つてくれてありがとう

「そんな・・・わたしは、不躾に申し上げてしまつただけで、特に意図は・・・」

「いいの。お礼を言いたいのは、わたくしの勝手な我が儘、と思つておいて」

ね、と笑うレムリアに、契那の心も少しづつ軽くなつていつた。エリアドもレムリアに合わせて歩みを緩め、契那が追いつくのを少し待つた。一人のやり取りが落ち着くのを待つて話すエリアドの表情には、どこか自嘲氣味の笑みが浮かんでいる。

「・・・人づき合いにはあまり慣れていないんだ。これからも、私に至りぬところがあれば、遠慮なく指摘してほしい」

一拍おおくと、さりげなく小さな笑みを浮かべてみせる。

「よろしく頼むよ

無理やりつづいた笑みに、エリアドは頬の筋肉が微かに引きつるのを感じた。

“らしくない・・・限界か”

心の中で自分に苦笑しながら、エリアドは話題を変えた。

「だが、まあ、それはともかく。少なくとも今は、事実関係を確かめておく方がいいだろつ。私や君が、本当に今回の“でき”とに関わりがあるのか否か。そこに、私たち以外の要因が関与しているのかどうか。

問題は、それをどうやって確かめるか、だが・・・」

最後の部分は、なかば咳きのようになっていた。

魔性の瞳 - 147 「前進」（後書き）

〔20.11.09〕 文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「はいっ」

エリアドに答える契那の声は弾んでいた。レムリアも、嬉しそうに契那に微笑みかける。

「わたくしからも宜しくね。契那ちゃん  
「勿論です、姫さま！」

レムリアに満面の笑顔を向けた契那は、一転難しい表情を浮かべると、エリアドに向き直つた。

「都の結界は、そう簡単に撲められるようなものではありません。人為的に弱めることも、それには含まれます。結界 자체を損なわない限り、結界の効果は持続されます。けれども・・・」

眉根を寄せると、契那は一つ溜息をついた。

「内通者がいれば別です。けれども、その内通者は内通する相手に、その心を開かねばなりません。従い、もしも内通者が手引きしてしまっては、城の内陣に入れません。従い、もつとも、心を支配されてしまつては、よほど特殊な“契約”を交わしたのだと思います」

「・・・なるほど。・・・だが、そのような特殊な“契約”を交わした内通者がいれば、それは不可能ではないということ、か。しかし、もしそうだとすると、内通者か、あるいは、その者が“契約”を交わした相手の、少なくともどちらか一方は、そうした特

殊な“契約”を結ぼうと考へつゝだけの智恵と、そのために必要な知識を持つてゐる、ということになるな」

しばし思考すると、ヒリアードは契那の言葉にそう応じた。

「・・・そのような内通者を見分ける方法は、あるのかな？」

直感的に言つてしまふことができれば、すでに、それが誰の仕業なのか、ヒリアードはまったく推測していなかつた訳ではない。だが、それを正しいと証明することができなければ、それは単なる言いがかり以上のものではなかつた。

「・・・そうだな。たとえば、何か“契約の証”<sup>あかし</sup>だと言えるようなものがあれば、その者の裏切りを証明できる」とになるはずだが・・

魔性の瞳 - 148 「内通」（後書き）

〔20.11.09〕 文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「契約の証・・・」

呟くように、レムリアはエリアドの言葉を繰り返した。言葉がだんだんと反響を始める。この感じは、“夢見”の力が顯れてくる兆候だ。何かが見えるはず。何かが・・・何かが観えてきた。これは・・聖堂・・・?

「姫さま?」

契那に呼びかけられて、レムリアははつと我に返った。一瞬、意識が彼方に飛んでいた。

「・・・何がが、観えたわ。大聖堂・・・恐らく、そこに行けば手掛けりを掴めるかも知れない・・・」

「大聖堂ですね。聖水盤をお使いになるのでしょうか?」

「ええ。そう・・・聖水盤、を使うわ。聖水盤に姿を写せれば、色の変化によってその者の本性が露わになる・・・」

自分の言葉を自分で確かめる様に話すレムリアに、契那は微妙な躊躇いを感じた。

“気のせい・・・なの?”

人一倍、感受性が強い契那だから気が付いた事だったが、あまりに微かな兆候に、やはり気のせいだったのだろうと思つことにした。

「姫さま。大聖堂に入る為には、鍵が必要です。わたしのマスターがお持ちですから、借りて参りましょう」

「・・・そうね。じゃ、契那ちゃん。お願い出来る?」

「勿論ですとも」

拳を握つて笑顔を作る。

「一人では、万一一の時に何かあつては困るから セイ、あなたが契那ちゃんと一緒にアクティウムの所から鍵を借りてきて貰えます?」

先頭を早足で歩いていたセイは、レムリアに呼びかけられて振り向いた。

「判りました、姫君。必ずや、首尾良く鍵を借りて参りましょう」

「セイさま、お怪我は?」

「支障ない、契那。そなたの治癒の術で完治している」

契那はセイに頷くと、レムリアに向き直った。

「では、姫さま。大聖堂の大扉の前でお待ち下さー。直ぐに戻つて参りますので」

「宜しくね、契那ちゃん」

魔性の瞳・149 「幻視」（後書き）

〔20.11.09〕 文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「・・・お気をつけて」

そう言ってエリードは一人を見送ると、レムリアに向直った。

「・・・“大聖堂”に、何か手がかりがある、と？」

エリードは、レムリアの言葉に覚えた奇妙な違和感の正体を確めるべく問い合わせた。

「すまないが、その“大聖堂”という場所はどのよつなどころなんか、教えて貰つても構わないかな？　さきほど契那嬢が言つていた、この都や王宮を護る“結界”と何か関係がある場所なのかどうか。そして、その鍵を持っている者がアクティウム殿以外にもおられるようなら、どのような方々が鍵を持つおられるのかも聞いておきたいのだが」

「それは、私のほうから説明して方が良さそうだな」

それまで黙つていたハリーが合いの手を入れた。

姫君、宜しいですね、と尋ねられたレムリアはこつくり頷く。

「大聖堂は、この都の上の空中宮殿にある。王族の戴冠、誕生、告別式、祈念の四つにしか使われない、特別に清められた聖なる場所だよ。我々も滅多なことでは入れないのさ。そして、そこに都全体を守護する魔導結界の礎である胡老石（ELDER STONE）が置かれている」

「ここまでいいかな、とエリアドの顔を見ると、ハリー先を続けた。

「その胡老石（ELDER STONE）は、聖水盤の上に浮かべられている。そして、その聖水盤をのぞき込んだ物は、その本当の姿が聖なる水に映されてしまう。まあ、その人の本性つていうやつだね」

私も気を付けないとな、などと暢気に宣うハリー・ハウ。

「小物は、大聖堂の正面扉を抜けられない。よしんばそこを通れたとしても、聖水盤から自分を隠すことは出来ないんだよ」

「問題は、如何にして大聖堂まで相手を連れて行くかですね」

「そうだね。相手も警戒してるだろうから、それこそ一筋縄では行かないなあ」

魔性の瞳・150 「真姿」（後書き）

何時も更新をお待たせしてしまって恐縮です。「魔性」も、これで150話となりました。まだまだ先は続きますが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

〔20.11.09〕文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「・・・ふむ。“胡老石（ELDER STONE）”・・・です  
か」

エリアドは複雑な表情で、真紅の手甲 “炎の鎧” をじつと見た。漠羅爾<sup>パクラー</sup>旧王朝が盛んなりし頃、大地から生み出される強大な魔導力を注ぎ込んで創られた「大地の鎧」。

「・・・かつて、この“炎の鎧”を創り出す時にも使われたという、強大な“力”を秘めた古代の魔遺物（Ancient Relic）  
・・・」

記憶を手繕る様にエリアドは言葉を続けた。

「・・・残念ながら、あまり詳しいことは知らないのだが、“胡老石”には、何種類か属性のようなものがあると聞いたことがある。その空中宮殿の大聖堂にあるという“胡老石”も、そうなのか？」

そんなことを聞きながら、自分の中で次第に大きくなつてくる違和感が、いつたい何に起因するものなのか その疑問をエリアドはずつと思案していた。

「そうだ。大聖堂の胡老石には、“光”の属性がある。何より、この都を長きに渡つて護ってきた石だ。その力は強力無比だと言われているが・・・」

語尾を濁らせたハリーは、肩を竦めて続けた。

「・・・まあ、結界が保っているのだ。闇に抗する力は残っていると考えるのが妥当だろうが、どうもね、その認識で枕を高くして寝られる気がしないのさ」

「ハリーの言う通りですね。本当に結界が完全に生きているのなら、妖魔が侵入してくることはあり得ない話ですから」

ハリーの言葉を、レムリアが首肯する。

「確かに、どうにも腑に落ちない点が多くある。セイと契那ちゃんが戻つてくる前に、打てる手を全て打つておく必要があるね」「どうするのですか？」

「私の麾下の近衛軍と、セイ麾下の近衛騎士隊に臨戦態勢を取らせて、姫様。結界が撓められた時を狙つて、北の魔国が押し寄せてこないとも限りません」

口調を改めたハリーからは、先程の気安い遊び人の様な雰囲気が消えている。

「お兄さまとアクティウムには？」

「ひからいの意図と行動を伝えさせましょ」

ハリーの言葉に、レムリアの瞳が一瞬瞬いたかのようだった。何か言おうとして、その言葉を飲み込んだ。

「姫様。急いで大聖堂の大扉に参りましょ。セイと契那ちゃんも向かっているところだろうと思います」

「わかりました。ムーンシャドウさま、参りましょ」

レムリアはエリードを促すと、踵を返して大聖堂へ向かつて回廊を歩き出した。

魔性の瞳・151 「予兆」（後書き）

お待たせしました。魔性第百五十一話です。相変わらずの牛歩更新で恐縮です。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

〔20.11.09〕文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

セイと契那が謁見の間に着くと、ヴェロンティ三騎士が一、“慈悲”アクティウム・エパミノンダスは、まだヴェロンティの賢王アーサー・アートリムと話し込んでいた。

二人が広間に入つてくるのを目にしたアクティウムは、王に一礼して話に一旦区切りを付けると、セイと契那に向き直つた。

「契那にセイか。如何したか？」

「マスター、大聖堂の鍵をお借りしたいのですが？」

「ふむ、大聖堂とな。さほどの事態なのだな？」

アクティウムの問いに、セイが返答する。

「はい。この城に何者かが忍び込んでおります。先程も、姫君が部屋で妖魔に襲われました。無論、全て撃退致しましたが」

「む？ この結界に守られた奥津城に妖魔か？」

「はい。原因は、結界に乱れがあることだと推察致します。その為、大聖堂を調べる必要があると、我ら一致して判断致しました」

「“我ら”とは？」

それまで無言で話を聞いていたアーサー・アートリム王が口を開いた。

「はい、姫君、ムーンシャドウ卿、ハウ卿に不肖私めでござります。」

恭しく奏上するセイ。王は短く、そうか、とだけ言つと、後はまた口を噤んだ。

「陛下。事態を鑑み、大聖堂の鍵を彼らに貸<sup>ハシマ</sup>致します」

「よから<sup>ハ</sup>、許可しよ<sup>ハ</sup>」

「有り難き幸せ」

王の許可を得て、アクティウムは首に掛けていた銀色の鍵を契那に手渡した。

「確かに、お預かり致しました、マスター」

「では、姫君、ムーンシャドウ卿とハウ卿が大聖堂正扉で待つてありますので、これにて失礼致します」

深々と騎士礼を行うと、セイと契那は謁見室を辞去した。

セイと契那は、足早に大聖堂へ向かった。セイの長靴<sup>ロングブーツ</sup>の踵に付いた最上位騎士の証したる白金の拍車が床に当たつて回廊に煌めく様な音を散らした。

「セイさま」

契那は、脚を少し早めると、先を歩いているセイの隣に並んだ。

「もしも 大聖堂の大結界が毀たれたら・・・」

「即座に、北の魔国の知るところとなり、このシェンドルは戦火の渦に沈むだろ<sup>ハ</sup>」

「それだけは、絶対に防がなくてはいけません」

「無論だ。易々とフランースの宝玉と言われた我らが都を北の魔王に渡すつもりはない。たとえ……」

「セイさま?」

「……いや……。戯れ言だ。契那、聞き流せ。」

ふと見たセイの横顔には、一瞬怖い程の決意が浮かんでいた。

その表情を振り払うかの様に、セイは一層足を速めて先を急いだ。

先程、セイが一瞬見せた表情が契那には気になっていた。『ヴェロンディ三騎士』　　“慈悲の槍聖”アクティウム・エパミノンダス、“真実の目”を持つ武人ハリー・ハウ、そして“正義の聖騎士”セイ・フルム・バーナード。何れも、ヴェロンディ連合王国が誇る最高位の騎士達だ。

その三騎の中でも、セイの王家と国民に対する忠誠心は群を抜いていた。その清廉な外見と言動は国民からも絶大な信頼と支持を得ている。もつとも、直情径行で自分のことを顧みないセイは、三騎士の中でも一番不安定な存在でもあった。

“そんなセイさまが、あの秘技を受け継ぐなんて……”

先代の三騎士の一人で『光の使い手』であつたリスナル・リアンダーが、何故幾多の騎士の中からセイを自分の後継者として抜擢したのか　リスナル亡き今、真相は闇の中だが、契那には思い当たる点があつた。

“光の秘技は、使い手を選びますから……”

自らをも傷つけることがある『光の秘技』　　それは、リスナル

が現れるまで、長きに渡つて継ぐ者があらすじ封印されてきた禁呪でもあつたのだ。

“リストナルさまは、セイさまを『光の担い手』に選んだ……でもセイさまの心は、まだその重圧に晒されるこゝは堪へられん……”

心中で重い溜息を漏らすと、先に歩くセイの後を追つて、契那は足を速めた。

魔性の瞳 - 152 「秘文」（後書き）

〔2011.09〕 文章修正。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「ふむ。流石に堅固だな。聖都を護る結界だけはあるか」

酷薄な笑みを浮かべつつ、その黒衣の人物 ラ・ルは大聖堂に通じる扉に手を掛けた。だが、丁度その時 通路を急ぎ走つてくる足音を耳にすると、その暗い笑みを深める。

大聖堂前のホールに走り込んできたセイと契那は、大扉の前に立つ不審人物を目にすると、その場に立ち止まつた。

「おや。礼拝への参加者の追加かね」

余裕の笑みを一人に向けながら、ラ・ルは揶揄する様に言つ。

「何奴！！」

電光石火、聖剣ノルンを抜刀すると、セイは背後に契那を庇う様に前に立つ。

そんなセイを見ても相手は全く動ぜず、まるで世間話をするかのように話し掛けた。

「バーナード卿、ですな。音に聞こえた王国三騎士の一角で、恐れを知らない聖騎士もある」

「ここで何をしているか、と聞いている！」

相手の戯れ言には取り合わず、セイは舌鋒鋭く言い放つた。

「既に、ヴォロントイ王の御前で名乗っている筈だが？」「何者か、と聞いている… 偽名になど興味はない！」  
「勇ましい」ことだな

ラ・ルは鼻で笑つて言った。

「だが、相手の力量も測れぬとは 王國三騎士の名が泣くぞ」「何だと！」

「セイさま！」

「ええい、契那！ 止めるな！ 口で言つて判らぬと有りば…・・・」

「ほう。実力でこの我に勝とうと？」

面白い、とラ・ルは呵々大笑した。

「貴様が誰であるか、ここで何をしているかはもう問わぬ。答えられぬこと自分で十分だ」

セイの構えるノルンが光を放つて行く。

「どうやら、痛い目に合わないと己の立場が理解できない様だな。まあ、それも一興か」

「戯れ言をつ！？」

爆発的な瞬発力で前に出ると、セイはノルンを袈裟懸けに振り下ろした！

魔性の瞳・153 「接敵」（後書き）

魔性153話です。謎の人物ラ・ルが、いよいよその本性を見せます。猪突猛進のセイですが、どうなるでしょうか。続編にご期待下さい。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

『カキイインン！』

セイの必殺の一撃は、ラ・ルに難なく受け止められた。それだけではない。間髪入れずにセイが飛び下がつていなければ、相手の反撃を避けられなかつた。

「貴様・・・」

「避けたか。まあ、これ位は出来なればな」

相手をする価値もない、と冷笑する相手に、セイは奥歯をギリギリと噛みしめた。

「どうした？ 先程までの威勢は何処に行つた？」

揶揄する様な相手に、セイは一步も動けなかつた。最初の一撃の時とは全く違う 強烈な威圧を相手に感じる。

“何と・・・この私が・・・”

じりじりと、脚が下がつていた。無意識で有る故に始末が悪い。本能的に、相手に押されてしまつていて、セイは驚愕してい

た。

“今まで、何者と相対しても遅れをとることなど、なかつたのに・・・”

だが、事実は如何ともしがたい。

「どうした？ 来ないので有れば、こちらから行くぞ」

ふつと笑うと、その後に疾風が襲つた。目にも止まらぬその剣の軌跡に、セイは辛うじてノルンを晴眼に上げただけだった。

「……」

『力オオオンッ！！』

だが。鐘が鳴る様な高音が響くのと、その裂帛れっぺくの一撃は受け止められた。契那が両手を前に出し、セイを庇う様に立っている。

「ほう、魔導反発結界か。結界の厚みといい、詠唱の速度といい、たいしたものだな」

どこからか取り出したのか、長大な両手剣を振り切つたラ・ルは感心した様な口調で一人ごちた。

「だが、一度目はないぞ」

「それは、やつてみなければ判りません」

「ふむ。そなたも己を過信している輩の一人か？」

ラ・ルの口元に、皮肉な笑みが浮かぶ。

「まあいい。何れにせよ、次で仕舞いだ」

無造作に下段に構えると、ゆっくりと契那に向き直つた。とつさ

に肩越しに振り返るが、後ろに吹き飛ばされたセイは、壁に打ち付けられてがっくりと首を垂れている。

「いいでしょ。わたくしの力 みせて差し上げます」「それは重畠」

一呼吸、そしてその後に烈風が襲つた。

「Shilde hōchō!-!- (反発結界)」

後ろに飛びすさりながら、契那はその一瞬で張れるだけの魔導反発結界を多重に張つた。だが。

『バキヤツ！-!-』

その多重結界を苦もなく破つた烈風は、勢いを弱めることなく契那に迫つた！

「あつ・・」

全力を挙げた防壁を破られた契那には、迫り来る一陣の烈風がコマ落としの様に見えた。目を見開いて、その一瞬を待つ契那の瞳に、蒼い閃光が飛び込んだ。

『グワツキイツ！-!-!-』

「むつ？」

片眉を上げ、ラ・ルは自分の一撃を受け止めた相手を見た。

「よひ、契那ちゃん。遅くなつて悪いな

「やうと笑うのは、王国三騎士の一 角。“真実の田”と呼ばれる  
ハリー・ハウだった。ひゅん、と己が愛剣を一振りすると、契那と  
ラ・ルの間に入った。

「やはりあんたか。まあ、そういういかつて踏んでたんだけどね

「ハリー・ハウか」

「如何にも。だが、オレだけじやないぜ」

タインを引き抜いたレムリアと、後に続くエリアド・ムーンシャ  
ドウに顎をしゃぐ。

「ほひ。姫君に魔剣士か・・・

漸く役者が揃ってきたか、とラ・ルは口端を上げて笑つた。

珍しく今週末には仕事も何も入っていないので、更新をしました。危機一髪、ハリー達の到着で救われた格好のセイと契那ですが、味方が五人いても、底知れぬ力を持つラ・ル（R・L）に対して果たして対抗出来るのでしょうか。今後ともご期待下さい。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「ラ・ル殿……だったか。……どうやら、貴殿は相当、腕に自信をお持ちのようだ」

私はゆっくりと口を開いた。

「おやうへは、その自信の源となるだけの“力”もお持ちなのだろう？」

じつと相手の気をさぐる。怯えや不安は無論のこと、わずかばかりの動搖すら感じられない。

いや、むしろ感情そのものが感じられない、と言つべきか。

……だが、もしこれだけの者を一度に相手にして、無傷で済むと思つているなら、それはいささか過信と言つものではないか？

言おうとしていたその言葉を、しかし私は言わずに止めた。

「……いや。貴殿を相手に、そのような言葉など意味がない、か。

」

“……この男は、どこかこの世の“理”から外れたところにいるのではないか。”

そんな気がしてならなかつた。

「・・・これ以上やるなら、じきりも“本氣で”御相手させていた  
だかねばなるまい。」

修羅の鬪気が全身を包む。

“・・・阿修羅よ。”

私は、静かに虚空中に手を翳す。

この回は、エリシアードの一人称です。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「“闇の聖剣”を呼ぶか・・・」

エリアドの行動を見守りながらも、ククク、ともも画面そつた笑みを浮かべるラ・ル。

「呼ぶがいい。そして貴公がその“代”（しろ）を知るのであればな」

片手で軽々と持つた長大な両手剣が、禍々しい波動を放つ。それだけで歴戦の勇士であるセイもハリーも、脚が一步も前に出なくなる。

“なんて力だ・・・”

信じられない程の重圧は、それこそ“北の魔王”その者と対峙しているかの様だった。いや、幾多の修羅場を潜つたセイは思った。それ以上かもしれない、と。

“たとえそうであつたとしても・・・私は負けられない”

気組みで負けては是非もない セイは自分の心と精神を研ぎ澄ませた。

“ホントかよ・・・”

一方、ハリーも自分を叱咤していた。何時もの余裕が、まるで感じられない。妖魔を戦っている時すら、こんな感情を持たなかつた。それは、恐怖。底知れぬ相手にぶつかつた時に感じる絶望。

“何をびびつているんだ、オレは？”

セイや契那が頑張つているのに ハリアドや、レムリア姫が危険を顧みずに、相手に立ち向かつているのに。

“みつともない所、見せられないだろ！”

奥歯を噛み締めながら、ハリーは拳が白くなる程、愛剣ヴァンガードの柄を握りしめた。

“信じられない程の、力です・・・”

契那は、必死に意志の力を集めていた。必ず、また自分の力が必要とされる。何時でも、魔導の力を解放できる様、契那は必死に心を鎮めた。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

虚空に翳した手の中に、一振りの太刀が現われる。

灰色の簡素な鞘に収められた一振りの太刀。

“阿修羅”。

『創世の魔剣』とも、『永劫の剣』とも呼ばれる、遙か古代に創られた伝説の魔剣。

かつて、私が一千年の時の彼方、古代スールの地を訪れる事になつた折り、“灰色の預言者”天査その人から託された剣であつた。

私の手の中に音もなく出現した“阿修羅”的放つ波動に、男が怯む様子はない。

元より、“阿修羅”を目にした程度で男が怯むなどとは、少しも思つていなかつたが。

男の巨大な剣に比べれば、灰色の鞘に入った細身の太刀は、いかにも非力に見えよう。

しかし。

「・・・貴殿がこの場所に何をしにきたかは知らぬ。・・・だが、貴殿があの男を利用することで、結果的に、この国が窮地に陥るといつのであれば、このまま見過すわけにもいかぬ。・・・望みとあらば、試してみるか？」

それは、聞きよつよつては冷やかにさえ聞こえるほど、静かな声。

強大な“力”を持つであるつ、“敵”になるかもしけぬ相手を前に、不思議と緊張はなかつた。

・・・ただ、己が為すべきことを為す。

『己が信ずることを為すために、この剣を取るがよい。』

“阿修羅”を託された時の“灰色の預言者”的言葉が思い出された。

・・・この男は、ここにあるべき存在ではない。

何故かはわからなかつたが、そんな気がしてならなかつた。

今話は、エリアド視点の一人称です。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「魔劍“阿修羅”か」

ラ・ルの美麗な面おもてに浮かぶ冷笑は微塵も揺るがない。

「己が帶びしものの価値、果たして正しく理解しているのか?」

「ぶうん、と長大な両手剣が一転する。それだけでも、強大な威圧感が全員を圧迫する。

「ハリー、奴に仕掛ける。」

セイがハリーに囁いた。ハリーはセイに頷くと共に、契那にちらりと視線を振る。契那は、それに対しても小さく頷いた。

「参るつー！」

裂帛れつぱくの気合いを込めて、セイが爆発的にダッシュした。ラ・ルは真っ白な輝きを放つノルンに僅かに目を細めると、無造作にその長大な剣を横に薙ぎ放つ。だが。

『カオオオンツー！』

ラ・ルの剣は、セイを両断する所で契那の張つた反発結界に阻まれる。全力を使い尽くしてがっくりと契那は崩れ落ちるが、ラ・ルの剣が弾かれた僅かな間を使って、セイは急角度で躰捩ると

ラ・ルの左脇を抜けた。

「ふ・・・無駄なことを」

いつの間にか右手から左手に持ち変わった大剣がセイの進路を阻む。一撃を溜めようとしているセイは、僅かに後手に回ってしまう。その戦士が振るう光の剣と、ラ・ルの大剣が激突する。

「ヴァン・ガードつ！..」

ハリーの気合い一閃、セイとラ・ルの間に、光り輝く戦士が現れた。その戦士が振るう光の剣と、ラ・ルの大剣が激突する。

『ギイインッ！..』

辛うじて 本当に辛うじて光の剣は闇の大剣を退けると、闇髪入れずにセイの渾身の気合いを込めた剣が相手を切り裂く。

「“光芒つ！..”（ひかり、あれ）」

大地より天に至る輝きの軌跡は、見事闇を両断して周囲に金の粉を散らした。剣を振り切ったセイは、一三歩歩くとがっくりと地面に膝を着く。みれば、ハリーも肩で息をしている。

「やつたか・・・」

ラ・ルがいた所には、どす黒い闇の螺旋が渦巻いていた。その回転がどんどん速くなると、次の瞬間。

「あつ！..」

「うぐつ！」  
「きやあ！」

セイ、ハリー、契那の三人に向かって、目にも止まらぬ速度で黒い槍が螺旋から打ち出されると、三人の躰を貫いた。

「大地の力よ！」

叫んだレムリアが守護の聖剣タインを振るうと、地面が盛り上がりその黒い槍を両断する！ だが、三人は為すべくも無く地面に崩れ落ちると、その生命の血潮が周囲に流れ出す。

「ククク・・・無駄と言つたであるう？」

螺旋の中から、何事もなかつたかのようにラ・ルが現れた。その左手には、件の大剣が握られている。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

強大な“力”を持つ、おそらく“敵”になるであろう相手を前に、不思議と緊張はなかつた。

・・・ただ、己が為すべきことを為す。

『己が信ずることを為すために、この剣を取るがよい。』

“阿修羅”を託された時の“灰色の預言者”の言葉が思い出される。

・・・この男は、ここにあるべき存在ではない。

何故かはわからなかつたが、そんな気がしてならなかつた。

ゆえに。

私は、心の奥から湧き上がってきた、その呼びかけに応じる。

『・・・天空に風、大地に水、人心に炎』

いじえ  
“古の聖句”。

けして“聖句”を用いることによつて、特別な“力”を呼び出そ  
うと考へたわけではない。ただ、自らの心の奥にある“意思”を“

意志”として表わすきつかけとして、その言葉 ことだま 言靈 ことだま がふさわしいと感じたのである。

『・・・・古の盟約こいじやくによつて、我われに理りを乱ます者を正ただせん。』

私の中にその言葉がなぜ湧き上がってきたのかはわからない。しかし、それが間違つているとは思わなかつた。

「・・・・“阿修羅”よ。この者を、この者が本来あるべき場所に歸すため、我に“力”を貸し賜え。」

私は剣を抜き放つ。

今回も、魔剣士エリアドの視点からお届けします。余りにも強大な相手であるラ・ルに、果たしてエリアドの策は通じるのでしょうか？

ヴェロンティ 連合王国／王都／大聖堂

低く笑うと、ラ・ルは無造作に大剣を一振りした。ゴウ、と地響きが鈍く轟き、大聖堂を抱いた空中島ががぐらりと揺れる。

「無駄だ、と言っているのが判らぬとはな。」

人は何処までも愚昧なものだ、と結ぶ。阿修羅が古の聖句を受け  
て輝く中で、その浅い嘲笑は変わらない。

「古の聖句か。その本質を知らずとも、口端に上らせる程短慮なる  
か」

闇の大剣が、宙に軌跡を描く。

「闇より出し（いでし）、

影より深き。

時獄の彼方、

闇称聞こゆる。」

流れる様な闇句に、目映く輝かんばかりだった阿修羅の刀身が急速に曇つていく。

「ククク・・・闇に属するモノは、闇に還れ。自然な流れであろう?  
? 為す術も無く、己がモノが闇に落ちるのを観るがよい」

「魔性」の第百六十話をお送りします。「始まりの聖句」に対する「終末の闇句」が発動します。既に、セイ、ハリー、契那が倒れた後、エリアドとレムリアの一人でどう対処するのでしょうか？

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

セイ、ハリー、契那が倒れ伏し、そしてまた 最も頼りにして いた魔剣“阿修羅”的力が急速に失せていく。状況は、レムリア達 にとつて絶望的だった。

冷笑を浮かべたラ・ルが持つ大剣が、闇句を受けて禍々しい闇の 色を帯びる。

だが。

「させないっ！！」

裂帛の気合いを込めて、レムリアが叫んだ。今まで大事に守られ てきた彼女だが、セイとハリーに鍛えて貰った剣の腕は確かだ。 レムリアは、その纖手が白くなる程タインの柄を握り絞める。そ の黒く深い双眸の奥には炎が燃えている。

「古の時代に育まれた理に従い、我が今汝を呼ぶ。大いなる“祖父” よ！ 我の問い掛けに応えよっ！！」

ギンツ！！ とタインが目映い閃光を放つ。同時に、凄まじい雷 鳴の音が大聖堂を振るわせる。

“たとえ、我が身に何が起ころうとも・・・”

ともすれば、手の内から飛び跳ねようとするタインの荒れ狂う力 に翻弄されながら、それでもレムリアは強く思った。

“・・・今、アレを解放させれる訳には行かないつ”

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

『闇より出し（いでし）、  
影より深き。  
時獄の彼方、  
闇称聞こゆる。』

その男<sup>ラ・ル</sup>の発した闇句に“阿修羅”の刀身が輝きを失つてゆく。

『闇に属するモノは、闇に還れ。自然な流れであるつへ。』

・・・その彼の言葉は、少なくとも“まつたくの嘘偽り”といつ  
わけではあるまい。

それは、けして私の中にある“迷い”や“弱氣”がそう思わせた  
わけではない。

・・・しかし、それはまた完全な“真実”というわけでもない。

私の中で、何かがそう囁く。  
ささやく。

・・・そう、物事は、その視点によつて見え方が変化する。  
・・・大地に、太陽<sup>リガ</sup>に照られた“昼”と闇に包まれた“夜”が

あるように。

古の聖句が“光”をもたらすのであれば、闇句は“闇”をもたら  
す。

・・・それは、あたりまえのことなのだろう。

「いつこう言い方をすると傲岸不遜に思われるかもしないが、不思議と“闇”そのものに対する恐怖は感じていなかつた。あるいは、それは私の信奉する“星々と放浪者の神”たるセレスティアンが、深遠なる宇宙の闇の彼方を、探索し続ける神であるせいだつたのかもしれないし、かつて“魔剣士”として“阿修羅”的持つ“闇”的一端に触れたことがあるせいだつたのかも知れない。

確たる答えはわからなかつたが、

“阿修羅”は、“光”に照らされるだけの存在でも、“闇”に包まれるだけの存在でもない。

“阿修羅”的本質は、“光”に照らされようと、“闇”に包まれよう、変わるわけではない。

それは、確かにここに思えた。

・・・むしろ、問題は私自身の中にある。  
・・・そう、私自身の中にある“闇”に、私自身が呑み込まれるにいられるかどうか。

・・・私一人なら、あるいは・・・

という考えが浮かばなかつたと言えば、嘘になる。

それは、おそらく私自身の中にある“闇”的誘惑に他ならない。

だが・・・。

『させないつ！』

耳に飛び込んできたその叫びに、私は冷静さを取り戻す。

『古の時代に育まれた理に従い、我が今汝を呼ぶ。大いなる祖父よ！ 我の問い掛けに応えよつ！』

その言葉には、彼女の意志と決意が感じ取れた。

・・・もし私が“闇”に呑み込まれてしまえば、彼女は自らの“命”さえ賭けかねない。

そんな“危うさ”さえ、感じられる。

そして、その彼女を守るためなら、セイとハリー、契那の三人もまた、躊躇いなく“命”を投げ出すだろう。

それが不本意ではなかつたと言えど、嘘になる。・・・残念だが、私はそこまで出来た人間ではない。

しかし、私一人の力では、いささか荷が克ちすぎるといつ事實を認めざるを得ないようだつた。

「・・・レムリア。」

それは、けして叫ぶよつた声ではなかつた。

「・・・セイ。ハリー。契那。」

しかし、ありつたけの意志と決意を込めて、私は彼らに呼びかけた。

「……すまぬ。……どうやら私一人では、いささか荷が重いようだ。

……頼む。少しだけ力を貸してくれ。」

……セレスティアンよ。星々の導きと加護を、彼らに。

祈りを込めて、私は心の奥に創り上げたそのイメージを飛ばす。

……セイに。……ハリーに。……契那に。そして、レムリアに。。

闇に包まれた夜空に浮かぶ欠けた月。傍らで小さく瞬く星々。そのわずかな明かりに照らし出された夜の草原。

「……天空に風。」

私は今一度、古の聖句を唱和する。  
草原を吹き抜ける一陣の風。

『大地に水。』

緑豊かな草原を流れる清流のせせらぎ。

『人心に炎。』

草原の片隅に佇む（たたずむ）古い漠羅爾風の御堂。そこに灯る小さな明かり。

一振りの太刀を手に、私はその御堂を囲む四門（“心”“技”“体”とその三位一体によつて導かれる“力”の扉）をゆっくりと押し開く。

月明かりと星明かり、そして、御堂の中の小さな灯火が、手にした灰色の太刀を照らし出す。

『・・・古の盟約によりて』

それは、遙か一千年の“時の彼方”。

『今一度、私は誓う。』

初めて“阿修羅”を手にした時の“想い”が蘇る。

『我に理正を呪す者を正せん。』

それは、私と“阿修羅”との、“誓い”的言葉。

「魔性」 第百六十一話をお届けします。今回も、エリシアードの視点からになります。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「心得た」

短く言うと、セイは聖剣ノルンを支えに立ち上がった。瞳を細めて相手を睨み付ける。

「エリアド、援護する。存分にやるがよい」

わざわざと言い切ったセイは、清々しい表情を浮かべていた。

契那は虚脱感と戦いながらも、なんとか立ち上がった。三度に渡る反発結界の使用による疲労が、全身を覆っている。

「しつかづしなさい……。今……せりないで、こいつをやるとこいつのですか」

自分を叱咤すると、歯を食いしばって軀に残る最後の力を振り絞つた。

「エリアド様……私の力を送ります……」

ハリーは首を振つて氣をしつかり保つと、ゆっくりと立ち上がつ

た。守護の剣、ヴァンガードを握りしめる手が震えていたのを見て、苦笑する。

「似合わないねえ、こんなのは。と言つ事で、早いトコかっこ悪いのは終わらせないとね」

周囲を見ると、セイも、契那も立ち上がりしている。エリードの前には、レムリアが田畠い輝きを放つタインを構え、真っ向からルに向き合っている。

「エリード殿。援護するので、頼んだよ」

レムリアは、タインを手に最後の力を振るおうとしていた。すんでの所で、エリードの声を聞くと、暴走する力を押さえよつとする。

『この力を、皆さとを守る為に使わなければ……』

精神が焼き切れよつとする中で、レムリアはあつたけの氣力と振り絞つた。

魔性の瞳・163 「起」（後書き）

お待たせ致しました。「魔性」第百六十三話です。起死回生はなるのか。それは、次回をお楽しみに。

ヴェロンンティ連合王国／王都／大聖堂

月明かりと星明かり、そして、御堂の中の小さな灯火が、手にした灰色の太刀を照らし出す。

どこからともなく聞こえてくる、透き通った静かな旋律。それは豎琴のようであり、笛のようであり、そして、歌声のようでもあった。

遙か遠くから聞こえてくるようであり、またすぐ近くから聞こえてくるようでもあった。

それはさながら、“阿修羅”が歌っているかのようであった。

・・・“阿修羅”よ。・・・これは、おまえの声なのか？

それが他者の目にどのように映っていたかはわからない。

しかし私には、“阿修羅”を覆う“光”と“闇”的せめぎ合ひの様子は、あたかも無数の星々が生まれては消えゆく宇宙の一部をそのまま切り取ったかのように感じられた。が、やがてそれは静かに消え去り、“阿修羅”は元の落ち着いた灰色の姿を取り戻す。

何の変哲もないくすんだ灰色の太刀。あるいは、それが“阿修羅”的の本当の姿なのかもしれなかつた。

「……」この太刀を“闇”に属するものとしか思えぬうちは、貴殿<sup>あなた</sup>は、私と“阿修羅”に勝てはせぬ。」

手にした“阿修羅”をゆっくりと腰溜めに構える。

「……参る。」

次の瞬間、地を這うように低く跳躍し、一気に相手の懷に飛び込むと、真一文字に横薙ぎに振り抜く。

迷いのないシンプルな動き。しかし、その速さは間違いなく、それまでの私の一撃の中で最速だったはずだ。

あるいは、それは私の背中を押してくれる仲間たちの“力”があつたせいなのかもしれなかつた。

ヒリアードの、信念を込めた一撃は、相手に届くでしょうか・・・。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「・・・ククク・・・」

手応えは確かにあつた。阿修羅の一撃は、間違いなく相手を両断した筈だった。だが、低い嘲笑の笑いは絶えなかつた。

「ククク・・・定命の者の力が如何程の物か。そうと知れば、それがはなから無駄無為な行動をと知るが良い・・・む？」

訝しげにラ・ルは周囲を見回した。天空から、恰も羽雪が如く舞い落ちる様に、光の煌めきが降つてきていた。仰ぎ見れば、大聖堂の天井が一面光の海となつてゐる。

「なんと・・・」

静かな旋律が流れていった。阿修羅が無言の波動に重なるように、その旋律は徐々に強く響きわたる。それは心を支え、躰を暖め、意志を強めて行く。

ラ・ルは驚愕に目を見開くと、煌めき降る天を睨み付けた。

「・・・貴女が手を貸すといふのか？ “心の護り手”たる貴女が？」

ふつと笑うと一つ息を吐き、ラ・ルは己が禍々しい黒の大剣を背後にすっと仕舞つた。斬撃の姿勢で立つエリアドと、彼を護る様に

立つレムリアを見る視線からは、既に先程の動搖の色は感じられない  
かった。

「邪魔が入った。今宵はここまでとしよう」

ぐるりと一人に背を向けると、ゆっくりと大聖堂入り口に向かって歩き出した。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

手応えは、確かにあった。しかし、“阿修羅”に両断されたはずの男が浮かべた嘲笑の笑みが絶えることはなかった。

・・・“幻影”か？・・・いや、それはあり得ぬ。

そう、“阿修羅”を手にした私には、“幻影”を始めとする精神に働きかける魔法の類いは通じない。

しかし、そう思つていてさえも“幻影”ではないかと疑いたくなるほど鮮やかな手際だった。  
少なくとも、私の目には男が傷ついたよつこは見えなかつた。

もし私の手に残つたその感触がなければ、そして、私の手に握ら  
れていた剣が“阿修羅”でなければ。  
あるいは、私はそれが“幻影”の類いを使つたトリックだと信じた  
かもしれない。

しかし、私は自分の手に残つたかすかな感触と、そして、“阿修羅”を信じていた。

もしそうだとすれば。

・・・傷を受けなかつたのではなく、受けた傷を瞬間的に再生し  
たとでもいうのか？

とはいえ、私の知る限りにおいて、“阿修羅”によつて受けた傷  
は、再生できるよつなものではない。

そして、もしそれが間違つていないとすれば。

・・・それは再生などという生易しいレベルのものではないという  
ことになる。

あるいは、失われた部分を瞬間的に創り出したとでもいつべきか・  
・。

それは、まさに定命の者<sup>モータル</sup>の技ではあり得ない。

だが。

・・・そんなことが本当にあり得るのだろうか。  
この男が、定命の者<sup>モータル</sup>ではない、などと言つことが・・・。

いや、仮にそうであるとしても。

むしろ私がまだ“阿修羅”を使いこなせていない。  
そう考へるべきだらう。

・・・すまぬな、“阿修羅”。

私は、浮かんだ疑念を頭の中で打ち消す。

いざれにせよ、このラ・ルという男は、こちらの想像以上に厄介  
な相手だといつことだけは間違いないようだつた。

しかし。

幸いにして、といふべきか。その男の浮かべた嘲笑の笑みも、そ  
う長くは続かなかつた。

『 い、これは・・・』

まるで阿修羅の奏でる無言の旋律に重なるように、どこからともなく響いてきたもう一つの旋律が男の笑みを止める。

『・・・貴女が手を貸すといつのか？ “心の護り手”たる貴女が？』

男の呟いた言葉の意味は、しかし、その時の私には想像することができなかつた。

『邪魔が入つた。今宵はいじまじよつ。』

その男の言葉に、 “場” を支配していた空気がかすかに緩んだような気がしたのは、けして氣のせいだけではないだろう。

「・・・それは残念だ。」

いや・・・、僥倖だと考えるべきなのだろう。

そう、おそらくこの男の相手をするのは、けして容易なことではない。

もし仮に、この男が定命の者モータルではなかつたとしても、 “阿修羅” を使ってただの一矢すら報いられなかつたのだとすれば、それが悔しくないといえば嘘になる。

・・・しかし、あるいは “阿修羅” を使っこなせて、ようやく同じ戦場に立てるかもしだれぬ、といったところか。

あちらにしてみれば、おそらく今の私たちなど、歯牙にかける必

要するに程度の相手なのかもしれぬ。

そんなことを思つたが、口をついて出た言葉は違つていた。

「・・・だが、願わくば、このまま本来の居場所にお戻りいただきたいものだ。・・・貴殿は、かの御方と同じく、この世界　いや、少なくとも今ここに在るべきではない。・・・理由はわからぬが、そんな気がしてならぬ。」

私は男を見据えて、そう応じた。

もちろん、そのまま素直に引き下がるような相手だとは、あまり思つていなかつたが。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

光が瞬くように、金の粉となつて降り注いでいた。仰ぎ見た天には、眩いばかりの蒼い輝きで満ちていた。莊厳なるも、心に染み込むような天上の旋律が、全てを癒していく そつと、レムリアは膝を着いた。

泣きたくなる程の郷愁と、包み込まれるような暖かさには覚えがあつた。そう あれば、タインの広場のこと。この“蹟聖の剣”である『タインの剣』を授かつた時を思い浮かべた。和と智を司る、銀の髪の乙女 その人に相違なかつた。

「これは・・・“始源の光”・・・」

放心した様に光り輝く天を見上げ、契那も呟いていた。全てを包み込む様な、慈愛に満ちた旋律が大聖堂を振るわせている。

「・・・ええ。これは、“銀の乙女”<sup>たまもの</sup>の賜です・・・」  
「・・・“銀の乙女”か・・・」

微笑みを浮かべ、レムリアとセイは言葉を交わした。

「傷が治つていいくよ。凄いものだね、“乙女の祈り”は

ふう、とハリー・ハウは大きく息をはいた。

「おや。黒の大将も何時の間にか姿が見えなくなつているな

」の光の中じゃ無理もないか、とハリーは皆に笑いかけた。

「さて、傷も治った事だし。早速事後処理と行こうか」

「判った。貴殿と契那で陛下とアクティウムに報告を。敵を手引いたのはエルド男爵だとな。それに、城内にまだ手の者がいるやもじれぬ」

「対応策を奏上しておくよ。お前さんは？」

「レムリア殿と二人で結界の具合を確認しておく」

セイの言葉にレムリアは頷いた。

「終わったら、私も後を追う」

「判った。じゃ、契那ちゃん、行こう」

「はい、ハリーさま」

ハリーと契那は、急ぎ足で大聖堂を出て行つた。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

男の姿は、まるで闇に溶けるかのよつてゆつて消えていった。

・・・少なくとも、しばしの時は得られたといふことなのか？・・

立ちぬく私を残して、ハリーと契那が大聖堂を後にする。

・・・それにしてもあの“旋律”はいつたい・・

“樂園の泉”。今にして思えば、私がその“旋律”を耳にしたのは、その時が初めてだったのかもしれない。契那嬢の言つ“始原の光”のせいか、あるいは“阿修羅”的旋律に重なるよつて響いてきたもう一つの“旋律”。“樂園の泉”的なのが、“阿修羅”を抜いた後特有の全身の“力”を使い果たしたような虚脱感は感じられなかつたが、とはいへ、まったく疲労を感じていなかつたといえば嘘になろう。

『古の盟約によりて』  
『我ここに理を乱す者を正せん。』

・・・“聖句”になぞらえるよつて“誓い”を口にしてみたものの、私一人の力では、おそれらあの男を退ける」とさえできなかつただう。

『己が信ずることを為すために、この剣を取るがよい。』

・・・我が師天査。私は、あの時の“誓い”を果たせるようになれるだろつか。

思わず、誰に言つともない微かな呟きが口を着いて漏れた。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「姫様。そちらは如何でしょうか？」

「こちらは、大丈夫なようです」

大聖堂に残ったセイとレムリアは、注意深く結界石と、その置かれた台座を調べた。あれほどの変異にあつたにも拘わらず、全ての結界石は無事であった。

「大事が無くて良かつた。この結界石に何か有れば、都全体の守護にも問題が起ころう所です」

「現時点の状況では、それは致命的ですね」

「そうですね」

セイは、ほつと胸を撫で下ろした。大聖堂の結界は、都の守護と防備をも担つている。これが機能しなくなると、ションドルの都は魔導的に無防備になつてしまつ。

「よし。ここは問題ない。ハウ卿と合流致しましょう」

そつとレムリアはエリアドを見た。深く思考に沈降しているのか、エリアドは全くその視線に気が付かない。

“邪魔しない方が、いいでしょうね”

そう思つと、レムリアは静かにセイに頷いた。

「行きましょ、セイ」

ヒリアドを大聖堂に残して、セイとレムリアは謁見の間に向かつた。

ヴェロンンティ連合王国／王都／騎士総帥の部屋

「……エルド男爵が、敵を手引いたと？」

神槍『カラダム』を担う王国最強の騎士、アクティウム・エパミノンダスは、契那とハリーからの報に接しても、些かも動じなかつた。

「はい。男爵が引き寄せた相手は、恐ろしい闇の使い手でした。我ら全員が束になつてもかなわぬ相手でした」

先の戦いを思い返すと、契那は躯が震える思いだつた。

「でも、あんな助けが入るとは思わなかつたね」「助けとは？」

「彼の永遠の聖女、全ての者の永久なる憧れ、安寧と融和の象徴……」

・

芝居がかつた様に言つるのはハリーの癖だ。

「早くおっしゃつて下さい、ハウ卿」

まつたくもう、と契那がハリーを即した。

「はいはい。“銀の髪の乙女”ですよ、アクティウム。間違い有りませんね」

「なんと……」

「はい。天空から光の輝きと共に“樂園の泉”が聞こえて参りました  
た。闇の使者を退け、我らの傷すら癒してくれました」

「ふむ・・・」

アクティウムは暫し思案した。

「・・・斯様な事は、“銀の髪の乙女”が“白の聖者”と“炎の聖  
騎士”と天空の彼方に旅立つて以来のことだ。さすれば、さほどに  
も事態は深刻であると言つ事か・・・」

「予断は許しません。すぐに騎士達を呼集し、即応体制を整えるべ  
きと愚考します」

一転、真面目な口調でハリーが言った。

「私もそれが必要だと思います。この国で最も守護の力が強い大聖  
堂にまで進入する相手です。用心にこした事はありません」

契那もハリーに同意する。二人の言葉に、アクティウムは頷いた。

「判つた。国王陛下には、私から報告申し上げよう。ハリー、セイ  
にも話して、早速近衛軍と近衛騎士隊を臨戦態勢にするよう指示  
「了解しました！」

ハリーも王国三騎士の一人。締めるべき所は心得ている。拍車を  
鳴らしてアクティウムに騎士礼をすると、失礼します、と述べて退  
出する。

「契那、陛下の元に行こう  
「はい、マスター」

ハリーが出て行つたのとは反対側の小さな扉を潜つて、一人も騎士総帥の部屋を出て行つた。

「魔性」百七十話です。ヴォロンティ連合王国に忍び寄る暗い影。それが徐々に明らかに成っていきます。今後ともご期待下さいませ。

ヴェロンディ連合王国／王都／謁見の間

「なんと・・・強大な闇の使い手か」

王宮、謁見の間。アクティウムと契那は謁見の間に赴き、ヴェロンディ連合王国国王であるアーサー・アートリムに今までの状況を奏上していた。

「契那たちが遭遇した相手 陛下、あれはもしや闇そのものかも知れませぬ」

「闇そのもの、か・・・」

幾多の死線を潜つてきた、さしものヴェロンディ国王もその表情を暗くした。闇そのもの、とまで形容される存在など、“彼の者”以外には考えられない。

「やつかいなことになつたな、アクティウム」

「御意。北の国境線への攻撃も想定して、最大限の警戒が必要でしょう」

「あの・・・」

躊躇いがちに、契那が口を開いた。

「何かな、契那」

「・・・はい。あれだけの闇の使い手です。直接、この都を突く事も有り得ます。大聖堂の結界さえ破れば都の防備は無いも同然です」

「ふむ。だが、先程の話では、セイ、ハリーとそなたの三人で掛か

つても、相手を阻止できなかつたのではないか？」

「仰る通りです。相手が都を攻撃するならば、確実に大聖堂の結界を狙うでしょう。その弱点が、わたしたちにとって最大の利点ともなります」

決然とした表情を浮かべると、契那ははつきりと言い切つた。

「待ち構えるのか？」

「背水の陣ですけれども、確実に待ち受けられます」

契那の言葉に、国王アーサーはそうだな、と頷いた。

「皆には負担を掛ける」

済まない、と頭を下げた国王に、契那は慌てた。

「陛下、その様なことは為されないで下さい。國と民を守ることそれが、私たちの務めなのですから」

「契那の言う通りですぞ、陛下。我ら戦士は斯様な事態の為にあります。お気になさらぬ様に」

契那とアクティウムの言葉を聞き、ヴェロンディ国王アーサー・アートリムは、暫し愁眉を解いた。

魔性の瞳・171 「対応」（後書き）

一部、欠落していましたので、追加しました。 [ 31 · 12 · 2  
009 ]

ションドル／王宮／謁見の間　近衛軍本營

謁見の間を辞したハリー・ハウは、足早に王宮の正面玄関から外に出ると、隣の館に急いだ。その館　と言つよりは小規模な“城塞”と言つた方が早いのだが　それは、周囲に水堀を巡らせ、正面入口に跳ね橋さえ掛かっていた。王宮にそぐわないこの館こそ、王都ションドルの最終防衛を担う精銳近衛軍の本營であつた。

「やあ、『苦勞様』

こんな時でも、ハリーは入口を固める近衛兵に声を掛けるのを怠らない。その気さくな態度と相まって、ハリーは近衛軍の将兵から絶大な信頼を得ていていたのだつた。

「司令官、如何致しましたか？」

不意に帰館したハリーを、副官アーウィンが出迎えた。

「仕事だよ、アーウィン」  
「出撃ですか？」

飲み込みと反応が早くなれば、ハリーの副官は務まらない。その点、若年ながらこのラルン・アーウィンはハリーが（密かに）評価するだけあつた。

「すぐにはじやないけどね。総員、出撃準備だよ」

「了解です。当直の第二連隊は即応可能。第一、第三、第四連隊は

三十分で即応準備します」

「オッケー。糧食は三日分を持たせて。それ以上の補給で対応準備させておいてね」

「作戦行動の準備は整っています。一週間は即応可能です」

「上出来。オレはまた戻らなきやならないんで、あとは宣しく」

「伝令を三人付けます。」指示は迅速にお願いします」

「わかった。じゃ、また後で」

眞面目に敬礼するアーヴィンに適当に手を振ると、ハリーは近衛兵三人を連れて本営を出た。

ヴェロンティ連合王国／王都／謁見の間

「失礼致します」

ヴェロンティ国王、契那、アクティウムの三人が話している大広間に、ハリーが戻ってきた。ハリーに付き従つてきた近衛兵三名は、入口脇に直立不動で待機する。

「陛下。近衛軍、半刻で出動準備が整います」

「ご苦労だった、ハウ卿。近衛軍は、機動投入部隊として、王都防衛の第一軍を支援する様に。」

「御意。」

一礼して、ハリーは国王アーサーの指示を承った。

「陛下。バーナード卿の近衛騎士隊は、大聖堂周囲の警戒に着かせる事が肝要かと思います。」

「近衛だけで足りると思うか?」

アクティウムへの国王の問いかけは自明だった。セイが如何に努力しようと、近衛騎士隊で使い物になるのはせいぜい三分の一だからだ。残りを占める貴族の子弟たちは、自分の身を守ることすら覚束ない。

「いいえ。陛下直衛の親衛王騎士の投入も必要と考えます。バーナード卿と親衛王騎士達に、大聖堂正面の扉を任せるのが宜しいかと。

ロイヤルガード

「わかつた。その様に、取りはからつてくれ  
「御意。陛下のお身柄は、不肖当職と、契那でお守り申し上げます  
「それは心強いな。だが、出来る限り足手纏いにならないようにし  
よつ。」

そう言つと、アーサー・アートリムは薄く笑つた。  
名だたる剣豪に鍛えられ、幾多の冒険で実地訓練を積んだ国王の  
剣技の腕自体は、王国三騎士であるセイヤハリーに準じる水準だつ  
た。だが超常的な相手だと、幾ら剣技が優れていようが分が悪い。  
ヴェロンディ広しと言えども、その様な相手に対しても十全に対処  
できるのは王国三騎士筆頭にして、神槍“カラダン”を担うアクテ  
イウム・エパミノンダス　この人だけだった。

魔性の瞳・173 「対処」（後書き）

「魔性173」をお送りします。今年の「魔性」は、これで打ち止めです（笑）。来年も、「魔性」を宜しくお願ひ申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂 回廊

無人の回廊に一組の足音が響いている。一つは、柔らかく、一つは堅く レムリアとセイは、急ぎ王宮の謁見の間を手指して先を急いでいた。

セイの心には、先程からちらちらと揺れる疑問が渦巻いていた。あの者 あの者は、姫様は一体どう思っているのだろうか？ 鬼に角、聞いてみなければ答えも出ない。気が進まない乍らも、セイは一抹の不安をも払うべく行動を起こした。

「姫様、あの・・・」

セイにしては珍しく、歯切れの悪い切り出しだ。

「姫様とあの者は、如何なるご関係でしょうか？」

「あの者？ エリアド様のこと？」

「はい。」

斯様な事態で、謁見の間に向かっている状態で、おかしな話をしている、そんな感じはあつたが。セイの心配も理解できるレムリアは、慎重に言葉を探した。

「わたくしの独り善がりかも知れませんが…互いに心を開ける方だと、思っています」

「お互いに理解できると？」

「理解、では無いかも知れません。同情でも、お互いに支え合つ、

でもありますん」

「では、どの様に？」

レムリアの言葉に、セイは些か困惑した。そんなセイに、レムリアは柔らかい笑みを浮かべて言った。

「自分をさらけ出しても良い、そつ思える方、ですね」「・・・」

自分をさらけ出す　　その言葉が胸に染み込むにつれ、セイは目を見開いた。心を開く？　斯くも排他的な姫様が・・・心を開く・・・？

“それが本当に有れば・・・”

「人は、出来るだけ自分を綺麗に見せようとする。でも、光と闇の申し子である人は、その内面に葛藤と矛盾を抱え込んでいる。どんなに表面上取り繕つても、内面は誰にも判らない・・・」

「・・・その判らない、いえ判らせたくない内面を、姫様はあの者が知ることを良しとすると・・・」

「そうですね・・・」

レムリアの心中でも、葛藤が残つていないと言えは嘘になる。だが、レムリアは表層に浮かび上がつたものよりも、心の奥が感じていることを信じようとしていた。

「・・・相手に自分を晒すのは、自分を捨ててしまう様な事にも思えます。けれども、わたくしのすべてを知つて貰いたい、全てを知つて、その上でどうされるかを決めて貰いたい　　そつ想つのです」

わたくしの、我が儘かも知れませんが、トレムリアは結んだ。

魔性の瞳・174 「氷解」（後書き）

大変お待たせしております。魔性の174話をお送りします。年  
度末でどうにも多忙で、4月一杯更新不順きち続けます。恐縮です  
が、気長にお待ち頂ければ、と思います。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

全てを知つて欲しい そんなレムリアの想いは、セイには理解しづらいことだった。他人に自分を晒け出しが、どれだけ勇気のいることは理解できる。だが、レムリア姫が、どうしてそこまでしてあの魔剣士を信用するのかが、セイには判らなかつた。

「姫様、不躾ながらお尋ねします。姫様は、如何ほどムーンシャドウ卿をご存じなのでしょうか」

「どうして信頼するのか、セイはそれを疑問に思つたね」

「どうにも判らない そんな想いを込めて、セイは頷いた。

一つ嘆息すると、レムリアは続けた。

「・・・そうすべきと感じた、と言つても、セイは納得してくれませんよね」

「何故か納得させて頂きたい、とこゝのが私の我が儘である」とは承知しております。しかし・・・」

普段、過激なまでに直接的なセイにしては珍しく、一旦言葉を濁した。そんなセイの心情を察してか、レムリアは自分で言葉を続けた。

「わたくしが誰かに依存してしまつてゐるかも知れない わたくしの心の弱さ故だと。それが気になるのですね」

「姫様・・・」

「この様な言い方で「めんなさい」でも、セイの懸念も判ります。

わたくしの心が弱まり、他人に付け込まれることがあれば、都の結界に容易に穴が開く。その様な事態は、どうあっても避けねばならなりません」

セイは言葉が出なかつた。そんなセイに、レムリアは微笑みかけた。

「理解して貰うのは、難しいと そう思います。でも、信じて下さい。この国を危うくするくらいなら、わたくしは自らを処分いたします」

毅然と、レムリアは言い切つた。

「その、覚悟は出来ています」

「姫様・・・」

何故こんな事を問うたのだろうか。セイは、迂闊な自分の失言を深く悔いた。責任感が人一倍強いこの姫君が、何というかは十分予測出来た筈なのに・・・。何の為の王国三騎士か。誰を守る為に、騎士に志願したのか。

「ごめんなさいね、何処までも、わたくしの我が儘で、」

「姫様っ、そんな！ 我が儘だなんて仰らないで下さい！ 私が余計な事をお尋ねしたからいけないのでです！」

「いいえ。わたくしが為に、国を危うくしている事は事実です。エリアド様の事が無くとも、わたくしは、自分の身の振り方を考えねばならない時期に来ていたのだと、思っています」

だから、今のことには気にして下さい そう結んだレムリア  
は微笑んだ。セイは、その笑みに深い悲しみと諦めを感じ取り、心  
中愕然とした。

魔性の瞳・175 「処断」（後書き）

大変長らくお待たせしてしまっております。魔性175をお送り致します。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

「セイ、今は先を急ぎましょ」

後悔の念を一杯に浮かべたセイに、レムリアは努めて優しく言うと、脚を早めた。

「判りました、姫様。」

しかし、と続けようとした自分を制して、セイは頷いた。確かに、今は優先すべき事がある。セイは、気を取り直してレムリアの後を追つた。

「おっ？ 姫様にセイ！」

次の角を曲がれば謁見の間という所で、数名の騎士を連れたハリーにぶつかった。

「ハリー！ どこへ行くのか！」

「大聖堂さ。どうも、あそこが一番きな臭いからね」

セイが見ると、ハリーが連れている騎士達は何れも緋色のマントに金色の“護王位”の紋章をついている。これは数居る近衛騎士の中でも、特に選ばれた指折りの親衛王騎士ばかり。

「最精銳を投入か。陛下のご指示か？」

「そうだよ。陛下は、アクティウムと契那が直衛に入っている。近

衛軍も動員済みさ。下手すると、ここに直撃がある

「何と……」

その時。ジクンと身を震わせてレムリアが今来た方向を振り返つた。

「姫様？」

訝しげに聞くセイに、レムリアは蒼白な表情で叫んだ。

「セイ、ハリー！ 大聖堂に、何か、何か迫ってきます！」

セイとハリーは一瞬顔を見合せた。

「サイラスっ！ 陛下とマクティウムに報告しろ！ オレはセイと一緒に大聖堂に行くっ！」

「判りました、ハウ卿！」

騎士の一人が踵を返すと、謁見の間に向かって走つていった。

「残りは、オレとセイと一緒に来いっ」

「わたくしも行きます！」

決意を秘めたレムリアに、ハリーは笑みを浮かべて言った。

「端から戦力に計算しておりますよ、姫様」

「ハリー！ 行くぞ！」

セイが走り始めた。近衛騎士達がその後に続く。レムリアとハリーは互いに一つ頷き合つと、セイと近衛騎士達の後を追つた。



**魔性の瞳・176 「具現」（後書き）**

超低速の更新ですが、魔性176をお送りします。他のお話しも（残念ながら）全て停滞しておりますが、時間を見つけて、細々とは書いておりますです、ハイ。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

“・・・あの男、・・・ラ・ルといったか。いつたい何者なのだ・・・”

大聖堂の扉を前に、エリアドリ aつい先ほど対峙した相手を今一度思い出していた。

“・・・そう。あの男は、これまでに私が相対した何者よりも強大な“力”を持つているように感じられた。

そして、その強大な力の持ち主を退けた、あの旋律・・・”

「・・・世界は謎に満ちている・・・か。」

かの人物が去つたとはい、この場を無人にしたいとはあまり思わなかつた。

とはい、この場にいて何かできるわけでもないのもまた事実。

“・・・今、私は何を為すべきか。・・・私に何ができるのか。”

エリアドは、そう思つと今一度あたりをじつと見回した。

魔性の瞳・177 「警戒」（後書き）

更新が遅くて大変恐縮です。公的に色々有りまして、更新どころでは有りませんでした。暫く、この状況が続くと思います。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

それは全く不意打ちの様だった。余りにも圧倒的な“氣”が爆発的に生じた。強大なその“氣”は、圧力を増しながら大聖堂に近づいてくる。

程なく、その“氣”を発する者が顯れた。ゆっくりと、大聖堂の扉を目指し、恐怖を引き起こす三つの影が回廊の奥に顯れた。

比較的小柄な黒衣の人物を、一つの巨大な黒衣が挟んでいる。徐に、その強大な影がそれぞれの得物を引き抜いた。それは、見るだけ恐怖を覚える長大な両手剣と、凶悪な両頭の大戦斧だった。

回廊の奥に現われた相手がドレッドロード、・・・いや、あるいはそれ以上に強大な“力”を持つ者かも知れぬ そんな思いをエリアドは感じていたが、この者たちを相手に“阿修羅”を抜こうとは思わなかつた。

何故なら、さきほどの相手と異なり、この者たちはまだこの世の“理”<sup>じとわり</sup>のうちにある存在だと感じていたからだ。“阿修羅”<sup>じとわり</sup>は、いかに強大な“力”の持ち主であろうとも、この世の“理”<sup>じとわり</sup>の内にある者と戦う時に使うべき剣ではない。

とはいって、ドレッドロード以上に強大な“力”を持つ相手が三人ということになると、自分一人ではいささか分が悪いと言わざ

るを得ないことも事実だろう。いや、一人でさえ、まともに相手にできるかどうか。だが、それでも“阿修羅”を使う訳にはいかなかつた。

しかも、この時のエリアドには、後世手にする事になる漠羅爾バクラーの天雷の宝刀“雷電”も、地流の剛刀“震電”もなかつた。彼らの“力”に対抗し得るかもしけぬ唯一の可能性は、“炎の鎧”と“双炎剣”のみであつた。

「・・・エリアド・ムーンシャドウの名において、“正義”を為さんがため、私は“汝”を求める。・・・“双炎剣”よ、我がもとに。」

巻き上がつた真紅の炎とともに、一振りの細身の漠羅爾刀が手の中に現れる。

「・・・何者か?」

強大な“氣”を放ちながら近づく三人に、エリアドは静かにそう問うた。

魔性の瞳 - 178 「臨戦」（後書き）

お待たせしました。魔性178話をお送りします。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

「・・・」

漠羅爾の聖宝『大地の鎧』が一つ、『炎の鎧』 創世の杯と護符の加護を受けたその力は、炎の荒ぶる力そのままに燃え上がる。

「・・・」

だが、何をにも気を取られる事も無く、三つの黒衣の影は着実に近づいてくる。長く伸びるその影から、今までさえ強大な圧力がいやが上にも増していく。

「・・・」

ただ無言で歩を進めてきた三つの黒衣。何を思い、何を求めるかは不明だが、その者達が発する非常識なまでの“脅威”は、疑うべくも無い。その力の余波を受けて、周囲の空間までもが軋むような感覚さえも受ける。

『シャリイイイ』

突然 Hリアドまであと20m位のところで、真ん中の小柄な黒衣が手にした錫杖を一回、上下に振るつた。錫杖は、その頂上部の装飾に付けられた幾つかの円環が互いに澄んだ音を立てる。

『「ウツ！――！』

次の瞬間。その黒衣の影の足下から、四方に闇が放たれ、見る間に周囲を闇で埋めてゆく！

**魔性の瞳 - 179 「暗冥」（後書き）**

魔性179話です。大変短くて恐縮です。今後、少しスペースをあげられるかな、と一抹の希望を抱いております、ハイ。

ヴェロンンティ連合王国／王都／大聖堂

“闇”が迫る。

迫る“闇”そのものに、私が“恐怖”や“脅威”を感じることはなかつた。とはいへ、

これだけの“氣”を放つ者たちを相手に、はたして今の自分にどれだけのことができるだらう？

そんな迷いがまったく浮かばなかつたと言えば、嘘になる。

『・・・天空に風。・・・大地に水。・・・人心に炎。』

私は静かに瞑目し、心の中で“聖句”を唱える。

自らの心を静めるために。迷いを迷いのまま、心に止めぬために。

そう、さきほどあのラ・ルという男と対峙して、私には一つわかつたことがあつた。

“聖句”は“聖句”であるがゆえに“力”を持つわけではない。

はからずもあの男の発した“闇句”がそれを教えてくれた。

“聖句”は自らの“覚悟”を“覚悟”として、“決意”を“決意

”として心に刻むことによつてこそ、己の“力”を引き出し得る“鍵”となる。それは、己の“心”“技”“体”を磨くことによつて、己自身の内なる“力”を引き出す『炎の鎧』の根源にも通じるものだ。

ならば・・・。今の私にできることは唯一つ。己と己を支えてくれる“心”“技”“体”を信じること。

自らのうちににある“心”“技”“体”的三つの扉を押しあけ、それによつて導かれる“力”を最後の扉へと導く。

『・・・我が想い“炎”となりて、我が身をまとえ。・・・我が元に来たれ、『炎の鎧』。烈火、招来！』

一振りの双炎剣に続いて、一際大きな真紅の炎が全身を包む。  
古代  
バカラ  
漠羅爾が聖宝『大地の鎧』が一つ、『炎の鎧』。

『・・・我、闇を照らす灯火とならん。』

私にとつては、それもまた“師”と交わした誓いの言葉である。

周囲が闇に染まろうとも。  
強大な脅威が迫ろうとも。

己が道を見いだした者にとり、それが何の脅威になろうか。



魔性の瞳 - 180 「明晰」（後書き）

魔性180話です。迫り来る暗黒の影に、エリシア、レムリアは如何に対抗するのでしょうか。続きを刮目してお待ちください。

ヴェロンティ連合王国／王都／回廊

小柄の黒衣が放った闇は、四条の稻妻のよつに幾条もの軌跡を描いて周囲の空間を染め上げた。辺りは、瞬く間に漆黒の帳に包まる。

そこには、いかなる光も無かつた。

そこには、いかなる音も無かつた。

そして　そこには、いかなる生命の息吹も感じられなかつた。辺りの様相がまるで変化してしまつたのだろうか。全てが、判然としない、深い闇に覆われていた。

強大な何がが、大聖堂の方向から迫つていた。レムリアは、己の精神が軋むような　それ程までに強い力が、更に容赦なく増していくのを感じていた。

“早く・・・もつと、早く！”

必死で走つているのだが、もどかしい程先に進まない。そういう内に、全てが手遅れになるかも知れない。

最悪の予想が胸を過ぎる。

“ 惑わされは・・・しないつ ! ”

心を強く保ちながら、レムリアはハリー、セイ、親衛王騎士達の先頭を切って、大聖堂へと通じる回廊へと走り込んだ。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

無明の“闇”があたりを支配する。一瞬、五感を奪われたかのような錯覚に陥るが、しかし私にはそうではないという確信があった。かつて“阿修羅”的持つ“闇”に呑まれようとした時、私は同じような状況に陥ったことがある。その時には、自分という存在を保つことさえ困難に思えたが、今はけしてそうではなかつたからだ。

「……c o g u t o , e r g o s u m .」

そう。私は今、確かにここに在る。ならば、これは“闇”であつても“虚無”ではない。

そして、私は思い出す。

『・・・君は“闇”とは何か、考えたことがあるかな?』

それは穏やかで落ち着いた優しい聲音。

かつて私がまだ最初の旅に出る前、ある人から聞いた言葉だった。旅に出ることを決意するきっかけになつた言葉もある。

『多くの人は、漠然と「“闇”は存在する」と考へている。しかし、“光”が当たれば“闇”はそこから消え失せる。けしてどこか別の場所に移るわけではない。まるで最初からそこに存在していなかつたかのように消えてなくなつてしまつ。言い換えれば、“闇”とは“光”が存在しない状態のことであつて、“闇”と呼ばれる“何か”が存在しているわけではないという見方もできる。』

不思議な笑みを浮かべて、その人はこう続けた。

『・・・ならば、人はなぜ何も存在しないはずの“闇”に恐れを抱くのか、君にはわかるかな?』

「・・・すっかり忘れていたな。」

私は小さく呟く。

わからなかつたその問いの答えを探すために、私は旅に出る決意をしたようなものだ。

しかし、多くの困難に満ちた冒険行の中、いつしか問い合わせの記憶の奥深くに埋もれていた。

けれど、ずっとわからなかつたその問いの答えが、不意にわかつたような気がしていった。

・・・人が“闇”に恐れを抱くのは、おそらく“闇”の中では何も見ることができぬからだ。

見えぬことはわからぬことであり、わからぬことが不安を呼ぶ。どんな人にも心の中に見えぬものわからぬことがあり、人はそれに不安を感じながら生きている。

なぜなら、人は他人の考え方を知ることも、また未来を見通すこともできぬからだ。

それが不安を “闇”を増大させる。

そして、計り知れぬ不安 “闇”は、やがて恐れとなる。

言い換えれば、人は“闇”を恐れるのではなく、見えぬものわからぬことを恐れているのかもしれません。

『・・・ならば、“光”とは何か?』

あの人の中が聞こえたような気がした。

“闇”が恐れをもたらすと考えるなら、“光”は何をもたらすのだろう? そう考えれば、答えは簡単だつた。

そう、“光”によつて、人は“闇”から解き放たれ、そこに何があるかを知る。

星々と放浪者の神と言われるセレスティアンが宇宙の闇の彼方に何を求めて旅を続けているのか。

「・・・知は“光”なり か。」

ずっと氣づかなかつた。答えはずつと自分のすぐ目の前にあつたのに。

ならば、“闇”を 恐れを直視し、向かい合わねばならぬ。そして、恐れを “闇”を直視するためには・・・。きっと、あの人なら当たり前のようになり、ここに“光”を呼ぶのだろう。

私にはそんな風に思えた。

・・・だが。はたして自分に、あの人と同じように“光”を呼べるのだろうか?

あまり認めたくはなかつたが、そんな“迷い”があるのもまた事実。そして、その“迷い”があるつちは、私に“光”を呼ぶことはできないだろう。

「ならば・・・」

私は決意する。

古来、それは人間<sup>ひと</sup>が“闇”に抗するため、太陽<sup>ひ</sup>の光の代わりに求めたもの。

私には、“光”を呼ぶことはできぬかもしれないが、それを呼ぶことはできる。

それは、夜の“闇”に挑むため、人間<sup>ひと</sup>が手に入れた最初の武器。

今一度、決意を込めて、私は呼ぶ。

『・・・“紅蓮”よ、来たれ。我が元に。』

そして、灼熱の炎が“闇”を明々と照らし出す。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

レムリア、セイ、ハリーの三人を先頭に、六人の親衛王騎士が続  
く回廊の前方は既に闇に閉ざされていた。

「闇に閉ざされてるぞ！」

ハリーが叫ぶ。

「抜刀して突撃するつ！」

セイが聖剣ノルンを引き抜くと、その刀身から目映いばかりの白  
光を放つ。それは、先程の妖魔とは比較にならない程強大な悪意が  
存在する証だ。

「御敵覆滅つ！！」

裂帛の気合いで聖剣を袈裟懸けに振るうと、セイは闇に突入した。  
一瞬遅れてハリーも守護の剣ヴァンガードを引き抜いてセイに続  
く。

「・・・」

きつく唇を噛むと、レムリアは宝剣タインを握り直した。ザツと、  
そのレムリアの廻りを六人の親衛王騎士が取り囲む。

「行きます。」

静かに言つと、レムリアは親衛王騎士に囮まれたまま、一人の後を追つて闇に飛び込んだ。

漆黒の闇だつた。視界は全く効かない。ただ、圧倒的なプレッシヤーに、五感全てが麻痺するようだつた。

ハリーは腰を落とし、半身になつてヴァンガードを斜め下段に構えるとじりじりと進んだ。

五感が役に立たない今、頼りになるのは己の研ぎ澄ませた勘だけだつた。

周囲の“気”を慎重に探る。そして、その慎重な行動が、今際の一撃からハリーを救うことになつた。

「……」

『ギッギイイインッ！……』

手が痺れる程の剃刀のような連撃を間髪防ぐ。スワローカット 同時の攻撃をも、一撃で受け止める秘技だ。

“・・・首が飛ぶところだつたぜ・・・”

背中に嫌な汗が流れ落ちる。ハリーは勘を更に研ぎ澄ませた。

嫌が上にも目映く輝くノルンを両手で握ると、セイは呼吸を整えた。五感を奪われた闇の中では、先手を打つことが難しい。だが、

カウンターならば判らない。ノルンを中段に構えると、重心を心持ち下へ そこへ、重い一撃が来た。

身を回しながら落とすことによつて間髪その斬撃をやり過ごすと、一回転しながらその身を捻つて剣を上段へ。そして、一気に流星のように振り下ろした。全て一連の動作で、一見不可能な重心移動による防御からの攻撃である。

「くっ・・・」

だが、滅多なことでその的を外さない銀の軌跡は何をにも触れることなく空を切つた。一瞬、乱れた呼吸を整えながら、セイは次の一撃を待つた。

“ 何も見えない ”

漆黒の闇に取り巻かれて、レムリアは何ら動じていなかつた。闇を恐れる謂われもない それは、夢見の鍛錬の賜だつた。

もつとも、レムリアは自分の白兵戦力がハリーやセイと比べて著しく劣つてゐるのを知つていた。それでも、レムリアをここまで突き動かしたのは、その余りにも強大な悪意だつた。

「・・・」

自分の呼吸の音すら聞こえない。地面に立つてゐるのかも判然としない。廻りを護衛してゐる筈の親衛王騎士の存在は全く感じられない。唯一判るのは、左手に握つたタインの存在だつた。

ヴェスベの森の宝剣タイン。その守護の石より生み出された“ 金属ではない ” 刃を持つ剣 それは、護りに於いて絶対的な力を發

揮する。

レムリアは両手でタインを握りしめると青眼に構えた。セイやハリーに剣技を師事したのは伊達ではない。その剣先には、相手を判断する鋭さが宿っていた。

「・・・

レムリアはその双眸を開き、無我の境地で相手からの攻撃を待つた・・・。

**魔性の瞳 - 183 「突入」（後書き）**

お待たせしてしまって申し訳ありません。生活環境改善中なので、思つ様に更新が出来ません。暫く非常に不定期、亀更新となります。が、宜しくお願ひ申し上げます。

ヴェロンティ連合王国／王都／大聖堂

周囲の闇が濃い。

じつとりとした空気が重い。

何も見えぬ中、五感を研ぎ澄ませる。

ただ、レムリアが感じるのは『己』が手にした暖かい力　守護の聖剣タインのみ。

「！」

とつさに動いたのは、まさに無我の境地だったのだろう。そして、その無心の心がこそ、『後の先』とも言われる聖剣タインの力を最大に發揮する。

『ザシヤツ！－！』

闇を、銀の流星が一条の弧を描いて天空へと走る。確実な手応えと共に、レムリアは闇を切り裂いた。霧が晴れるように、辺りに光が戻ってくる。

「お見事です」

静かな声で、中央の小柄な黒衣の影が言う。ハリー、セイ、六人の親衛王騎士、そしてエリアド　まだ、誰も倒れては居ない。左右の巨大な黒衣の戦士は、『己』が得物を納めていた。

「姫君は成長された様ですね。それはそれで、喜ばしいことです」

「あなたがたは・・・」

「今日はご挨拶のみ。近日中に、また正式に参ることに致しましょ

う」

シャリィイイィン、とその錫杖が音を発すると、黒衣の三人の居る空間がグニヤリと歪曲する。

「“黄昏の三騎士”と我らは呼ばれています。それでは、機嫌よう、夢見の姫君・・・」

三人の姿が消えると共に、周囲に掛かっていた強大なプレッシャーも焼き消えていった。

**魔性の瞳 - 184 「幕引」（後書き）**

実に長きに渡つてお待たせしておりました。今後も仕事が多忙で不定期更新ですが、継続して参ります。宜しくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7936e/>

---

魔性の瞳

2012年1月14日17時53分発行